

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第164集

本郷坪遺跡

平成16年度総合科学技術高校(仮称)建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第164集

本郷坪遺跡

平成16年度総合科学技術高校(仮称)建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

本郷坪遺跡が所在する静岡市葵区長沼地区は、その地名が示す通り、東西に長い湿地帯であり、およそ30年前までは見渡す限り水田風景が展開していた。近年、当地区も市街化が進行し、旧静岡・清水両市合併後に政令市となった静岡市の新たな政治・経済・文化の中心となる地域とも考えられている。このような地域社会の動向の中で、工業・技術系の高等学校が新設される運びとなり、その建設工事に先立って当研究所が平成15年度に埋蔵文化財の確認調査を、翌16年度に本調査を実施した。この調査で奈良時代から近世に至る水田跡が約1ヘクタールの調査区全域で検出され、このうち律令期の条里制における里・町の境界線と目される畦畔が確認された。これらの条里畦畔は、平成6年度に当研究所が発掘調査を行なった静岡市駿河区曲金北遺跡の主たる成果の一つである古代東海道の道路構造との関わりで注目に値する遺跡である。

一方、これまで静岡平野の各所で弥生時代の水田跡が調査されてきたが、今回の本郷坪遺跡の調査では古墳時代中期から後期にかけて起きたとされる安倍川の大氾濫以前の水田跡のみならず文化層そのものが存在しないことも確認され、人々の営みの始まりは同じ沖積平野においても一様ではないことが改めて認識されることになった。本郷坪遺跡において「ない」ものと言えば生活城、すなわち集落跡もそうである。遺跡の北西側直近に谷津山塊が聳え、その南東麓に現代の住宅が軒を連ねている現実から類推して古代～近世の集落跡が間近に存在すると考えられるのであるが、結局、この広大な水田の經營主体について考察する手掛かりを得ることができなかつたのは、いさか心残りではあった。

しかし、水田跡のみで構成された遺跡にもかかわらず、多數の土器・陶磁器・金属製品が出土し、特に土器類は、古墳時代から近世に至る様々な時期および產地のものが見られ、やはり古代東海道および近世東海道と中世期の東海道と推定される北街道に挟まれ、しかも静清平野全体の中心部という立地を反映したものであろう。まさに駿府という都市の近郊農村の賑わう風景を彷彿させる品々である。そもそも、北西に聳える谷津山塊の頂には県内でも有数の規模の前方後円墳である谷津山1号墳が造営されており、元来は本郷坪遺跡を含む谷津山南・東麓地域がかつて静清平野のみならず静岡県中部地方の中心であった可能性も否定できない。また、幅広い時期の遺物がほぼ单一の遺構面において出土したという事実は、最初の農耕が人植して以来幸いにも大災害に見舞われず、農民が營々と同じ土地を守って耕し続け、水田の維持・管理に心血を注いだ証とも言えるのである。

最後に、現地調査と資料整理に御援助・御指導を頂いた静岡県教育委員会財務課、同文化課、静岡市教育委員会をはじめとする関係諸機関に厚く御礼申し上げたい。また、現地で掘削される瓦礫と称してよい表層土の量は膨大で、しかも調査中幾度も台風・豪雨が現地に襲来し、そのたびに調査区は水没し、さながら一夜にして成了た大池のごとき様相を呈した。當時20数名という比較的少人数での発掘調査はまさに遺跡の広さそのものとの格闘であったと言ってよく、この場を借りて調査に従事した作業員ならばに調査員の労苦をねぎらいたい。

平成17年12月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例 言

- 1 本書は静岡県静岡市葵区長沼地内に所在する本郷洋漢跡の発掘調査報告書である。
- 2 確認調査は平成15年度総合科学技術高校（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県教育委員会財務課からの委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成15年5月～6月まで実施した。本調査は平成16年度総合科学技術高校（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県教育委員会財務課からの委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成16年7月～平成17年3月まで実施した。
- 3 資料整理作業は平成17年5月～10月まで実施した。
- 4 調査体制は以下の通りである。

平成15年度（確認調査）

所長 斎藤 忠、副所長 飯田英夫、常務理事 条田徳幸、総務部次長兼総務課長 鈴田英巳
会計係長 野島尚紀、調査研究部長 山本昇平、調査研究部次長兼資料課長 栗野克己

調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三、調査研究員 大林 元

平成16年度（本調査）

所長 斎藤 忠、副所長 飯田英夫、常務理事 平松公夫、総務部次長兼総務課長 鈴田英巳
会計係長 野島尚紀、調査研究部長 山本昇平、調査研究部次長兼資料課長 栗野克己

調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三、調査研究員 大林 元、木村淑子

平成17年度（資料整理）

所長 斎藤 忠、常務理事 平松公夫、総務部次長兼総務課長 鈴木大二郎

事業係長 野島尚紀、調査研究部長 石川栄久、調査研究部次長 栗野克己

調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三、調査研究員 大林 元

- 5 本書の執筆は第4章第4節以外については調査研究員 大林 元が行なった。
- 6 動植物遺存体の自然科学的分析は㈱ジエネティックに委託した。なお、第4章第4節の執筆は同社の花森功仁子、同社より鑑定の依頼を受けた佐藤洋一郎氏（総合地球化学研究所）および松井 章氏（奈良文化財研究所）が行なった。
- 7 現地での基準点測量、空中撮影、写真測量ならびに測量図測地変換は㈱中日本航空に委託した。
- 8 金属製品・木製品の保存処理および遺物の写真撮影は当研究所技術員等が実施した。
- 9 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行なった。
- 10 発掘調査の資料は、静岡県教育委員会が保管する。

凡 例

- 1 本書では遺構表記（略号）は用いず、遺構は一貫して普通名詞で直接記載する。
- 2 本書の遺物の表記は材質等にかかわらず、全て挿図掲載順の通し番号としているため、アルファベット等で表される遺物略号は使用しない。
- 3 本書で使用した方位は全て国土座標の方位である。また、国土座標値は特に断りがない限り世界測地系に基づいている。

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	2
第3節 発掘調査の経過	4

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7

第3章 層位と遺構

第1節 基本土層	11
第2節 律令期以前の遺構	13
第3節 律令期～中世の条里制水田遺構	14
第4節 近世以降の遺構	16

第4章 出土遺物

第1節 土器・土製品	19
第2節 金属製品・石製品	38
第3節 木製品	42
第4節 自然遺物	44

第5章 遺跡の評価

第1節 遺物の分布と各町畔・水田の施設時期	75
第2節 静清平野の広域条里制における本郷坪遺跡	88

第6章 まとめ

参考文献	94
------	----

挿図目次

第1図 本郷坪遺跡位置図	1
第2図 調査区位置図	2
第3図 調査区・グリッド設定図	3
第4図 周辺遺跡分布図	9
第5図 土層柱状図	11
第6図 グリッドトレンチ土層堆積図	12
第7図 条里水田開田以前の溝状遺構・断面図	13
第8図 1区遺構平面図	卷末別刷
第9図 2区遺構平面図	卷末別刷
第10図 3区遺構平面図	卷末別刷
第11図 4区遺構平面図	卷末別刷
第12図 南北坪界畦畔北端部平面図	14
第13図 南北坪界畦畔断面トレンチ北壁セクション図	14
第14図 東西里界畦畔断面トレンチ東壁セクション図	14
第15図 護岸列石付畦畔・溝状遺構平面図	17・18
第16図 護岸列石付畦畔・溝状遺構セクション図	17・18
第17図 須恵器実測図①	20
第18図 須恵器実測図②	21
第19図 灰陶器実測図①	22
第20図 灰釉陶器実測図②	23
第21図 山茶碗実測図	24
第22図 古瀬戸製品実測図	26
第23図 大窯期瀬戸・美濃製品実測図	26
第24図 その他の中世陶器実測図	28
第25図 舶載磁器実測図	28
第26図 近世瀬戸・美濃製品実測図①	28
第27図 近世瀬戸・美濃製品実測図②	29
第28図 近世志戸呂製品実測図	30
第29図 肥前陶磁実測図	31
第30図 瀬戸磁器実測図	31
第31図 古墳時代土師器実測図	33
第32図 奈良～平安時代前期土師器実測図	33
第33図 平安時代中・後期土師器実測図	33
第34図 中・近世土師質土器実測図	34
第35図 瓦実測図	37
第36図 金属製品実測図①	39
第37図 金属製品実測図②	40
第38図 銅貨拓影図	41

第39図	石製品実測図	42
第40図	木製品実測図	43
第41図	II層出土土器時期別点数一覧	76
第42図	III層出土土器時期別点数一覧	76
第43図	IV層出土土器時期別点数一覧	76
第44図	V層出土土器時期別点数一覧	76
第45図	1区IV層出土遺物分布図	77・78
第46図	2区IV層出土遺物分布図	79・80
第47図	3区IV層出土遺物分布図	81・82
第48図	4区IV層出土遺物分布図	83・84
第49図	IV層蛙畠施設時期概念図	85・86
第50図	旧表層条里地割・検出遺構関係図	90
第51図	静清平野の広域条里（里界線）と古代東海道駅路想定線	91

挿 表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表	8
第2表	出土土器観察表	61
第3表	出土金属製品観察表	72
第4表	出土石製品観察表	74
第5表	出土木製品観察表	74

写 真 図 版 目 次

図版1	1 本郷坪遺跡遠景 (南西南より)	2 1・2区全景 (北東より)
図版2	1 3・4区全景 (南東より)	2 3・4区水田跡検出状況 (北より)
図版3	1 3区E5グリッド 東側排水溝V層下砂利層 土師器壊身出土状況	
	2 舶載磁器 青磁碗	3 舶載磁器 白磁碗206
	4 その他の舶載磁器 (外面)	5 その他の舶載磁器 (内面)
図版4	1 国產磁器	2 古瀬戸 天目茶碗・絵釉小皿
	3 その他古瀬戸製品 (外面)	4 その他の古瀬戸製品 (内面)
	5 大窯期瀬戸・美濃製品 (外面)	6 大窯期瀬戸・美濃製品 (内面)
	7 志戸呂丸皿187	8 志戸呂丸皿192
	9 中世志戸呂・初山・常滑製品 (外面)	
	10 中世志戸呂・初山・常滑製品 (内面)	
図版5	1 近世瀬戸・美濃天目茶碗・餌猪口・灯明受皿	
	2 近世志戸呂製品 完形復原・底部	3 志野丸皿207

- 4 近世瀬戸・美濃製品口縁部（外面） 5 近世瀬戸・美濃製品口縁部（内面）
 6 近世瀬戸・美濃製品底部（外面） 7 近世瀬戸・美濃製品底部（内面）
 8 その他近世志戸呂製品（外面） 9 その他近世志戸呂製品（内面）
- 図版6 1 1区 水田跡検出状況（南西より）
 2 1区 南北坪界畦畔検出状況（北西より）
 3 1区B4グリッド 蔽岸列石付溝状造構完掘状況（東南東より）
- 図版7 2区 東西里界畦畔検出状況（西南西より）
- 図版8 1 1区B5グリッド 南北坪界畦畔断削トレンチ北壁セクション（南東より）
 2 2区B1・2グリッド 東西里界畦畔断削トレンチ東壁セクション（南南東より）
 3 2区B2・3グリッドV層 溝状造構完掘状況（南東より）
- 図版9 1 1区A5・B5トレンチ北壁 南北畦畔検出状況
 2 1区B5・B6トレンチ西壁 東西畦畔検出状況
 3 1区B6・B7トレンチ西壁 南北坪界畦畔検出状況
 4 3区C5・C6トレンチ東壁 南北坪界畦畔検出状況
- 図版10 1 3区C5・D5トレンチ北壁 南北坪界畦畔検出状況
 2 3区D4グリッド 南北畦畔断削トレンチ 北壁セクション（南東より）
 3 1区B4グリッド 蔽岸列石付畦畔・溝状造構断削トレンチ 東壁セクション（南西より）
- 図版11 1 1区B6・B7トレンチIV層 知多産堀142出土状況
 2 1区B6・C6トレンチIV層 須恵器長頸壺42出土状況
 3 1区A4グリッドⅢ層 美濃小舟266出土状況
 4 1区A4グリッド南北畦畔付近Ⅲ層 志戸呂筒形容器277出土状況
 5 1区C5・C6トレンチIV層 自在鉤459出土状況
 6 1区B4グリッドIV層 刀子433出土状況
 7 1区B4グリッド謙岸列石付東西畦畔直上 横櫛461出土状況
 8 1区B5グリッドIV層 嘉祐元寶449出土状況
- 図版12 1 2区A3グリッド謙岸列石付溝状造構 鉄製品446出土状況
 2 3区C5グリッドⅢ層 煙管雁首413出土状況
 3 3区D5グリッド南北畦畔直上 黒寧元寶448出土状況
 4 3区D4グリッド南北畦畔直上 桃核出土状況
 5 3区D5グリッドIV層 馬首出土状況
 6 3区D5グリッドV層 開元通寶447出土状況
 7 4区C3グリッドⅢ層 元豊通寶451出土状況
 8 3区D4グリッド東西畦畔直下 横櫛458出土状況
- 図版13 1 古墳時代 須恵器 2 律令期 須恵器底部 3 その他律令期 須恵器
 4 灰釉陶器 瓢 5 灰釉陶器 盆・小碗 6 灰釉陶器 壺・甕
 7 灰釉陶器 皿96 8 灰釉陶器 碗転用品74
- 図版14 1 山茶碗 小皿・盤・碗 2 その他山茶碗 3 志野製品（外面）
 4 志野製品（内面） 5 古墳時代 土師器坏身 6 その他古墳時代 土師器
 7 奈良時代 土師器 坏身330 8 平安時代前期 土師器 駿東型坏344
 9 その他律令期 土師器

- 図版15 1 平安時代中・後期 土師器 2 土師質土器 カワラケ
3 土師質土器 鍋・その他（外面） 4 土師質土器 鍋・その他（内面）
5 瓦（上面） 6 瓦（下面） 7 土師質土器 カワラケ368
8 垣石457 9 條物460
- 図版16 1 横櫛461 2 杵状先端・自在鉤・箸 3 横櫛458
4 扁平管状鉄製品446 5 鉄製刀子・鑿・鍛滓 6 その他鉄製品
7 煙管 8 その他銅製品
- 図版17 1 銭貨（正面） 2 銭貨（背面） 3 炭化米塊

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成14年11月25日、静岡県は県立静岡工業高校と県立清水工業高校を再編整備する「総合科学技術高校（仮称）」の候補地として、静岡市駿区長沼の日東紡績静岡工場跡地を選定した。総合科学技術高校は平成12年2月に策定された「静岡県立高等学校長期計画」に基づき、将来のスペシャリストなどを育成するのに相応しい地域の産業・技術教育の拠点として整備されるものである。平成14年度中に新設校予定地内の工場建物は解体・撤去され、更地となった約55,000m²については周知の遺跡ではなかったが、隣接地域では静岡市教育委員会による既往の試掘調査で弥生～平安時代頃の遺跡の存在が確認されていることもあり、当地についても埋蔵文化財の存否確認が必要と考えられた。

平成15年2月4日、総合科学技術高校（仮称）予定地の埋蔵文化財調査について、予定地の管理者である県教育委員会財務課、同文化課、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の三者で協議を行なった。ここにおいて県教育委員会文化課係より提出された計画書に基づき平成15年度の確認調査が予算化され、確認調査の結果、本調査が必要と判断された場合には平成16年度に実施する予定であることが確認された。確認調査の対象範囲は予定地周辺での静岡市教育委員会の既往の試掘調査の結果等を勘案して、予定地の北西部15,600m²を定められ、平成15年5月1日、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所による確認調査が開始された。これに先立ち、平成15年4月25・27日に地元3町内会を対象に総合科学技術高等学校（仮称）整備に関する説明会が開催され、県教育委員会文化課および当研究所の担当者も埋蔵文化財調査の周知をはかるべく説明した。確認調査は当初2ヶ月の予定で、上幅10×10mのテストピット7基を重機により掘削し、人力でその壁面を整形して土層堆積や遺物・遺構の存在を確認・記録した後、直ちに埋め戻す方法が採られた。

テストピット7基の掘削と埋め戻しは早くも平成15年5月末に終了したが、地表下2～3mにおいては予想された弥生時代の文化層が認められなかった。一方、調査地の南約600mには静岡市駿河区苗金北遺跡で発見された古代東海道が北東～南西方向に走っており、これとの関連で古代の条里削溝が存在する可能性も考えられた。事実、条里畦畔らしき遺構を1基のテストピット（TP6）の拡張部で検出していたのである。そこで、予め古代の坪界・里界となる遺構が予想される位置の見当をつけ、砂礫層を掘り抜かない程度の最大深度1.5m程度の比較的浅いトレーナー4本を重機で掘削し、その壁面を観察することにした。この調査方針の転換は平成15年5月31日に前回とは別の1町内会を対象にした地元説明会でも説明した。やがてほぼ予想通りの遺構を確認し、或る程度時期を推定する事が可能な遺物も幾許か得て同年6月30日に現地から撤収した。この確認調査の結果を受けて、確認調査対象地のうち10,000m²について翌平成16年度に本調査を実施することが決定された。

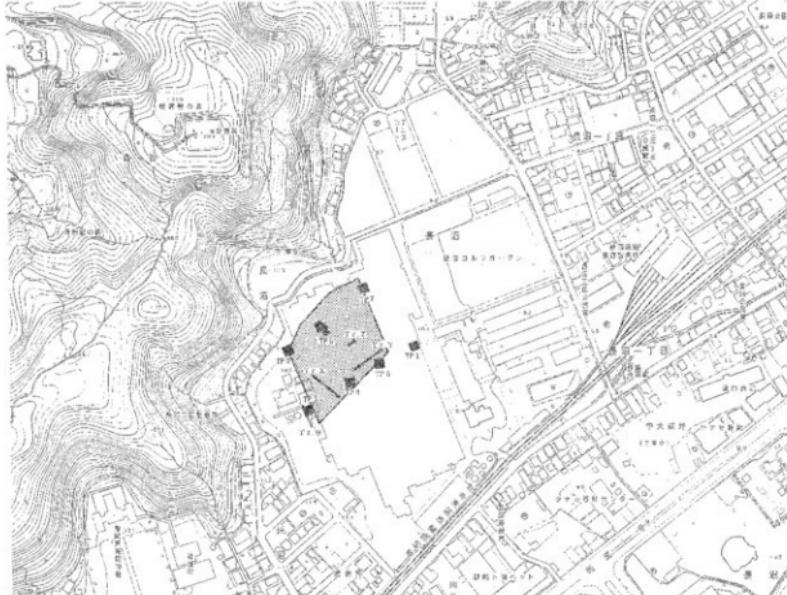


第1図 本郷坪跡位図

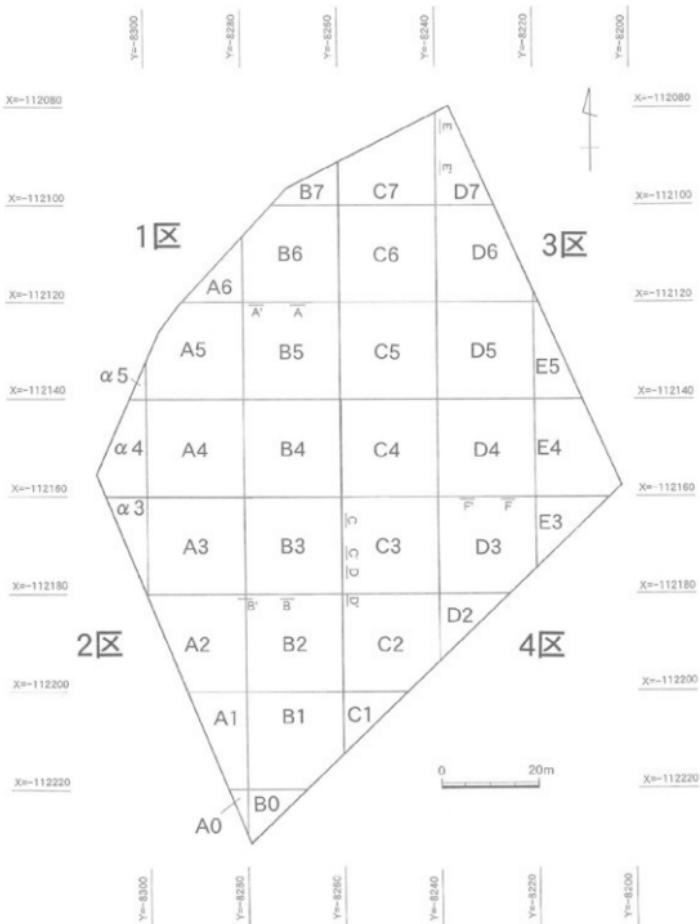
第2節 調査の方法

調査区は谷津山塊の東端に位置する愛宕山を北側に控えているため、北西からの大風の害は少ないが、南と東は広大な新設校予定地が更地であることに加えて特に盛夏期に始まる本調査であったため、直接に風が調査区や排水装置場に吹き付け、北側の住宅地に敷盤の害を及ぼす恐れがあった(第2図)。そこで、調査区南側に設定した約5,000m²の排水装置場の排水の山を重機で堅固に叩き締め、ブルーシートと土ノカウで手厚く養生するとともに、調査区全周440mを高さ4mの防塵ネットフェンスで囲み、砂塵飛散防止に努めた。このフェンスの支柱にかかるヤードや重機・作業員の通路の確保、さらに現地表からの平均深度約1.2mとは言え表層土崩落の危険性から法面掘削勾配をかなり緩くせざるを得なかった(45°)ことなどにより、調査区上面面積10,000m²に対し同下面面積は結局9,100m²となった。この調査区下面に国土座標の方位に従って東西南北20mごとにグリッド杭を打設した。20×20mの各グリッドの南西コーナーに打たれているグリッド杭の番号を以てグリッド名としたが、西から東へはアルファベット、南から北へは数字を用い両者を組み合わせた呼称となっている(第3図)。ただし、国土座標Y=-8,300mでA、同X=-112,220mで1と定めてしまったため、Aの列より西のグリッドをαで、1の行より南のグリッドを0で表現することにした。また、広大な調査区で効率よく掘削・記録の作業を遂行するべく、B・C列間および3・4行間で調査区を4分割し、北西部を1区、南西部を2区、北東部を3区、南東部を4区と呼称した。各区の面積は1区が2,300m²、2区が2,100m²、3区が3,300m²、4区が1,400m²で、計9,100m²である。調査は1、2、3、4区の順に進行した。

本郷町造跡は低湿地遺跡であるため、常時排水が不可欠である。調査区下面外周に排水溝を巡らし、



第2図 調査区位置図



第3図 調査区・グリッド設定図

集水井3ヶ所に200V水中ポンプを設置して湧水・雨水に対処した。

当遺跡の記録保存の手段は実測と写真撮影である。当研究所担当調査員および作業員が遺物位置・標高を測量、遺構の平・断面図を実測し、これらの作業にトータルステーションを使用した。遺跡全体平面図については手実測と併せて外部委託による写真測量も実施した。これらの実測図の縮尺は1/100、1/20または1/10である。写真による記録は大型カメラ(4×5)・中型カメラ(6×7)・小型カメラ(35mm)を使用し、モノクロネガ・カラーポジ・カラーネガで保存している。調査区全景の写真についてはローリングタワーを使用しての撮影、および外部委託でラジコンヘリコプターによる空中からの垂直・俯瞰撮影を実施した。

第3節 発掘調査の経過

確認調査の概要については本章第1節で述べているので、本節では主に本調査の経過に言及する。本調査は当初平成16年6月～平成17年1月の工期が予定されていたが、諸般の事情で開始が遅れ、実際の現地調査期間は平成16年7月15日～平成17年2月28日となった。ただし、現地事務所（プレハブ）の設置工はやや先行して平成16年7月8日に開始した。これに先立ち、平成16年7月5日、地元3町内会を対象に本郷坪遺跡の発掘調査への御理解・御協力をお願いする旨の文書を回観板の形で配布し、地域住民に埋蔵文化財調査の周知をはかった。

平成16年7月

調査区および排土仮置場を設定し、重機（パックホウ0.7m³）により表土（I層）の除去を開始した。排土は6tクローラダンプ最大3台で運搬し、排土の整形（叩き締め）にはパックホウ0.45m³を使用した。調査区外周に防塵ネットフェンスを張り、資材搬入や現地事務所設営の一方で、表土が除去された箇所から法面整形や排水溝掘削などの人力作業も併行した。また、調査区を含む県有地内で地質（ボーリング）調査も実施されていたが、今回の発掘調査には特に支障はなかった。

8月

重機による表土除去を続行した。表土除去終了箇所のみ、先行して外部委託による基準点測量およびグリッド杭打設を実施し、グリッドトレレンチを人力掘削した。グリッドトレレンチとは、南北方向のグリッド杭間を結ぶ線分に沿ってその西側を、同様に東西方向のグリッド杭間を結ぶ線分に沿ってその北側を幅50～60cm掘削したものである。また、グリッドトレレンチの両壁に沿ってやはり幅50～60cmの土層帯を残し、調査区内の通路と土層堆積状況の観察の両用を兼ねる施設とした。調査区下面外周の排水溝とグリッドトレレンチの壁面に現れた畦畔の高まりから畦畔が延びる方向を推定した。因みに、グリッドトレレンチはグリッド杭を保護しながら互いに連結されており、調査区内奥の排水溝も兼ねている。人力掘削で生じた排土はベルトコンベア最大12台を用いて調査区外周で待機している2tクローラダンプに積み込み、排土仮置場まで運搬した。19～25日の計5日間、教職員1名の10年研修の社会体験学習を受け入れた。台風の接近に伴い、防塵ネットを一部取り外し、台風一過で復旧した。

9月

重機による表土除去は16日に完了し、グリッド杭打設を再開した。この時点で、前節で述べた調査区の四区分割が明確になった。この月は2度、豪雨に見舞われて調査区全域が水没し、排水のために通常作業を中止せざるを得なかった。通常作業は1区の畦畔上端を平面的に精查・検出し、これを平面実測することが中心となった。



重機による表土除去・運搬



1区 畦畔立体検出

10月

1区の畦畔上端はほぼ検出し、水田面の検出、つまり畦畔を下端まで検出して立体的に出現させる作業を開始した。2区A3グリッドにも進出し、護岸列石付畦畔・溝状遺構の精査を行なった。この月は雨天により作業を中止した日が計6日を数え、台風による調査区の水没や防塵ネットフェンスの破損・撤曲にも1回遭った。

11月

1区の畦畔の立体検出や水路その他の遺構の完掘が終わり、第4週にローリングタワーより1区全体の完掘状況を撮影した。同時に2区のグリッドトレンド掘削や包含層掘削を人力で行なっていたが、第5週より重機（パックホウ0.25m³）を投入して畦畔の上端直上までII・III層を掘削し、作業の迅速化を図った。この時、重機の掘削による排土は2tクローラダンプが調査区内に進入して搬出したが、ベルトコンベアで運ばれてくる人力掘削による排土は低床型2tダンプトラック1台を新たに使用して排土仮置場まで運搬した。

12月

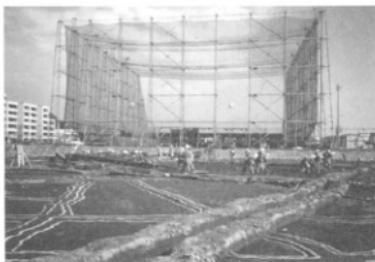
第1週中に2区の重機によるII・III層除去は完了し、続いて3・4区のグリッドトレンド掘削も重機で実施した。これまでの人力による場合も、重機で掘る場合も、グリッドトレンドの底面は湧水等を考慮してVI層上部までの深さとしている。2区の畦畔立体検出が終わり、7日にはローリングタワーより2区全体の完掘状況を撮影し、翌8日、1・2区（調査区西半部）の空中撮影・写真測量を実施した。なお、2区の畦畔を主体とする遺構の上端を平面実測したのはこの後である。第2週には重機が3・4区のグリッドトレンド掘削から同包含層（II・III層）掘削に移行し、24日にこの作業も完了した。一方、重機の作業を追う形で進行していた畦畔立体検出精査と遺構上端平面実測は3区に限り月末に終了した。

平成17年1月

4区の畦畔上端を平面精査で確定次第、畦畔下端まで立体検出した。掘削・精査を優先したため、3・4区ともにグリッドトレンドのセクション実測は後回しとなった。また、4区ではC3・D3およびD3・D4トレンド（総延長40m）の掘削を断念したが、これは工程の省略というよりもむしろ条里の南北坪界線と東西里界線の交差点を破壊してしまうことを避けようとしたためである。12日にローリングタワーより3・4区全体の完掘状況を撮影し、13日にベルトコンベアを回送、14日に3・4区（調査区東半部）の空中撮影・写真測量を実施した。第3週は実測要員のみ出勤し、残りのグリッドトレンドおよび東西里界・南北坪界畦畔断割トレンドのセクション実測、護岸列石付畦畔・溝状遺構その他の遺構の平・断面実測、調査区全城の畦畔下端・水田面の単点標高測量を行なった。



重機再投入



3区 畦畔上端平面検出

1月は当遺跡にとって普及公開の月でもあった。6日に当研究所の斎藤所長が現地視察に訪れ、14日の午前中に鈴木県教育長が現地を視察した。また、この日の午後には茨城県内の埋蔵文化財関係者8名が来訪した。16日には周辺7町内会を対象に現地説明会を開催した。この7町内会とは、総合科学技術高等学校（仮称）建設対策協議会を構成する町内会である。現地説明会の周知については、7町内会の各町内会長に調査担当者作成の「お知らせ」を回覧して頂けるようお願いするにとどめたが、当日来訪した見学者は午前の部68名、午後の部33名、計101名を数え、対象7町内会を越えて静岡市清水区や藤枝市・島田市方面から来られた人も少なくなかった。さらに26日、静岡市立千代田小学校の6年生4クラス142名が教員4名に引率されて現地を見学し、調査担当者は16日の現地説明会同様に対応した。

24日は作業員の最終出勤日として調査区内の養生等の撤去工を実施し、この日のうちに終了した。31日に現地事務所の使用を終了し、重機による調査区の埋め戻しも始まった。

2月

バックホウ0.7m³の重機1台が10tダンプトラック2台に堆土仮置場の堆土を積み込み、ダンプトラックがダンプアップした土砂を15tブルドーザー1台が敷き均すという方法で、2区、1区、4区、3区の順に埋め戻した。埋め戻しに追われる形で遺構実測の残りと、畦畔直下に含まれている遺物の分布を記録するため、全畦畔の解体掘削を実施した。調査区全域の畦畔解体掘削が完了したのは15日であり、重機による埋め戻しが完了したのは24日である。28日、現地の資材を完全撤収し、原状を回復した。

平成17年度、報告書刊行に向けての資料整理作業は当研究所本部にて行なわれた。接合・石膏復原・保存処理した出土遺物自体に加えて作業の過程で作成したそれらの実測図、トレース図、6×7判モノクロネガ・カラーポジ写真、および構造集団を静岡県教育委員会の管理のもとで保管している。



県教育長の現地視察



現地説明会



千代田小学校 6年生の現地見学



重機による埋め戻しと畦畔解体掘削

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

本郷坪遺跡は静岡市葵区長沼地内に所在し、静清平野の中央部。JR東静岡駅より北西に約0.6kmの旧日東紡績静岡工場跡地に広がっている。遺跡の現地表の標高は海拔10m前後で、僅かに西高東低ではあるが、巴川と長尾川の合流点まで非常に平坦な地形が東西に延びている。本郷坪遺跡の位置する静清平野は西・北・東の三方が峻岨な山地に囲まれ、南は駿河湾に面している。西方は高草山地、北方は西から順に安倍山地、駿機山地、竜爪（麻機・沼上・瀬名）山地、東方は庵原山地が並びしており、竜爪山の東麓には糸井川一静岡構造線（フォッサマグナ）が南北に貫通している。また、平野の南部には現在も築起し続ける有度丘陵が静清平野を静岡平野と清水平野とに東西二分画している。これらの山地・丘陵を除き、縄文時代早期の海進期には現在の平野部はほとんどが水域となっていた。

縄文時代後期以降の海退期以来、静清平野を形成してきた主要な河川に安倍川と巴川がある。安倍川は古来氾濫を繰り返した急流大河川で、いわゆる「暴れ川」である。この安倍川の形成した扇状地は駿機山地の南端を扇尖として同心円状に広がっているが、静岡平野の中央部に島状に点在する谷津山、八幡山、有東山の独立丘陵が扇状地の東方への拡大を阻止してきた。一方、これらの独立丘陵や小河川に沿って安倍川がもたらす土砂により微高地が形成され、同時に微高地周辺の低湿地も形成されるという複雑な像相を呈す。本郷坪遺跡もこれら微高地の一支部である長沼微高地に北接する後背湿地に立地している。他方、巴川は安倍川とは異なり、標高差の小さい緩やかな河川で、安倍川の扇状地から北流する小河川と北方の山地から流出する水の集水池となっている駿機低地（浅掘沼）を水源とし、流域で中小河川の水を集めながら清水平野の低湿地を形成し、折戸湾に注いでいる。同じ静清平野といつても、静岡平野と清水平野では成り立ちが大きく異なるのである。本郷坪遺跡は、その北方を東流する巴川水系よりもむしろ安倍川水系の影響をより多く受けた低湿地遺跡と言えよう。

第2節 歴史的環境

本節では本郷坪遺跡の位置する静岡平野東部の各時代の遺跡について概観する。旧石器は有度丘陵西麓の大段I遺跡や宮川遺跡で採集されているが、詳細は不明であり、旧石器時代遺跡の調査事例はないと言ってよい。縄文時代早期以降、当地域でも人間の営みが明確に見られ、北方山地縁辺部では長崎鼻遺跡や時ヶ谷遺跡が縄文時代遺跡として知られており、有度丘陵では早期の押型文土器が出土した宮川遺跡をはじめ、早～中期の遺跡が比較的多く分布する。低地部では元宮川・神明原遺跡で石鏃の他に弓、ヤス、丸木舟などの木製品が出土しているが、海退が始まった縄文時代後期以降の所産である。

弥生時代で最も古い時期の遺跡は安倍川以西の丘陵上に点在し、代表として丸子式土器の標識遺跡となったり中期初頭の丸子セイゾウ山遺跡が挙げられる。静岡平野東部では瀬名遺跡から打製石斧に伴って丸子式土器が出土しているが、同遺跡で検出された水田跡に時期的に伴う可能性については疑問視する向きが強い。確實な居住域と生産域（水田跡）、そして墓域が見られるのは中期中葉以降であり、同時期の集落跡に有東遺跡、瀬名遺跡、川合遺跡、駿府城内遺跡などが挙げられる。このうち、瀬名遺跡の中期中葉～後業の墓域では、四隅で周溝の途絶する方形周溝墓が20基栽培されている。中期後業にはこれらの遺跡で居住域と墓域が拡大する傾向にある。弥生時代後期前半になると平野部の微高地上に集落跡が増加し、生産域も拡大する。これらは小黒遺跡、豊田遺跡、登呂遺跡、沙入遺跡など、主に現駿河区

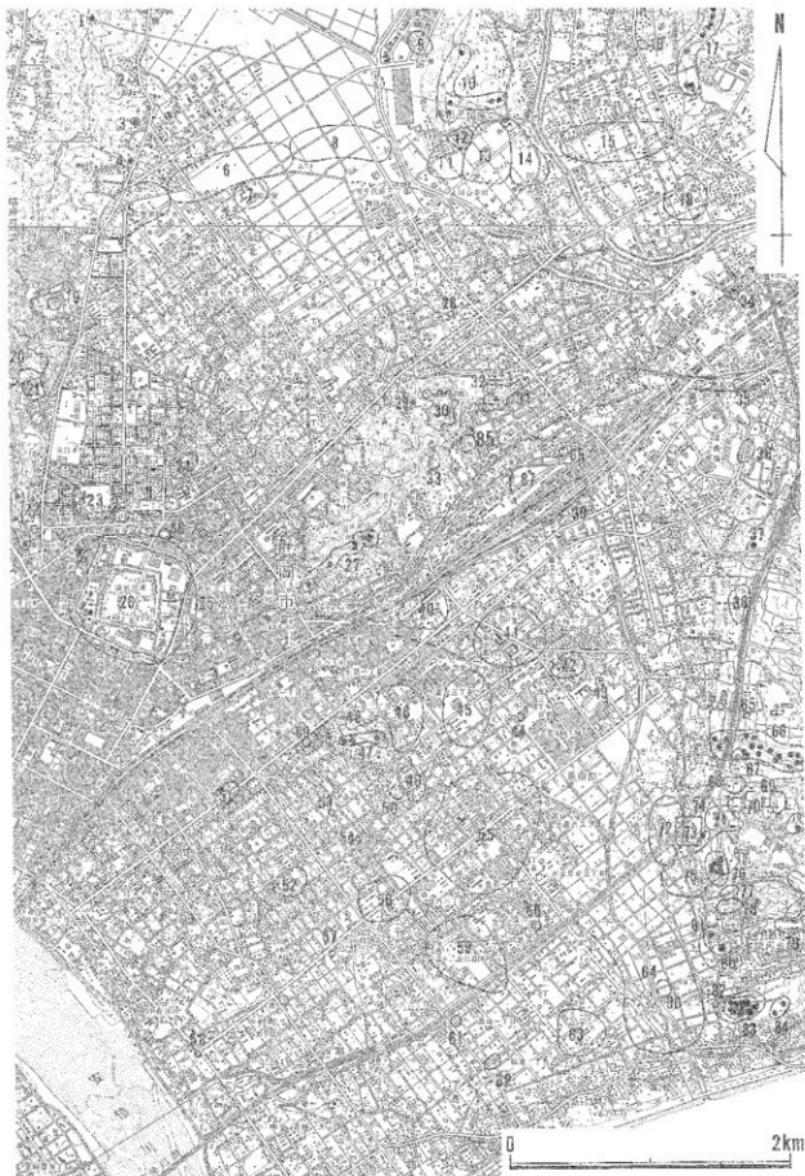
に分布する。後期後半には上ノ山遺跡など、丘陵上に立地する遺跡も現れる。この時期には県内の他地域でも台地上に大規模な集落が形成される例が多いが、社会構造の変化か気候変動に伴う生業の転換か、いずれにしても汎列島的な要因が背景にあると推定される。

古墳時代前期の古墳では、4世紀後半の谷津山1号墳（植木山神古墳）が全長110mを測り、駿河最大・最古の前方後方墳である。しかし、4世紀末から5世紀中葉には三池平古墳、神明1号墳、牛王堂山1号墳と、清水平野に首長系譜が移動したようである。静岡平野の5世紀代の古墳としては、割竹形木棺を収めた木族塚を有する鶴名2号墳が注目される。低地部では前期の拠点的集落として小黒遺跡が挙げられ、銅鏡や銅鏡、琥珀原石、畿内・東海西部・北陸系の輸入土器が多數出土している。古墳時代中期では、大規模な水田跡が検出された曲金北遺跡とその北側の長沼遺跡は一連の遺跡と考えられており、非常に広大な水田域が想定される。後期になると、安倍川の氾濫が頻発したことによって集落関連の資料は極めて少ない。こうした中、元宮川・神明原遺跡では古墳時代後期を上限とする祭祀遺物が多く出土し、掘立柱建物跡も確認されているという。再び古墳に目を向けると、山地・丘陵の縁辺部で後期の群集跡が展開し、6世紀後半には全長12mを超える大型横穴式石室を備えた円墳の藤枝山古墳が造営され、首長権が静岡平野中央部に復帰したかのようである。また、6世紀中葉以降、有度丘陵南西縁辺部に伊豆谷横穴群が営まれ、墓制の系譜について問題提起するところの大きい墳墓群である。

奈良時代に入ると、律令国家により諸国は五畿七道にまとめられ、当該地域は東海道の駿河国に属していた。駿河国府は現在の駿府城跡付近に想定されており、駿府城内遺跡のうち静岡市立城内中学校校舎建設に伴う発掘調査では奈良～平安時代前期の掘立柱建物や区画跡が検出され、律令期官衙特有の須恵器・土師器や瓦が出土し、駿河国府の一部と考えられている。駿河国には西から志太・足津・有度、安倍・蘆原・富士、駿河の7郡が置かれ、うち静岡平野の北部が安倍郡、静岡平野の南部が有度郡、清水平野の北部から富士川右岸までが蘆原郡と考えられているが、これら3郡の厳密な郡境は明らかではない。郡術については、内荒遺跡において掘列・溝で区画された掘立柱建物群が検出され、同時に9世纪代の綠釉陶器、墨書き土器、および「造大押印」の御印が出土し、安倍郡術の一部と推定されている。

第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	時代	施	遺跡名	時代	施	遺跡名	時代
1	マルコウチ塚原	古墳(?)	31	桑原地形	東晉	61	木綿遺跡	古墳(?)
2	跨ヶ谷遺跡	古墳(?)、朱生	32	幕山古墳	古墳(?)	62	下馬遺跡	朱生～古墳
3	唐瀬古墳群	古墳(?)	33	袖ヶ浦古墳	古代	63	芦之郷跡	朱生・古墳・小掛
4	達ヶ谷古墳	古墳(?)	34	雪ノ口古墳	朱生	64	元宮川・神明原遺跡	畿内・中世
5	猪ヶ谷遺跡	弥生(?)～近世	35	選ヶ谷跡	朱生	65	斯ノ内古墳	畿内(?)
6	高井遺跡	平安	36	栗原遺跡	朱生	66	小笠古墳群	古墳(?)
7	糸井鳥丸跡	奈良、平安	37	船橋鳥丸古墳	古墳(?)	67	嫗ノ内日吉遺跡	弥生
8	上土遺跡	奈良、平安、承暦	38	木曾寺古墳	飛鳥	68	人見I追跡	旧石器
9	長篠遺跡	飛鳥(?)	39	曲輪山追跡	朱生(中)～承暦	69	大庭丘遺跡	飛鳥
10	南沼上古墳群	古墳	40	曲輪山追跡	吉原、古墳	70	水沢II追跡	飛鳥(?)
11	内荒遺跡	飛鳥～平安、近世	41	垂町A古跡	吉原、大掛	71	静岡大学園内古墳群	古墳
12	田舎川古墳群	石器～平安、中世	42	小高砂山・櫛ヶ原古墳	朱生(後)、平安	72	片山定跡	弥生(後)、古墳、通耕
13	川井古跡	弥生(?)～近世	43	小高砂山聯合古墳群	平安～中世	73	片山西跡	古代
14	宮下遺跡	奈良～平安、近世	44	三美田場古跡	古原、古代	74	白山神社(山神)古墳	古墳(?)
15	瀬戸裏塚跡	朱生(中)～近世	45	丹山遺跡	朱生(?)	75	宮川(小野)遺跡	旧石器～古代、近世
16	東下遺跡	古墳	46	小高遺跡	吉原(?)	76	宮川古墳群	古墳(?)
17	瀬戸古墳群	古墳	47	八幡山古墳群	古墳(?)	77	遠敷守塚古墳群	古代
18	西台山遺跡	弥生(?)	48	八幡山古墳跡	中世	78	南条寺垣遺跡	銅文
19	人木遺跡	古墳	49	有明遺跡	朱生(?)	79	伊比谷奈谷柄穴群	古墳(?)
20	豊野山古跡	中世	50	吉原塚跡	中世	80	中井越跡	銅文、朱生
21	北川頭塚跡	中世	51	鶴川遺跡	吉原	81	弁持城古跡	古墳(?)
22	豊原山古墳群	古墳(?)	52	中串ケイセイ追跡	古代	82	上ノ山遺跡	畿内～山岳
23	勝男淡ヶ原内海跡	朱生	53	八都五十石古跡	六角	83	上ノ山古墳群	古墳(?)
24	平子田遺跡	弥生(?)	54	女子森遺跡	朱生(?)	84	東大谷古墳群	古墳(?)
25	豊原塚内海跡	朱生(中)～古代	55	有應跡	朱生(中・後)、中皇	85	木曽岬遺跡	古墳(?)～近世
26	豊原塚跡	中世	56	麻ノ原遺跡	朱生(中・後)、古跡	86	根田瓦跡	中世
27	分田山古墳群	古墳(?)～後	57	南陽跡	朱生、古跡	87	磐前遺跡	朱生(?)～中墳
28	千代田遺跡	弥生(?)	58	中御殿下追跡	朱生(?)	88	更級遺跡	朱生(?)～中墳
29	井上古墳	古墳(?)	59	磐吉遺跡	朱生(?)、古墳	89	八幡三丁目遺跡	古墳
30	安岩山城跡	中世	60	天神志遺跡	古墳	90	大谷綱井之平尾跡	中世



第4図 周辺施設分布図

また、曲金B遺跡では布目瓦が出土し、有度郡衙の一部とも考えられているが、近年、この遺跡より南南西へ約2kmの位置にあるケイセイ（中田ケイセイ）遺跡で「有厨」の墨書き土器が出土し、むしろ当遺跡が有度郡衙の候補地として有力になりつつある。古代において瓦は官衙よりも寺院の需要主体に生産された。有度丘陵西麓には奈良時代後半に創建された片山廬寺跡が立地し、ここに瓦を供給したのが静樂寺守窯跡である。片山廬寺跡では大規模な金堂、講堂、僧坊の存在が明らかにされ、当廬寺跡を諏訪國分寺に比定する説が有力で、現在の史跡にもなっているが、跡跡が未確認であるため、定説には至っていない。当地域の他の古代瓦窯として本郷平塚跡の西方約300mに位置する柏木瓦窯跡がある。

律令国家はまた、都と地方を結ぶ官道の整備に力を入れた。官道には駅路と伝路があり、前者は火急の公用の者が、後者は緊急を要しない公用の者が利用した。さらに、駅路には30里（約19km）ごとに駅馬を備えた駅家が設けられた。現代に例えれば駅路は高速道路に、駅家はサービスエリアに相当する。駿河国を横断する東海道駅路沿いには西から小川、横田、息津、蒲原、柏原、長倉、横尾の駅家が設置され、このうち横田駅家については前述の曲金B遺跡が有力候補地とも言われる。一方、東海道駅路そのものの遺構が曲金北遺跡で確認されており、静清平野を最短距離で通過する直線道路であることに加えて、同平野のほぼ全域で実施された古代条里地割の東西の基準線となっていることも判明している。この条里地割は南北軸がN-39°-Wの方向で、一町の一辻（1町）を107mとして設定されていることも分かっており、これに基づく水田の界隈大畔が静岡平野北部の瀬名、川合、上土、岳美、池ヶ谷の各遺跡で演じられ、同南部の小鹿本郷坪跡でも界隈の畔が確認されている。

当地域では中世以前の遺跡の調査は他の時代に較べて進んでいない。しかし、本郷坪跡のすぐ北側に中世の城跡が2箇所存在する。一つは長沼城跡であり、標高32.6mの谷津丘陵東端の尾根に立地し、別称は茶臼山であるが現在ここは愛宕塗園となっており、觀音山と通称されている。伝説によると、鎌倉時代・源賴朝の御家人である長沼五郎宗政が築城し、当地に土着したことになっているが、「吾妻鏡」には、宗政は下野國長沼庄の生まれで、源津守・淡路守を歴任し、下野國の郷里で没したこと記載されている。つまり、宗政が駿河国に住んだことはなく、築城伝説は虚構と言わざるを得ない。長沼宗政より4代後の長沼秀行の弟・宗親は建武の新政崩壊後、兄とは反対に武家方（北朝）に味方し、駿河守と称された。これが在地豪族・長沼氏の祖であり、宗親の子・長沼宗恒（『駿國雜志』では守恒）が駿河守に叙任されていることからも、南北朝時代には長沼氏が現在の長沼地区一帯を支配していたことは確実と思われる。このように、長沼なる地名は低湿地の景観に由来すると考えられる一方で、遠祖は北關東にルーツを有する長沼氏という人名に因むとも言い得るのである。実際、文献にも長沼の地名が登場するのは、貞治2（1363）年6月6日に今川義元が出した宝樹院の寺領安堵文書中に「長沼郷」と書かれているのが初見であり、地名・人名の先後論争は未だに決着を見ていない。もう一つの城跡は長沼跡に西隣する愛宕山城跡である。その城址は長沼跡としばしば混同されるが、駿河・遠江を支配した今川氏の駿府城防衛ラインの一翼として築造されたものと考えられ、築城年代の下限は武田信玄の駿河侵攻の直前、16世紀後葉に比定されよう。両城跡に共通する点は、中世の東海道であった北街道に南接するという戦略的立地である。

江戸時代の当地域は駿府に城代が置かれて天領（幕府直轄領）となる一方、旗本等の私領が交錯し、当時の長沼村も私領に細分されていた。本郷坪跡の「本郷」なる小字も、旗本の家名または領有権に因む可能性があるが定かではない。いずれにせよ、近世を通じて当地の農村風景に大きな変化はなかつたであろうが、近代には産業構造の変化が進み、大正10（1921）年、三光紡績静岡工場が本郷坪跡の地に開業した。太平洋戦争末期、静岡市で初めてB29の焼夷弾攻撃を受けたのが長沼であったことも、当地が静岡平野の工業の拠点と目されていたことを裏付ける。戦後の昭和25（1950）年、三光紡績静岡工場は日東紡績静岡工場として操業を再開し、当地域の産業の復興・発展に貢献した。

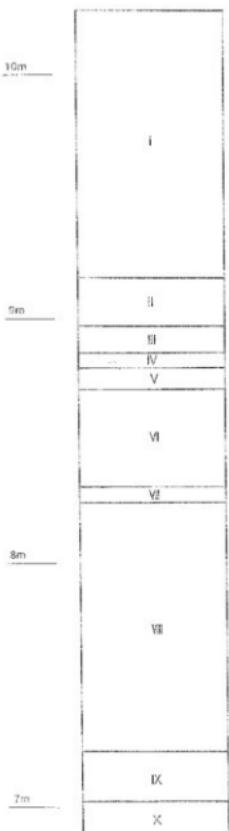
第3章 層位と遺構

第1節 基本土層

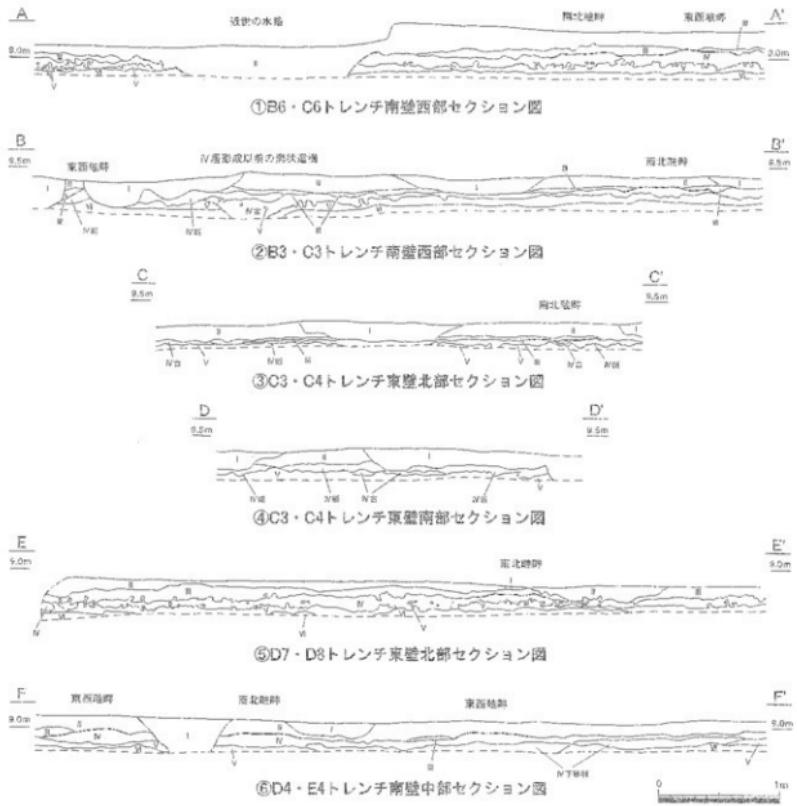
本郷坪遺跡の基本となる土層は施設調査で10層確認したが、本調査ではこのうち面的には上から5層、局所的には7層までを掘削・検査の対象とした。I層は調査区全域を覆う旧紡績工場の盛土層であるが、静清平野周辺の山地からの黄褐色粘土の客土主体に廃工場の解体瓦礫を多く含み、砕削するのに極めて危険な層位である。しかも、廃工場建物の基礎部分は松杭の束を1~2m四方に打設したもので、調査区の至る所でII層以下の包含層を深々と貫通している。このように低レベルまで食い込むI層は全て搅乱として扱った。II層は近代までの水田層であり、やや明るい青灰色を呈するシルト質粘土である。管鉄が多く含むが、上部の攪拌痕はI層により確認できない。III層は粘土から成る水田層で炭化物を少量含む。上部の攪拌痕は皆無ではないが、全体として不明瞭である。色調は検出直後は灰色であるが、数時間経過すると褐色を帯び、II層またはIV層との境界が明確になる。これは、鉄分が多く含まれ、大気に触れて酸化するためと考えられる。

IV層は古代～中世の水田層であり、粘りの強い粘土である。畦畔の形成が明瞭に確認できることから、その上面が今回の調査対象遺構面となつた。暗青灰色を呈するが、3区の北部では黒褐色に近い色調となっている。総じて、有機質を多く包含する土層と言える。II・IV層の境界付近よりもIV・V層の境界付近に多く炭酸鉄の集積が見られるが、粒状の結核ではなく、IV層下部に溶融して灰黄色（黄白色）を呈し、面的に広がっている場合が多い。周辺諸遺跡でIV層に類似または相当する層位として、長沼遺跡の5層（鈴木2002）が挙げられる。当層位は暗茶褐色粘土で厚さ5~10cm、時期は律令期～中世に比定されている。また、曲金北遺跡第2調査区の溝状遺構SD201の覆土下層は青灰色粘土層で10世紀後半に比定されており（及川ほか1996）、本郷坪遺跡IV層に近似する。さらに8世紀前葉を上限とする曲金北遺跡SD202・203（東海道駅跡側溝）の覆土下層は暗青灰色粘土であり（及川ほか1996）、黄色・灰色樹かっているのが黄白色の炭酸鉄集積ブロックの影響と考えられることは本郷坪遺跡IV層の1区東部～3区の状況に似ている。この古代東海道駅跡の路面直上を被覆する土層は本郷坪遺跡IV層と全く同質と言ってよい層位である（注）。

V層は上部の発達痕が顕著で、しばしばIV層中に數～10cm大的のブロックを残す（第6図⑤）。明青灰色を呈するシルト質粘土であるが、水田層と言うよりもむしろ次に述べるVI層以下の洪水堆積層の最終沈澱層と捉えるべき層位である。しかし、IV層の耕作はV層にも及び、第5章で後述するように、包含される遺物がIV層と時期的に重なる部分が大きいため、文化層としてはIV層とほぼ同時期と見做し得る。VI層は粘土・シルト・微砂のラミナ（葉理）または互層で、色調は灰色～青灰色、泥炭状の有機質を少量含む。VII層は暗青灰色の微砂層で、締まりはほとんどな



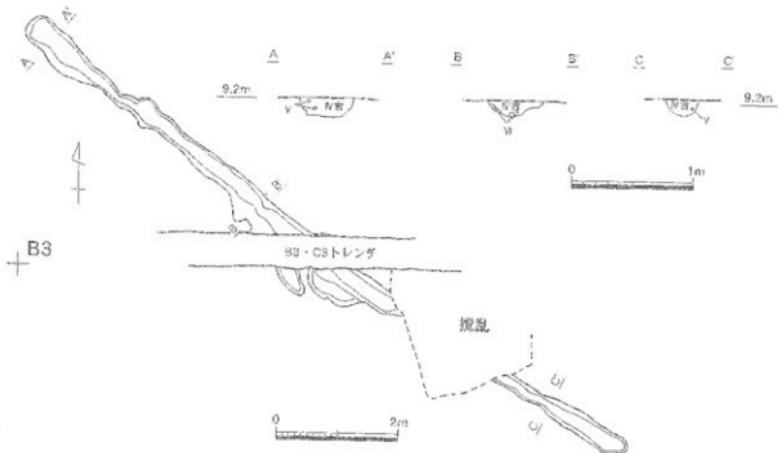
第5図 土屢柱状圖



第6図 グリッドトレンチ土層堆積図

い。VII層は青灰色～暗青灰色の砂礫層で、湧水が激甚である。VI～VII層は古墳時代後期の安倍川の洪水堆積層であり、これら3層の層厚の合計は最大で2.5mに達する。VII層は明灰色の粘土で、木片をやや多く含む。静岡平野の他の諸遺跡では、この層の直上に黒色系粘土から成る弥生時代包含層（いわゆる「登呂層」）が存在するが、当遺跡では皆無となっている。X層は黒褐色～黒色の粘土で、粘り・締まりともに強く、泥炭状有機質を多量に含む。約2300年前に降灰した白色のカワゴ立バミスが少量見られることから、縄文時代晚期頃に比定される。

以上のI～X層の堆積レベルは広大な調査区において決して一定ではないが、3区北東部（確認調査TP7）の堆積状況は第5図のようになる。概して、I層は層厚約20cm、II～V層は各5～10cmという比較的薄い堆積となっている。局所的な堆積状況を概観すると、B3グリッド中央部およびC3グリッド中央部でIV層に新旧が認められる（第6図②～④）。この場合、IV層古段階はすでに述べた基本土層としてのIV層と同一視できるが、IV層新段階は暗オリーブ灰色を呈し、同古段階よりも粘りが若干弱くなっている。B3グリッド東部以東およびC3グリッド南部以南、IV層は専ら新段階となっており、それ以外の



第7図 条尾水田鶴田以前の溝状遺構平・断面図

2区北西半部、4区C3グリッド北部、1区全域、D4グリッド東部とE4グリッドを除く3区ではIV層と言えば古段階を指す。また、IV層とV層との間に散発的に砂礫層が入ることがある（第6図⑥）。礫は大きいものでも直径1cm前後で、灰色～青灰色を呈し、層としてはやや縮まっている。同様の層位がV層とVI層との間にも見られ、それぞれ「IV下砂利層」「V下砂利層」と呼称した。両「下砂利層」は2区南部、4区、3区南京部で確認されており、IV層の堆積の薄い箇所では、IV下砂利層が部分的に咲群を構成していると考えざるを得ない状況もある。

2区および4区の南端部ではⅢ～V層が存在せず、Ⅱ層の直下にVI～VII層が堆積している。確認調査で明らかになったことであるが、3区東端より数m東方以東にもⅢ～V層は存在しない。すなわち、今回の調査は近世以前の水田遺跡としての東と南の極限まで実施したことになる。

注

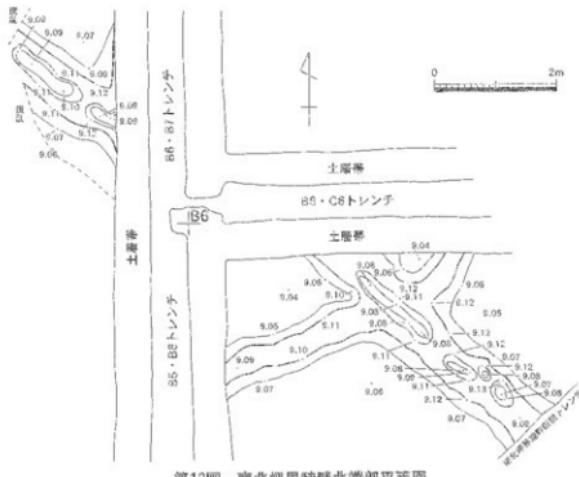
平成17年2月末日、静岡市教育委員会が調査中の曲金北遺跡現地を拝見し、直接確認した。

第2節 律令期以前の遺構

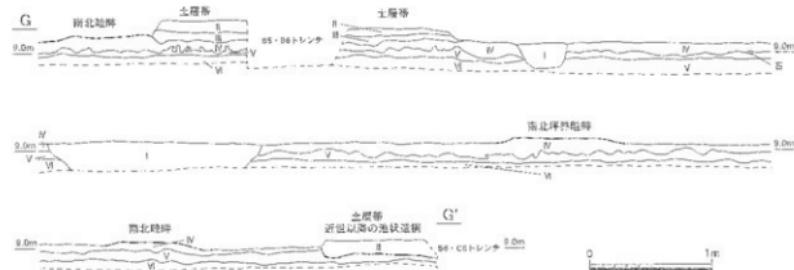
2区B3・C3トレンチ西部のセクションにおいて、V層上面より始まり、IV層古段階を覆土とする掘り込みを確認した（第6図②）。同トレンチを南北に拡張し、V層上面まで掘り下げたところ、長さ12.04m、上端幅0.16～0.85m、深さ0.13～0.16mの溝状遺構が検出された（第7図）。ほぼ一直線に掘削され、その主軸方向はN-53°-W、中央部で不整形に拡幅し、南西側の壁面が中途でテラス状となる。また、南東から北西へ上・下端ともに低くなる。遺物は出土しなかつたが、次節で述べる条尾畦畔の形成層を覆土することから、条里制の施行に先行する時期の遺構と考えられる。該期の遺構としては当遺構が唯一である。

第3節 律令期～中世の条里制水田遺構

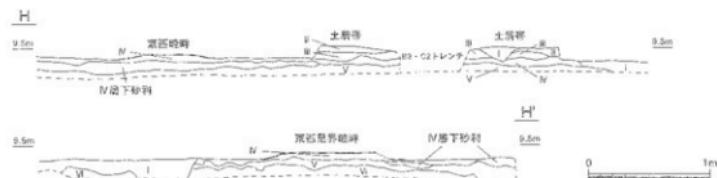
IV層から成る畦畔は2・4区の南端部を除く調査区のほぼ全域で検出された(第8～11図)。本節で扱う時期に属する遺構は畦畔(水田)のみで、土坑や溝状遺構の類はない。杭列や矢板などの補強施設が伴う畦畔は皆無であり、IV層土の盛土のみで構築されている。北西～南東方向の畦畔を南北畦畔、北東～南北方向の畦畔を東西畦畔と規定し、畦畔の交差点から交差点までの線分を1本、複数本の畦畔が交差点を越えて連続する場合はその一連の畦畔を1条と数えることにして、南北畦畔は静清平野の古代条里の方向とされるN-35°-W前後にはほぼ収まるものが



第12図 南北境界畦畔北西部平面図



第13図 南北境界畦畔断面トレンチ北壁セクション図



第14図 東西界地帯畦畔断面トレンチ東壁セクション図

大部分ではあるが、1区A5・B5、2区A3・B3・A2・B2・A1、3区C6、4区C3・D3・E3・C2・D2の各グリッドに1~10本が古代条里の方向に一致せず、より西偏してN-45°~57°-Wとなっている。逆に、古代条里より東偏している南北畦畔がB2グリッド(N-30°-W)とB6グリッド(N-20°-W)に1本ずつ存在する。畦畔には不連續なものもあるが、1層の土圧や直層以降の耕作による擾乱等により下端ラインの検出にとどまったものも少なくないことを考慮すれば、畦畔断絶部をおしなべて「水口」とすることには慎重にならざるを得ない。

畦畔の平均的な断面規模は下端幅50~60cm、高さ5cm以下であるが、これらより相対的に規模の大きい畦畔が南北・東西にそれぞれ1条ずつ検出された。結論から言えば、鶴清平野の古代条里において、前者は椎庭駿河国府より東へ4里1町(約2,675m)の距離にあると考えられる南北界畦畔、後者は古代東海道駿路より北へ1里(約642m)の距離にあると考えられる東西界畦畔である。南北界畦畔は北から1区A6・B5・3区C5・C4・D4・4区D3グリッドを貫き、3・4区ではN-35°-Wを保っているが、C5グリッド以北で蛇行が見られ、1区では大きく西偏し、その方向はN-55°-W前後となる(第8・10・11図)。1区B5グリッド北西部における断面規模は上端幅78cm、下端幅117cm、高さ6cmを測る(第13図)。また、当畦畔の北端部では上端面中央部に深さ1~3cmの凹みが見られた(第12図)。上層の土圧以外の要因で生じたものと考えられる。東西界里畦畔は西から2区A1・B1・B2・4区C2・C3・D3・3区C4・E4グリッドを貫通し、僅かに蛇行が認められるものの、2・4区では古代条里の東西方向であるN-51°-Eをほぼ保っているが、3区では約10°北偏してN-41°-Eとなっている(第9・10・11図)。2区B1グリッド北部における断面規模は上端幅80cm、下端幅124cm、高さ8cmを測る(第14図)。東西里界畦畔と南北界畦畔は4区D3グリッド中央部付近で交差するが、前者はこの交差点以東で分岐し、後者は当点より南で著しく断面規模を縮小する。東西里界畦畔は分岐した2条のうち北側の畦畔のほうが下端幅最大140cmと大きく、規模の点では一見里界に相応しいが、蛇行が著しいため、東西里界の方向性を重視して南側の規模は相対的に小さいが直線的な畦畔を東西里界畦畔の延長と考えた。つまり、東西里界畦畔も交差点より東で規模をやや縮小していると言える。

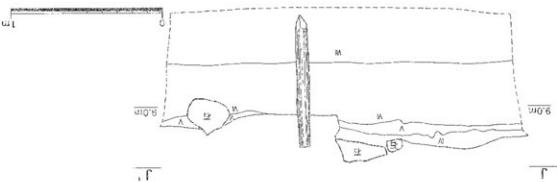
これら大小の畦畔で区画された水田は調査区全域で301面を数える。水田面の検出レベルは2区南端付近で標高約9.5m、同北西コーナー付近で約9.3m、全調査区の中央部に相当するB4グリッド南東部で約9.1m、1区北端付近で約8.8m、4区南端付近で約9.3m、同東端付近で8.95m前後、D5グリッド枕周辺で約8.9m、3区北端付近で約8.7mである。総じて、調査区南北コーナーを最高部として、ここから北と東へ低くなっていく。その勾配の平均は南北に0.67%、東西に0.79%と、東西が相対的にやや急である。各水田のプランを見ると、1区では南北方向に長い長方形プランを呈するものが多く、短辺が3.0~4.0m、長辺がその2~3倍で8.0~13.4mを測る。2区および4区西部では正方形を呈するものが多く、一辺は5.6~8.6mを測る。4区東部では東西方向に長い長方形プランが顕著であり、短辺0.8~3.2m、長辺3.0~8.2mと、水田間の格差が大きい。3区北部は1区とほぼ同様の状況であるが、同南部は一辺1.8~4.8mと、狭小な正方形プランの水田が並ぶ。調査区北端において東西方向に短い長方形プランが卓越するのは、前述のように水田域の勾配が南北よりも東西に急であることに起因するのではないかと考えられる。田面に高低差があれば、それだけ畦畔を密に設けて稻の生育期に灌水を保つ必要があるからである。しかしながら、全体として西から東へ水田1面の面積が小さくなるのは、各水田の検出レベルを見る限り、土地の勾配といった自然的条件に制約されたものではないと推測される。そもそも、調査区全域で検出された境界・里界を含むIV層畦畔が見た目は1造構面上であっても、同時期に存在したとは限らないのである。このことは第5章第1節で検討する。

第4節 近世以降の遺構

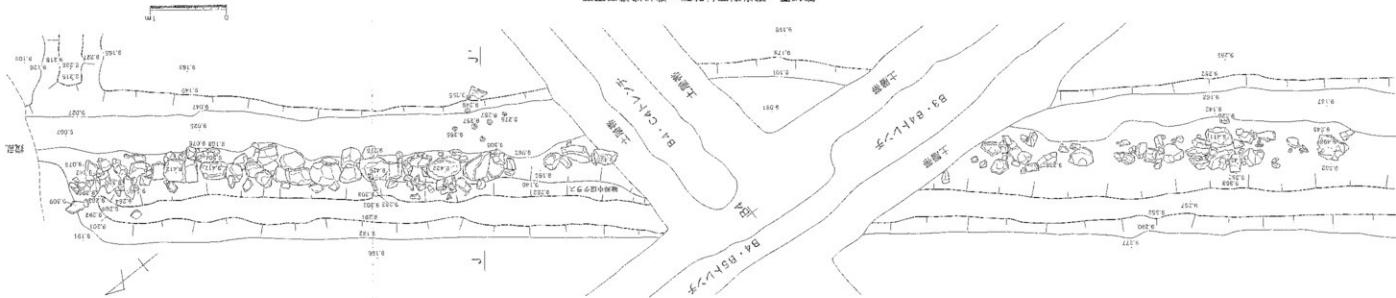
第8～10図において畦畔以外の溝状遺構（水路・池状遺構（土坑）は全て近世以降に比定され、Ⅱ層上面より掘形が始まり、Ⅲ層土を覆土とする（第6図①）。このうち、2区A2・A3・1区B4・B5・3区C5・C6・D6グリッドをN-37°～42°-Eの方向で貫通する溝状遺構は、A2～C5グリッド北中部において北西側が畦畔と一体となって施設されている。水流は南西から北東の方向が想定される。さらに、A3～B4グリッド南西部では、10～50cm大の角礫を石垣状に配しているため、この部分を特に護岸列石付畦畔・溝状遺構と呼称した（第15図）。当遺構は畦畔の南京側下端ラインと海浜遺構の北西側下端ラインが同一の状態であるが、このラインから畦畔の北西側下端ラインまでを畦畔の下端幅とすると、最大160cmである。また、畦畔の上端幅は最大55cmであり、溝底からの高さは16～25cm、北西側下端からの高さは5～10cmを測る。この畦畔の南東側上端を溝状遺構の北西側上端とすると、溝状遺構の上端幅は最大155cm、南東側での深さは9～27cmを測る。この畦畔・溝状遺構の護岸施設と考えられる配石は主に溝状遺構の北西側に据えられているように見えるが、溝状遺構の南東側にも僅かに残存しており、検出時に原位置を維持していない大礫が溝中に多数散乱していたことを考慮すれば、本来は溝状遺構南東側壁面にも配されていたと推測される。石は当遺跡近辺で採取できる石材ではなく、黄褐色の色調や不自然な亀裂等から鈴鹿平野周辺山地の地山礫を探査したものと考えられる。石は互いに組み合わせり、最大3段に積まれているが、基本的に横方向の組み方を優先しているようである。「列石」なる呼称もこの配石形態に由来する。護岸列石はB4グリッド部分で最も良好に残存し、各石の頂点レベルはそれらが保護する畦畔よりも高くなる場合が多い。この護岸列石付畦畔はB4グリッド南西部で終焉し、畦畔先端にも列石が回り込んでいる。

護岸列石付畦畔・溝状遺構には所々丸杭や半剖杭が打設され、B4グリッド杭より北東約3.5mの地点で最も集中的に見ることができる。この部分で当遺構のセクションを見ると（第16図）、杭は直径7.5cm、長さ87.5cmの杉材で、溝状遺構の中央に打設され、先端は微砂層であるⅣ層に達している。杭自身にあまり劣化は認められず、堅牢である。周辺の杭群とともにこの箇所で堰状を呈していたとも想定される。一方、当遺構の土層堆積状況を観察すると、畦畔は主にIV層で構成されているがⅡ層を多く混交している。つまり、IV層の直上にⅡ層が広がっているのである。対岸の溝状遺構南東側では各層位の遺存状態が悪く、溝底のⅥ層直上はもとより、溝肩のⅤ層直上にもⅡ層が堆積している。これは、護岸列石付畦畔・溝状遺構を施設する際に、周囲のⅢ・Ⅳ層を何らかの理由で削平したためと考えられる。特に当遺構の南東側5～10mの範囲でその程度が甚だしく、ゆえに、この範囲ではIV層から成る畦畔の多くが下端の残欠しか検出できなかつたのである。詳細は後述するが、当遺構の構築時期は近世、就中その後半に比定される。

图164 莱昂列石骨壁群·海扶海壁石立石之四



圖二五 地質剖面圖



第4章 出土遺物

第1節 土器・土製品

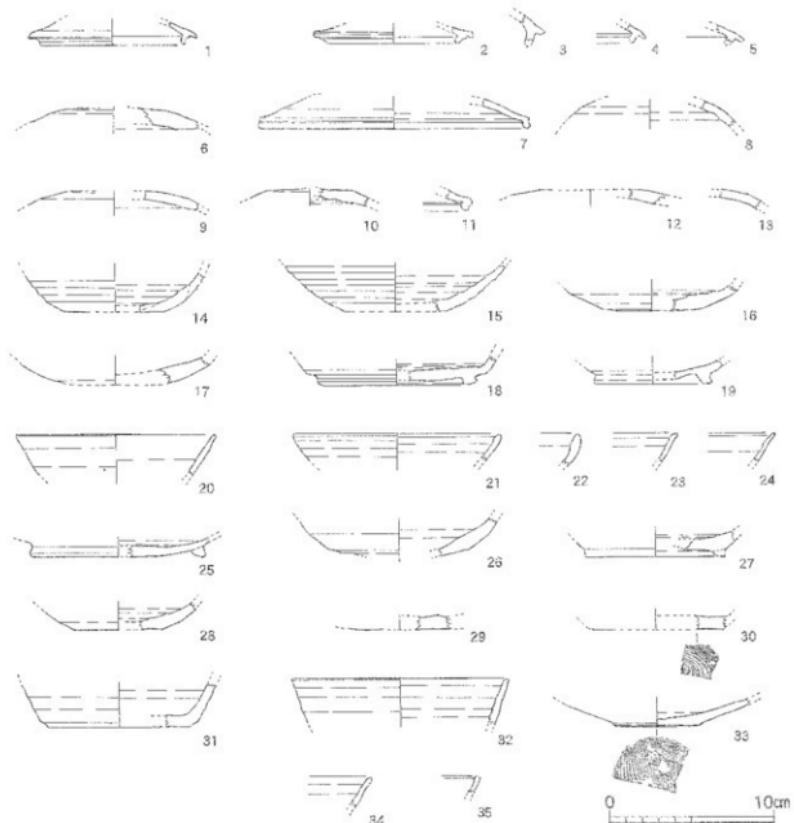
本郷坪遺跡では器種・所屬時期等不詳の細片も含めれば合計1,845点と、純然たる水田遺跡としては多款の土器・土製品が出土した。しかし、そのうち完形品に近い状態にまで接合・復原し得たものは極めて少なく、ほとんどは小片である。本節ではまず須恵器に始まる陶磁器（窯製品）を、続いて土師器・土師質土器を、最後に瓦を原則として帰属年代順に記載した。また、第17～35図には実測可能な当遺跡出土土器・土製品を全て掲載している。

須恵器（第17・18図）

須恵器の編年研究について、静岡県内では遠江考古学研究会が古窯跡出土資料をもとに組み立てたいわゆる遠考研編年がおよそ40年前に発表され（湖西町教育委員会1966、山村ほか1968）以後も修正を加えつつ伝統的に使用されている（川江1979・1992、鈴木2001）が、これらは専ら湖西古窯跡群出土資料を中心とする遠江産または同地方出土須恵器を扱った編年案であり、駿河地方中部に位置する本郷坪遺跡で出土した須恵器の产地が厳密に特定できない現状では全面的に依拠することは考古学の方法として些か危ういと考えられる。そこで、遠考研編年のⅠ期を5世紀後葉～末葉、Ⅱ期を6世紀初頭、Ⅲ期を6世紀前葉～7世紀初頭、Ⅳ期を7世紀前葉～後葉、Ⅴ期を7世紀末～8世紀前半とする実年代観がほぼ妥当と仮定し、本稿ではこの実年代を以て当遺跡出土須恵器を説明する。つまり、遠考研編年の或る時期・型式に併行すると考えられるものの、個々の須恵器が遠江産とは限らないので直接同編年の様式（期）・型式名を用いることを避けたのである。また、遠考研編年のみを援用しても年代観が今一つ不明瞭と判断される場合には畿内地方を中心に考案された須恵器編年（田辺1981、西1978、小笠原・西1976）を参考にし、不足を補った。

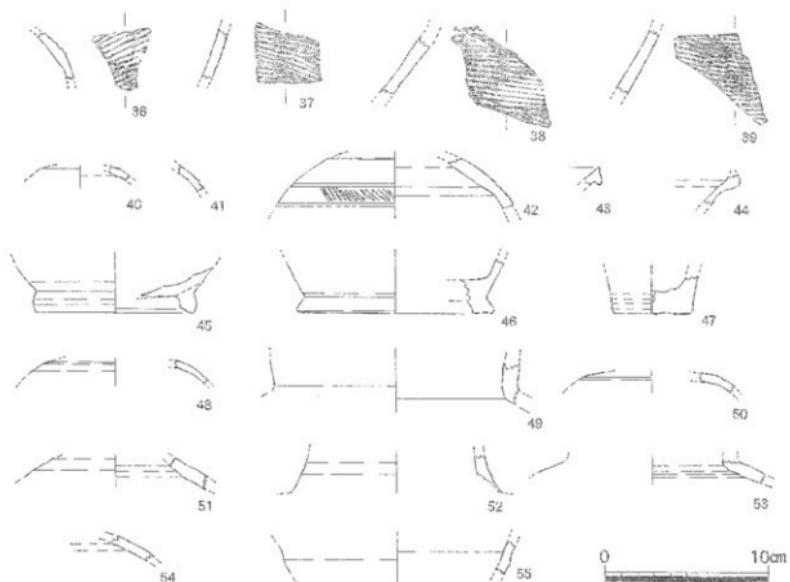
1～5は口縁部内側に「かえり」のある坏蓋である。3はかえり部が直立に近い角度で内彎し陶邑古窯跡群のTK209型式併行、すなわち7世紀初頭に比定される。1・2・4はかえり部の内側が急角度であり、縁内の飛鳥Ⅱ期に併行し、7世紀中葉に比定される。2は口径が8.0cmと小さく、壺蓋の可能性もある。5は7世紀中～後葉の所産である。6～13は律令期の軒蓋である。6は8世紀前半、7は畿内の平城初期に併行し、8世紀前葉に比定される。8は8世紀中～後葉、9・10は同後半、11は同後葉と考えられる。13は8世紀代かどうか判然としない。12は天頂部の摘みを喪失した段階の坏蓋で、9世紀初頭に比定される。14～32は坏身である。14～17は飛鳥Ⅱ古段階に併行し、7世紀後葉に比定される。18・19は高台の付くタイプで7世紀末に比定される。20は蓋を伴わない坏身と考えられ、7世紀末に比定される。21～24は口縁部で、22が7世紀中葉、23・24が同後葉、21が7世紀後葉～8世紀初頭に比定される。25・27は高台を伴い、25は8世紀前葉、27は同前～中葉に比定される。26は高台をもたず、蓋を伴わない形式で8世紀前半の所産であろう。23は27と同形式であるが、より新しく、8世紀後葉に比定される。29・30は底部で、29は8世紀代と推定されるが、30は外底面に糸切り痕を残し、8世紀末～9世紀初頭の年代が考えられる。31・32はいわゆる簞坏で、9世紀初頭～前葉に比定される。33は糸切り底から体部が極めて緩やかに立ち上がり、無高台型の可能性がある。時期は9世紀前半代であろう。34は坏身の口縁部であるとすれば7世紀後葉の所産である。35は坏身の口縁部かどうか疑わしいが、7～8世紀の時期幅に収まると考えられる。

36～39は甕の体部片で、8～9世紀に比定される。36が体部上半、37～39が同下半である。40は壺蓋



第17図 須恵器実測図①

で、摘みの形状は不明であるが8世紀の所産と推定される。41は瓶類の肩部で、体部の上半・下半の境に1条の沈線を有し、7世紀中～後葉に比定される。42は長頸壺で、体部上半に少なくとも3条の沈線を巡らし、うち下2条間の区画に左上がりの櫛描き列点文を配する。無蓋のタイプならば、7世紀末の所産であろう。43・44は瓶類の口縁部で、その断面形から43は8世紀前半、44は同後半～9世紀前葉と判断される。45・46は壺・瓶類で、高台の形状から9世紀前半に比定される。47は平城京跡や長岡京跡で壺Gと称される形式で、8世紀末～9世紀初頭を中心とする年代が与えられる。48～55は壺・瓶類で、8～9世紀の時期幅に収まると考えられる。以上の須恵器のうち、1・5・7・11・16・17・21・22・24・36・39・41・43・49・51は胎土・色刷から湖西古窯跡群の製品と考えられるが、それ以外の須恵器の産地は不明である。8世紀後半以降の製品の産地については、藤枝市に位置する助宗古窯跡群が想起されるが、同古窯跡群の須恵器に特徴的な削り出し高台が本郷坪遺跡出土資料に全く見られないこともあり、現時点では同定は困難である。

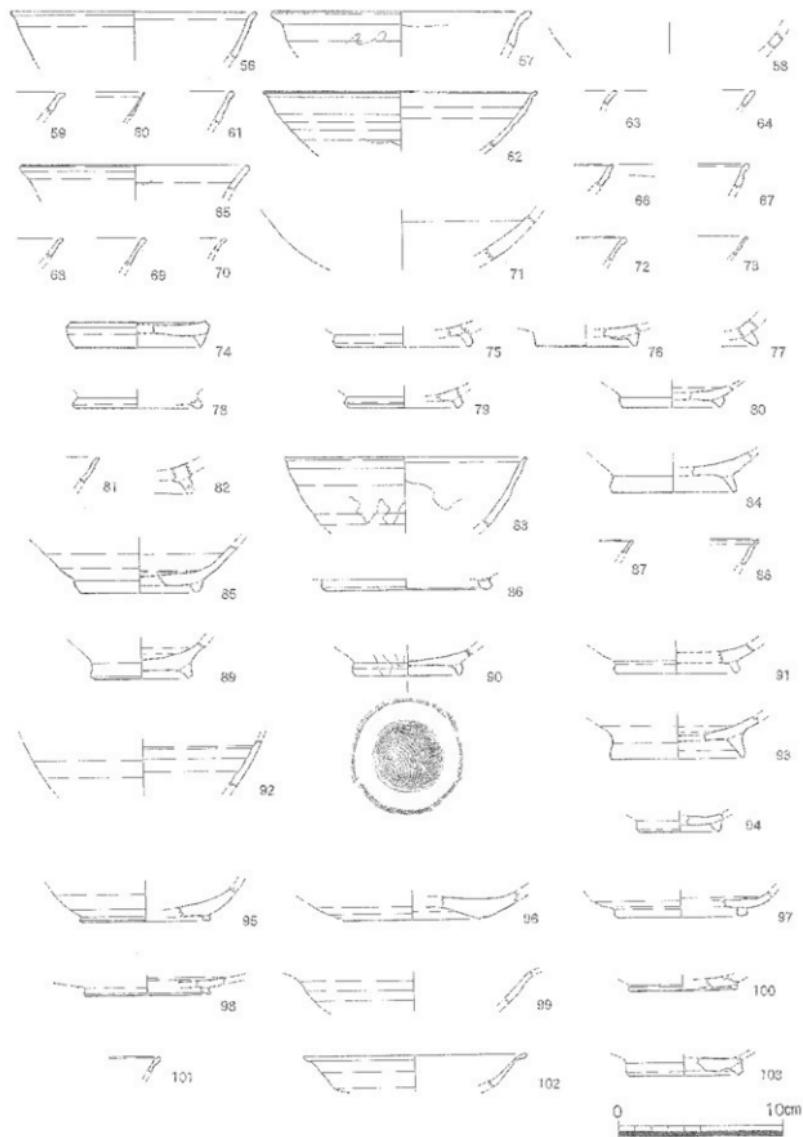


第18図 須恵器実測図②

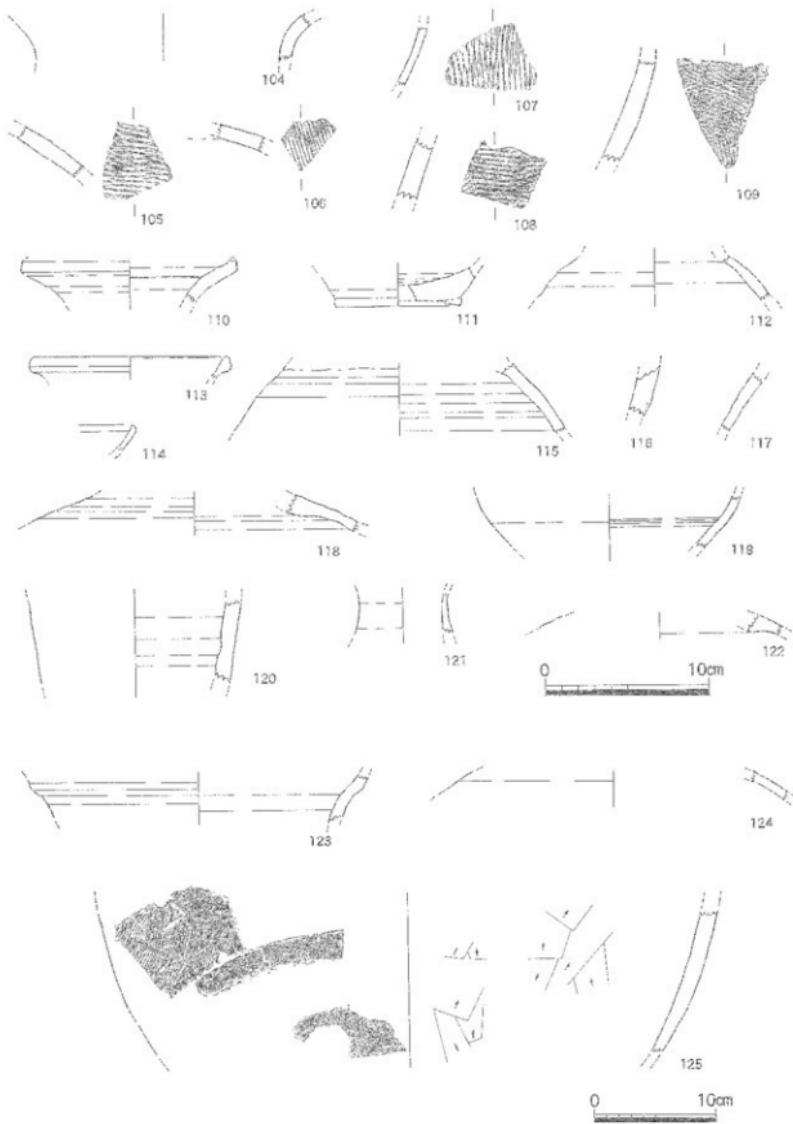
灰釉陶器（第19・20図）

灰釉陶器の編年は猪崎彰一氏の須恵古窯跡群における研究（猪崎1961）を嚆矢とし、爾来、各型式の実年代を巡って紆余曲折を経ながらも諸編年案は基本的にこれを継承している。灰釉陶器は静岡県内でも遠江および駿河西端部の諸窯で生産されたが、本項では須恵古窯跡群という愛知県の資料を用いて考案された編年に準拠し、個々の製品の產地は不問とする。現在、灰釉陶器の型式（窯式）変遷は黒塗14号窯式（K14）、黒塗90号窯式（K90）、折戸53号窯式（O53）、東山72号窯式（H72）、百代寺窯式（百代寺）の順とされており、各型式のおおよその実年代は順に9世紀前半、同後半、10世紀前半、同後半、11世紀と考える傾向が大勢である。以下、前文括弧内の各型式略号を用いることにして、K14は2時期に、K90は3時期に細分されており（斎藤1989）、それぞれ古い順にK14-1、K14-2、K90-1、K90-2、K90-3と表記する。H72は新旧2時期に細分される可能性も指摘されているが（山下1996）、大勢的見解とは言えないため、本項では敢えてH72の細分型式は採用しない。また、前川 要氏はO53～百代寺を6段階に編年したが（前川1984）、このうち第1段階が本来のO53の古段階、第2段階が同新段階、第5段階が百代寺の古段階、第6段階が同新段階に相当する。従って、これらを古い順にO53-1、O53-2、百代寺-1、百代寺-2と表記する。

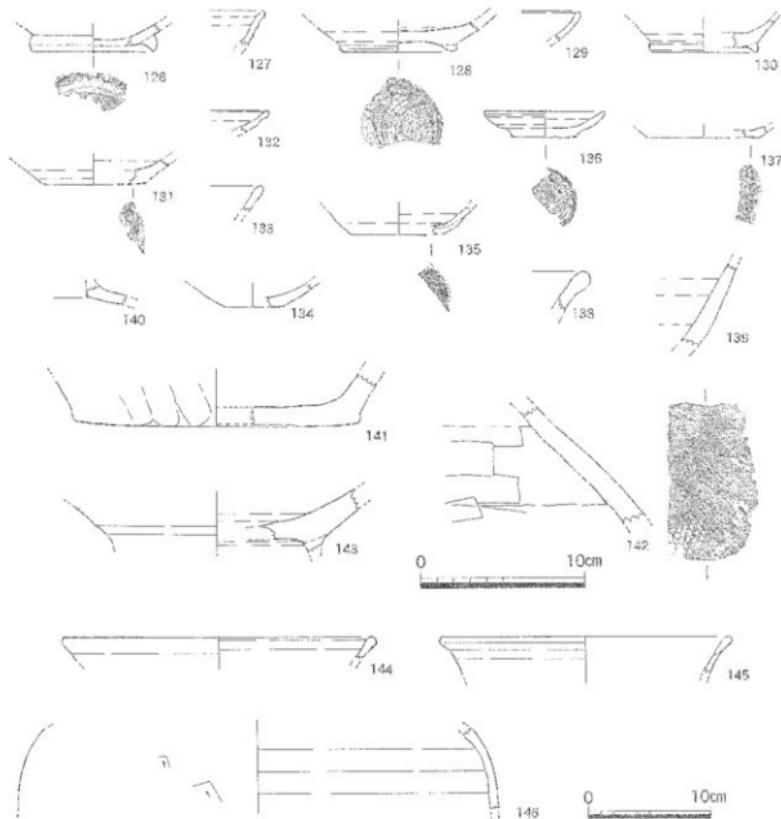
56～92は碗である。56・57は口縁部を外反させて横に引き出しており、K14に比定される。58は時期特定の指標となる口縁部も高台も残っていないが、内面の丁寧な水平方向のハケ溝や施釉等よりK14と推定した。59はK90-1、62はK90-1またはK90-2である。口縁部の外反引き出しが弱くなる60・61・63・64はK90-3に比定される。65～70・72・73はK90の範疇に、71はK14～K90に収まると考えられる。74～77はO53-1に比定される。このうち、74は体部と底部との境から高台外面にかけて崩落し、2つの面を成



第19回 灰釉陶器実測図①



第20圖 灰釉陶器実測図②



第21図 山茶碗実測図

しており、破損した碗の転用品と考えられる。しかし、内底面に墨痕等は見られず、転用碗である確証はない。78~80はO53-2に比定される。81はO53、82はそれ以降の所産であろう。83~88はH72に比定される。89は百代寺-1に、90は外底面が高台貼り付け部以外はほぼ未調整の糸切り痕を残し、灰釉陶器の最末期、すなわち百代寺-2に比定される。91は百代寺の鉢嘴で捉えられ、92は施釉等より判断してO53~百代寺と考えられる。

93は高い高台と緩やかに立ち上がる体部下部を有し、H72の深碗である。94はH72の小碗であり、同時期では新出の器種である。95~103は皿である。95は小さい高台の下端面をナデ調整して凹ませ、典型的なK14-1と言えるが、96は明確な高台をもたず、厚い底部が上げ底状となる。これは高台が定型化しなかつた草創期灰釉陶器の実態の一端を示しており、やはりK14-1に比定される。97・98・100は高台が定型化しており、K14-2の所産である。99は体部の立ち上がりと推測される口縁部の形状からK14の皿と判断した。101・102はK90、103はH72に比定される。104は甌の頸部、105~109・125は同体部で、9~10

世紀の所産であろう。110は壺・瓶類の口頸部で9世紀前半(K14頃)、112は同体部上半で9世紀に比定される。111は高台の形状からK90の長颈瓶と考えられる。113・114は9世紀の瓶頸の口締部、115~119は壺頸で9~10世紀前半に比定される。120・122・124は瓶頸体部、121は瓶頸頸部、123は壺または壺の口頸部で、それぞれ9~10世紀の所産と考えられる。以上70点の灰釉陶器の産地は大半が県内(遠江)とと考えられるが、窯跡群単位での特定は不可能に近い。

山茶碗(第21図)

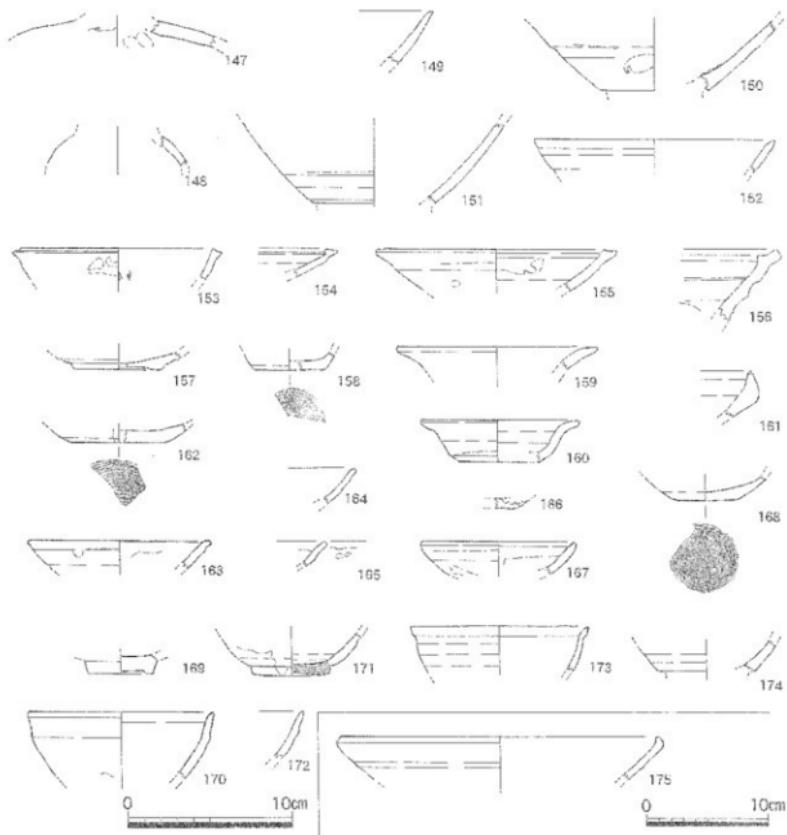
平安時代の史料に「白瓷」と記載された縞製品が灰釉陶器に相当するという考え方の延長で、灰釉陶器の系譜を引く中世陶器を瓷器系中世陶器と呼称する見解もある(中野1997)が、その定義や指標は中世窯業の研究者によって様々であり(注1)、取り敢えず、第21図に掲載した陶器はいわゆる山茶碗期の瓷器系陶器と理解されたい。静岡県内では、松井一明氏による主に遠江地方の山茶碗に関する一連の研究があり(松井1989・1993a)、それらを総合すると県内の山茶碗はI~Ⅲ期に編年され、さらにI期が2小期、Ⅱ期が3小期に細分されている。また、各(小)期の実年代については、I~1期が12世紀前葉、I~2期が同中葉、Ⅱ期が同後葉~13世紀初頭、Ⅲ~1期が13世紀前葉、Ⅲ~2期が同中葉、Ⅳ~3期が同後葉と考えられている。本項では、県内産の山茶碗についてもこの松井氏編年に依拠している。一方、当遺跡では県外の知多古窯跡群産の山茶碗期瓷器系陶器も出土しており、これらについては中野晴久氏による編年に準拠した(中野1995・1997)。

126~129は碗である。126はI~1期、127はI期、128・129はⅡ期に比定される。130はI~1期の小碗である。131~137は小皿である。131・132はⅡ期に比定される。133は知多産の4型式で、12世紀末~13世紀初頭の年代が与えられる。134はⅡ期以降、135~137はⅢ期に比定される。140は瓶頸の頸部・体部上半接続部で、12~13世紀の所産である。138・139・143~145は知多産5型式の片口鉢で、13世紀中葉の年代が与えられる。141・142・146は知多産の壺である。141・146は12~13世紀としか捉えようがないが、142の体部上半片は同下半との境界付近外面に綺やかな斜格子状の押印文が施され、2型式、すなわち12世紀第3四半期に比定される。県内産の山茶碗では、128・131が渥美・潮西古窯跡群に、130・132・135~137が東遠諸窯にそれぞれ産地を求める。134は西遠江産の可能性もあるが、定かではない。

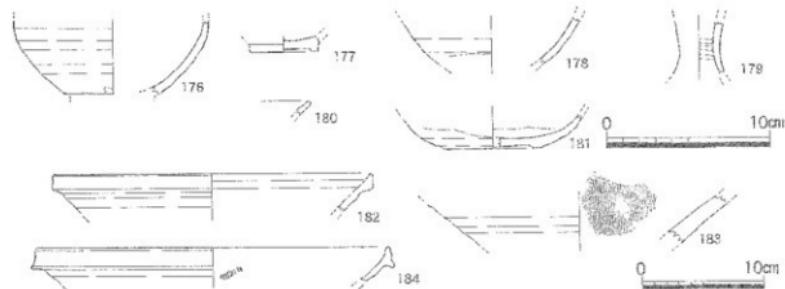
古瀬戸製品(第22図)

当遺跡では、尾張北東部の瀬戸古窯跡群で焼造された古瀬戸製品も少なからず出土している。古瀬戸製品の器種および時期の特定に際し、藤澤良祐氏による編年(藤澤1991・1993)を参照するとともに、同氏に鑑定をお願いした。なお、古瀬戸製品以外にも中・近世の瀬戸・美濃製品およびこれらに併行する中・近世東海沿岸諸窯の製品についても同氏に鑑定をお願いしたため、以下に記述する該当製品の器種・形式・時期は全て藤澤氏編年に依拠している。実測不能の細片を含む当遺跡出土古瀬戸製品77点の器式別内訳は、前期が皆無、中期が2点(147・153)、他の75点全てが後期である。

147は中I~Ⅱ期(13世紀末~14世紀第1四半期)の瓶子である。148は花瓶で、後Ⅱ~Ⅳ期(15世紀前~後葉)に位置付けられる。149~152は平碗である。149が後I期(14世紀後葉)、150が後II~Ⅲ期(14世紀末~15世紀前葉)、151が後Ⅱ~Ⅳ期古段階(15世紀前~中葉)、152が後IV期古段階(15世紀中葉)に比定される。153~155は御皿である。153が中Ⅱ期(14世紀第2四半期)、154が後Ⅱ期(14世紀末~15世紀初頭)、155が後Ⅳ期(15世紀前葉)に比定される。156は後IV期古段階の御目付大皿である。157も同時期の皿類底部である。158は折縁小皿で、後I~Ⅱ期(14世紀後葉~15世紀初頭)に位置付けられる。159・160は後IV期新段階(15世紀後葉)の腰折皿である。161・175は檻鉢II類で、後IV新段階に比定される。162~168は縦軸小皿である。162が後I~Ⅱ期、163~166が後IV期古段階、167・168が後IV期新段



第22図 古瀬戸製品実測図



第23図 大窯湖瀬戸・美濃製品実測図

墻に比定される。169～174は天目茶碗である。169が後Ⅰ～Ⅱ期、170～172が後Ⅳ期古段階、173が後Ⅳ期新段階、174が後Ⅳ期新段階～大窯第1段階（15世紀後葉～16世紀前葉）に比定される。171は底部断面残存部分全面に黒漆が付着しており（スクリーントーン部分）、補修痕と考えられる。

大窯期瀬戸・美濃製品（第23図）

中世末期から近世初頭の瀬戸・美濃古窯跡群で操業された地上式施設「大窯」の製品について、やはり藤澤氏編年（藤澤2002）に基づいて記述する。176～178は大窯第1段階（15世紀末～16世紀前葉）の天目茶碗である。うち、176は古瀬戸後Ⅳ期新段階に遡る可能性もある。179は徳利で、大窯期の範疇に属す。180は大窯第2段階（16世紀中葉）の碟皿である。181は大窯第3段階（16世紀後葉）の丸皿である。182～184は搖鉢である。うち、182は搖鉢Ⅰ類A系で、口縁端部が上下に拡大する前の型式であり、大窯第1段階前半（15世紀末）に比定される。184は搖鉢Ⅰ類で、大窯第3段階前半（16世紀第3四半期後半）に位置付けられる。183は型式特定の指標となる口縁部を欠くが、概ね大窯第2～3段階（16世紀中～後葉）に比定される。

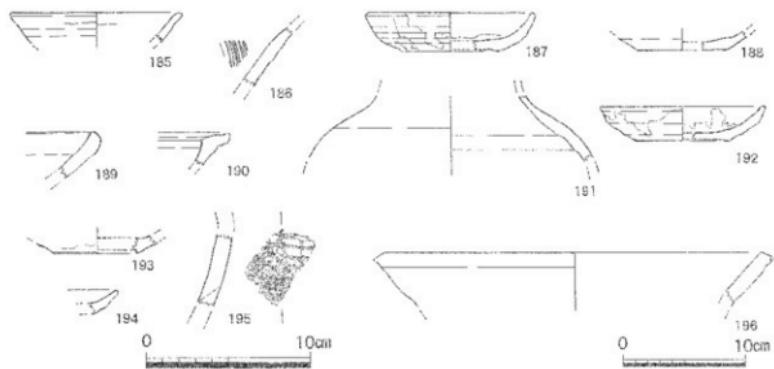
その他の中世陶器（第24図）

本項では、瀬戸・美濃古窯跡群以外の東海地方諸窯で焼造された中世陶器について記述する。このうち、常滑製品については前掲の中野1995・1997に準拠し、他の製品についてはすでに言及した藤澤氏編年との併行関係という形式をとった。185～192は志戸呂製品である。185は古瀬戸後Ⅳ期古段階併行の縁和小皿であるが、志戸呂古窯跡群の所産か、やや疑わしい。186・190は揃鉢である。186は古瀬戸後Ⅳ期併行（15世紀中～後葉）、190は大窯第4段階併行（16世紀末～17世紀初頭）に比定される。187・192は丸皿である。187は大窯第3段階後半～第4段階併行（16世紀第4四半期～17世紀初頭）、192は大窯第4段階後半併行（西暦1600年前後）に比定される。188は大窯第4段階併行の小皿である。189は大皿の口縁部で、同じく大窯第4段階併行に比定される。191は同じく大窯第4段階併行の徳利である。193・194は初山製品で、大窯第3段階に併行する。193は皿とするしかないが、194は丸皿の口縁部である。195・196は常滑製品である。195は9～10型式の壺で、所属年代は15世紀に収まる。196は9型式の片口鉢で、実年代は15世紀前半に比定される。

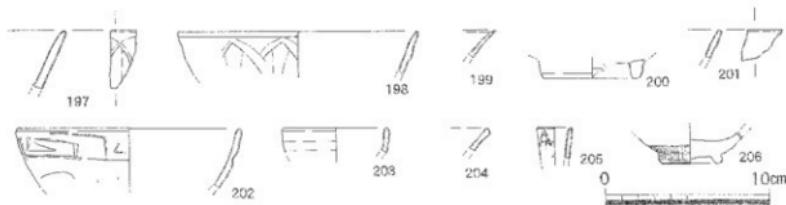
船載磁器（第25図、図版3～4）

大半は実測不能の細片であるが、中世～近世初頭の中国産磁器が計27点出土した。197～202は龍泉窯系の青磁碗である。197は体部外面に壓押し蓮弁文を配し、13世紀後半（南宋）の所産である。198は体部外面に片切彫蓮弁文を施し、13世紀末（元）の所産である。199の実年代は13～14世紀（元）に比定される。200は高台のみ残存し、14世紀の所産か。201も残存部が乏しく、時期不詳である。202は口縁部～体部上半に雷文を施し、体部下半にも曲線から成る文様が見られ、15世紀（明）の所産である。203は龍泉窯系の青磁杯、204は同青磁皿の可能性があるが、ともに時期不詳である。205は染付の口縁部で、小瓶か。染付文様の群組は不明であるが、15～16世紀（明）の所産であろう。206は白磁碗で、高台の形状等から白磁B群（森田1982）に属し、15世紀（明）に比定される。外面は体部最下部から高台にかけて縱位の籠括き文を巡らし、この文様部分のみ露胎となっている。また、焼成はいわゆる生焼けである。なお、船載磁器ではこの206のみ藤澤良祐氏に鑑定をお願いした。

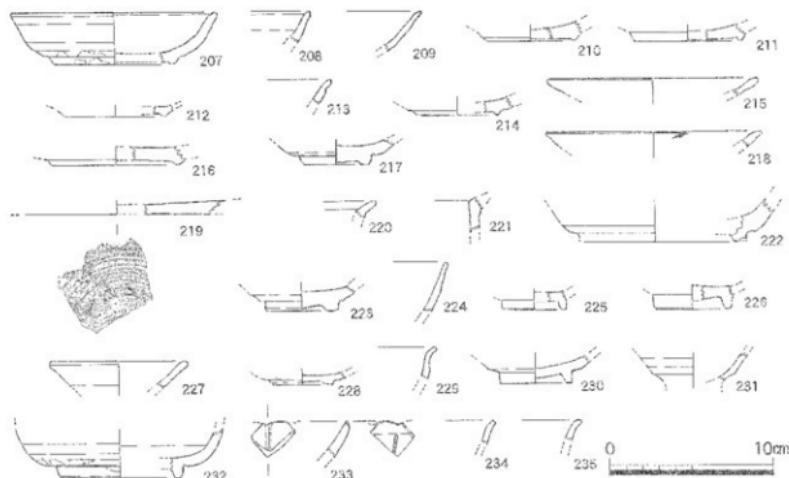
c・eは龍泉窯系の青磁碗である。2点とも体部外面に鶴蓮弁文を配し、13世紀（南宋）の所産である。fは同安窯系の青磁小皿で、同じく13世紀（南宋）の所産である。gは染付蠍反碗の口縁部で、15世紀（明）の所産である。hは無文の白磁部片で、15～16世紀（明）の所産である。nは染付の体部



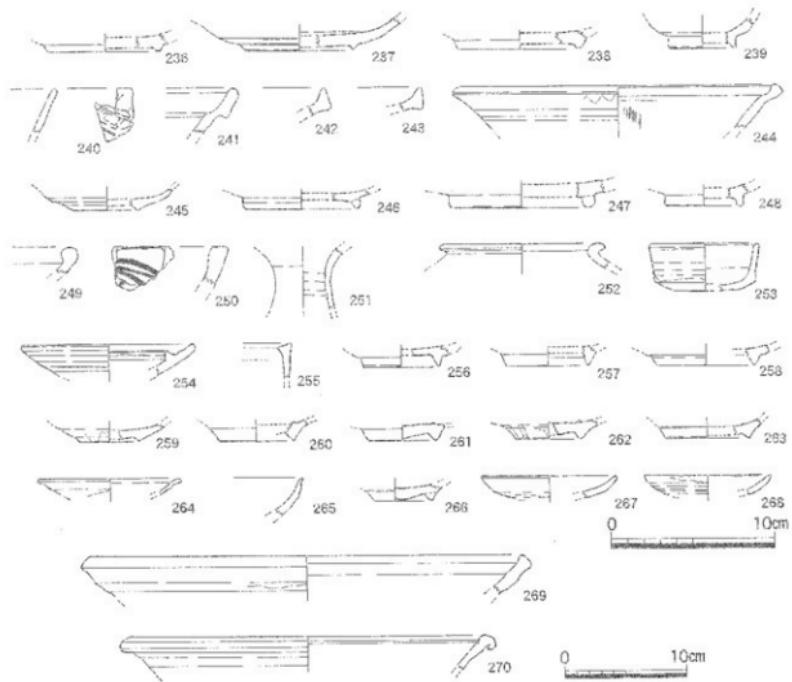
第24図 その他の中世陶器実測図



第25図 船形陶器実測図



第26図 近世漁戸・美濃製品実測図①



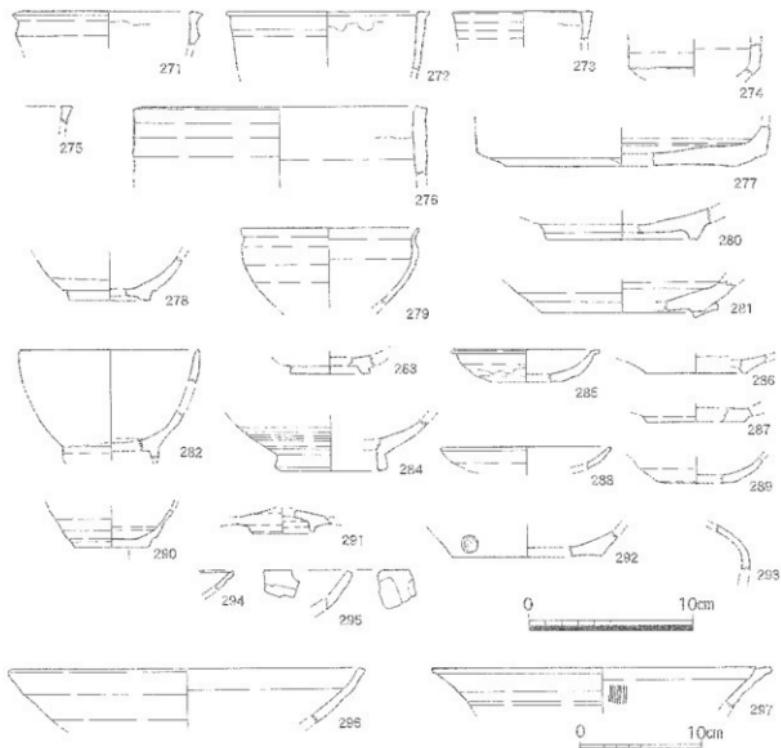
第27図 近世瀬戸・美濃製品実測図②

で、外面には二重の模様を施らすが、内面の輪柄は不詳である。16世紀（明）の所産か。 \circ は染付皿の体部で、内面はいくつかの文様帶に区画されているようである。16世紀末～17世紀初頭（明末期）に比定される。 $b \cdot d \cdot f \cdot g \cdot h \sim j \cdot m \cdot p \sim r$ はいずれも龍泉窯系の青磁の体部片であるが、時期は不詳である。

近世瀬戸・美濃製品（第26・27図）

本項では、江戸時代初期に美濃地方の窯業に連房式登窓が導入されて以降の瀬戸・美濃製品を扱う。江戸時代の瀬戸窯について3段階11小期に区分する編年案が発表されており（藤澤1998）、第1～4小期が第1段階に、第5～7小期が第2段階に、第8～11小期が第3段階にそれぞれ属す。本項でもこれに基づいて記述する。207～218は志野製品で、うち207～215は丸皿である。208・209は第1小期（17世紀第1四半期後半）、210～213は第1～2小期（17世紀第1四半期後半～同第2四半期）、214・215は第2～3小期（17世紀第2四半期～同中葉）に比定される。216は皿と判別されるにとどまり、第1～2小期に比定される。217は丸碗で、第1小期に比定される。218は鉄繪皿で、内面口縁部に鉄軸で文様を描く。同じく第1小期に比定される。

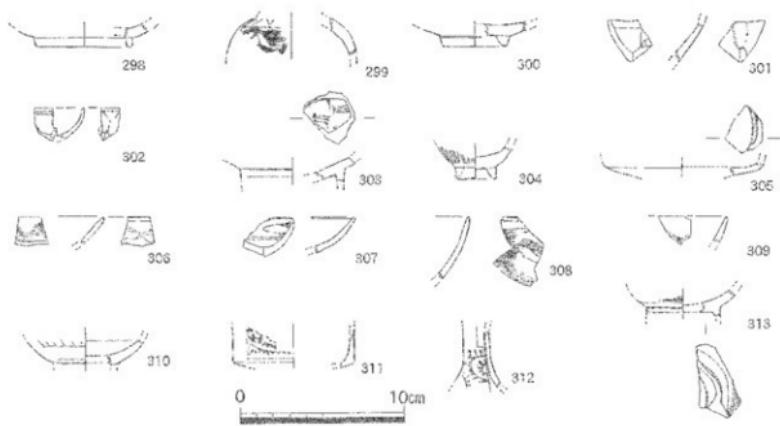
219～253・269・270は瀬戸窯・美濃窯のいずれの製品か判じ難く、瀬戸・美濃製品と一括に総称される一群である。219～222は鉢であり、219・220・222は第1～2小期に比定され、221は広く近世の範疇



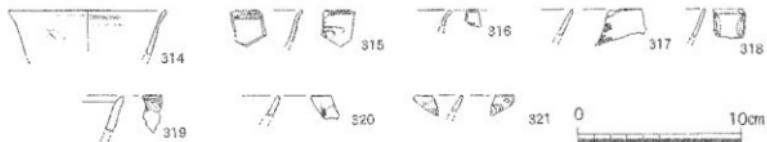
第28図 近世志戸呂製品実測図

で捉えられる。223～226は丸碗であり、223が第1～2小期に、他の3点は第5～6小期（17世紀末～18世紀前葉）に比定される。227・228は小杯で、227が第3～4小期（17世紀中～後葉）、228が第5～6小期に比定される。229～231は天目茶碗である。229は第3～4小期、230は第5～6小期、231は第6～7小期（18世紀前～中葉）に比定される。232・233は菊碗で、232が第4小期（17世紀後葉）、233が第4～5小期（17世紀後葉～末）に比定される。234・235は端反脇の口縁部で、234が第4小期、235が第5小期（17世紀末）に比定される。236・237は第5小期の反血である。238は皿で、同じく第5小期の所産である。239は第5～6小期の小碗である。240は外面鉄絵型打の蟹腹で、同じく第5小期に比定される。241～243・259・270は擂鉢である。241は第5小期、269は第9小期（19世紀第1四半期）、242・243・270は第10～11小期（19世紀第2～3四半期）に比定される。244は第5～6小期の小型擂鉢である。245は同じく第5～6小期の丸直である。246は第6～7小期の擂鉢であるが、擂絵部分は残っていない。247は第8～9小期（18世紀後葉～19世紀第1四半期）の大直である。

248は同じく第8～9小期の腰鑓碗である。249は第3段堀、すなわち第8～11小期（18世紀後葉～19世紀第3四半期）の内耳鉢である。250は第10～11小期の馬の目皿で、口縁端面および体部内面に鉄絵を施す。251は同じく第10～11小期に比定される鎧兜利の頸部である。252は同じく第10～11小期の小器で



第29図 肥前陶磁実測図



第30図 濱戸磁器実測図

ある。口縁部を丸めるように外反させている。253は第11小期（19世紀第3四半期）の餌猪口である。254は同じく第11小期の灯明受皿である。

255～268は美濃窯の製品である。255は第6～7小期の筒形香炉である。256は第6～8小期、すなわち18世紀代の小皿である。257～266は第7～8小期（13世紀中～後葉）に比定される小杯である。このうち、266は内外面全面に煤が付着している。267・268は灯明皿で、267が第7～8小期、268が第10～11小期に比定される。

近世志戸呂製品（第28図）

江戸時代の志戸呂製品については、独自の体系的な編年が確立されてないが、本項では瀬戸・美濃製品との併行関係を意識した時期比定を行なった。271は第1～2小期併行の香炉である。272～275は筒形香炉であり、272が第1～2小期併行、273～275が17世紀代に比定される。276・277は口縁～体部が垂直に立ち上がり、大型香炉の可能性もあるが、ここでは筒形容器としておく。276が第1～2小期併行、277が17世紀代に比定される。278・279は天目茶碗で、278が第1～2小期併行、279が第3～5小期併行、すなわち17世紀後半に比定される。280は第1～2小期併行の大皿または盤である。281は17世紀代の盤であり、底部に脚の1つが残存する。282は第1～2小期併行の丸碗である。口縁断片と体部下半～底部片とは接合する箇所がなく、従って本来の器高は不詳である。283は17世紀代の筒形容器である。284は碗の可能性もあるが、判然としない。18～19世紀前半の年代が考えられる。285～289は小皿である。285は第1～2小期併行で、内面全面～外面部上半に織紋を施す。286も同じく第1～2小期併行と考えられ、

287・288は17世紀代、289は18世紀代に比定される。290は17世紀代の小壺である。291は18世紀代の壺蓋である。292は退化した脚の付く鍋で、18世紀以降の所産であろう。293は小壺または小瓶で、時期不詳である。294は灯明皿、295は皿で、ともに18世紀代に比定される。296は17～18世紀の灰巻鉢である。297は第1～2小期併行の擂鉢である。

このほか、時期・產地とともに不明の施釉陶器の細片が數十点出土した。専らⅡ層に包含されていたことなどから、ほとんどは近世の所産と思われるが、本節には掲載しなかった。

肥前陶磁（第29図、図版4-1）

当遺跡では、17世紀以降に肥前地方で産出された陶磁器も多少見られる。298は陶器の碗で、17世紀後半に比定される。299～313は磁器である。299は吉伊万里の染付瓶頸で、17世紀の所産である。300は青磁染付皿であり、全体に二次被熱（火受け）して変色している。17世紀に比定されよう。301・t・uは青磁染付片で、外側に一重網手文を施し、17世紀に比定される。青磁染付片vの外側の文様も一重網手文とすれば、同時期の所産である。302は染付皿で、口縁部内面に2条、同外面に1条の水平線を施し、体部外側に一重網手文を配し、やはり17世紀に比定される。303は染付碗で、17世紀後半～18世紀の箇鳴で与えられる。304は伊万里の青磁紅皿で、二次被熱している。体部外側に輪位の凹線を密に巡らし、高台外側下半部～外底面は露胎となっている。所産時期は18世紀前半であろう。305は青磁染付筒某砌で、18世紀に比定される。内底面周縁に2条の横線を巡らす。306・307は青磁染付皿で、ともに18世紀の所産である。青磁染付片sも18世紀に比定できるか。308・309は染付碗で、やはり18世紀の所産である。310・313は染付丸碗で、用途は湯呑である。310は18世紀末に比定され、313は19世紀前半の有田製品である。311は染付箱形湯呑である。外側に蛸唐草文を描き、18世紀後半～19世紀前半の年代が与えられる。312も外側肩部に蛸唐草文を配した仏花瓶で、同じく18世紀後半～19世紀前半に比定される。青磁片wは二次被熱しており、肥前磁器か否かさえ判じ難く、所属時期も不詳である。

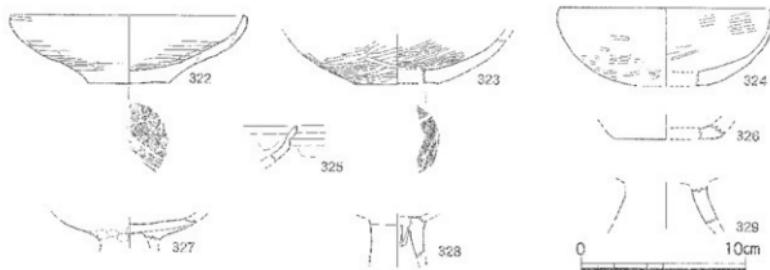
瀬戸磁器（第30図）

瀬戸窯で磁器生産が始まるのは應永元年（1404年）の第9小期であり、当遺跡出土の瀬戸産染付磁器も第9～11小期、すなわち19世紀代（第3四半期まで）に比定される。314～316は端反碗、317～319は碗である。320・321は残存部が乏しく、器種不明である。

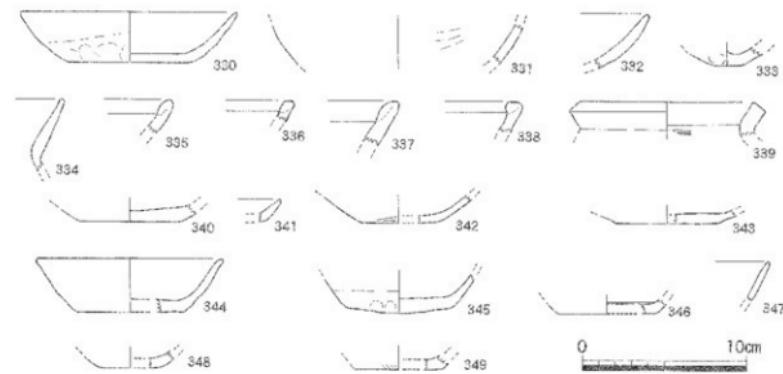
古墳時代の土師器（第31図）

土師器・土師質土器は計754点出土したが、そのほとんどが摩耗の烈しい小片・細片であるため、多くの場合、胎土等の隠された情報でおおよその帰属時期を判定することを余儀なくされた。こうした状況の中、古墳時代後期に属する土師器には当遺跡の黎明期を探究するうえで重要なものがいくつか存在し、本項ではそれらに言及する。古墳時代の土師器のうち、器種の判別できるものは全て供膳形態（壺類・高杯）である。

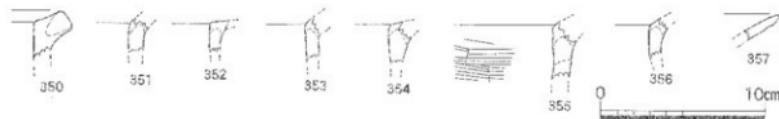
322～326は壺身である。このうち、322～324は3区E5グリッド東辺排水溝のV層下砂利層より一括して出土した。3点ともに外側面を輪位の算麻きで調整し、口径は14～15cmを測るが平底の外底面の直径はその約1/3と小さい。体部は彎曲しつつ立ち上がり、322・324の口縁部はさらに内彎する。また、322・323の外底面には回転台に使用したと考えられる木葉の圧痕が残っている。以上の特徴から、これら3点は遠寺研編年IV期中葉併行の須恵器壺身（注2）を模倣した土師器と考えられ、その実年代は7世紀中葉と推定される。さらに、322・324は烈しい二次焼成の痕が外側面に認められ、これらの最終使用に関し特殊な状況が想定される。層位的にも、現状では当遺跡最古の遺物と評価することができる。325は体



第31図 古墳時代土師器実測図

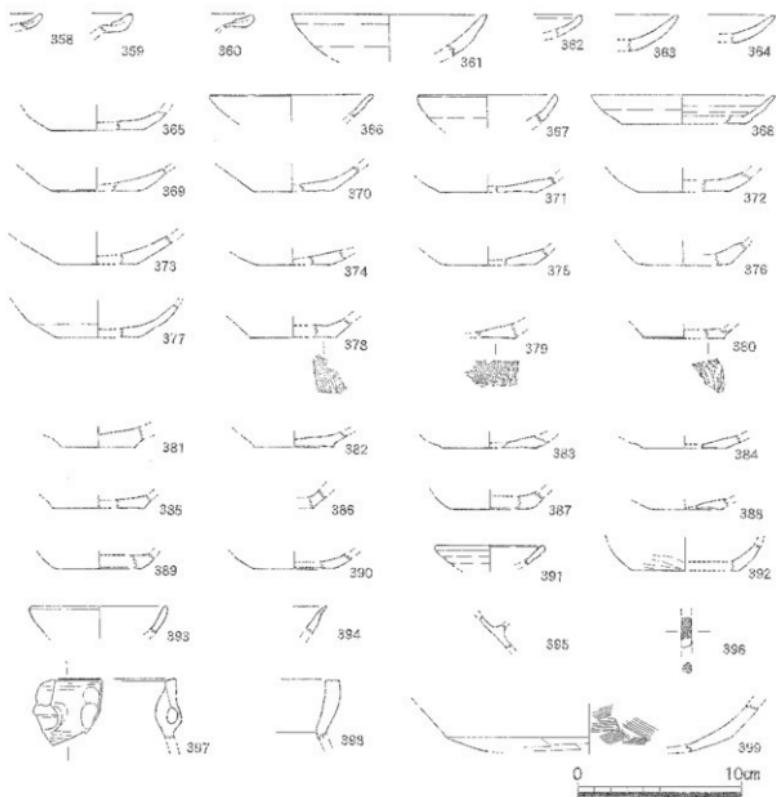


第32図 奈良～平安時代前期土師器実測図



第33図 平安時代中・後期土師器実測図

部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部と体部との境で屈曲し、この部分の外面に稜を成す。そして口縁部は外反する。これは、口縁部に蓋受け用の立ち上がりを有する須恵器壺身を模倣した形状であり、須恵器の型式変遷と同様に考えるならば322～324にやや先行するか、もしくはほぼ同時期と推定され、7世紀前半の実年代を与えることができる。326は底部片で、胎土等より古墳時代後期の絶鳴で捉えられる。327・328は高坏である。327は坏部と脚部との外面接合部に指痕圧痕を顕著に残す。328の脚部内面上端には縦位の簾压痕が数箇所認められる。ともに古墳時代後期に比定される。329は上方部位との接合部の直徑が大きく、下方にも大きく広がる脚部であり、高坏以外の器種である可能性も否定できない。所属時期は古墳時代後期と考えられる。



第34図 中・近世土師質土器実測図

奈良～平安時代前期の土師器（第32回）

本項では狭縫の律令期に帰属する土師器に言及する。実測し得なかった大多数の当該時期土師器器片を含めて、供膳形態（环・皿類）が煮沸形態（甕頸）を歴的に大きく凌駕する。330～332は奈良時代の环身である。古墳時代の环身と異なり、体部～口縁部の内側は頗著でなく、むしろ直線的に立ち上がる。333は手捏ね成形のミニチュア环である。奈良時代の祭具の一様と考えられる。334は奈良時代の長脚甕の口縁部である。335～338は駿東型甕の口縁部で、口縁端部を内側に折り曲げて肥厚させる。335は奈良時代、336～338は9世紀の所産と推定される。339は小型の甕で、口縁端部に幅約1cmの面を有し、内面口縁部・体部底直下に横位のハケ目が認められる。所属時期は9世紀と考えられる。340・341は奈良～平安時代前期の範疇で捉えられる皿である。342は甲斐型皿で、外面底部付近に横位の窓開き度が残っている。343は内面に炭素を吸着させた内黒皿で、9世紀に比定される。344～347は横位のナデを器面調整の主体とする駿東型环である。駿東型环は時期が下るにつれて全体の法量とともに底径の対口径比も縮小する傾向がある。よって、復原される底径により、344は9世紀前半、345・346は9世紀中葉に比定さ

れる。347は口縁端部が細く尖り気味であり、被束型坏であるとすれば、その所属時期は10世紀前半と考えられる。348は復原される底径が小さいので、所属年代は同じく10世紀前半と考えられる。349は内面は通常の土師器坏と同様であるが、外面は残存部全面に炭素が吸着し、「外黒坏」と称することができるかもしれない。外面の底面付近に軸位の範囲が認められ、復原される底径から10世紀前半に比定される。

平安時代中・後期の土師器（第33回）

当遺跡出土の平安時代中・後期（10～12世紀）の土師器のうち、いずれの部位にせよ直径を復原し得るものは皆無である。これは、該期の土師器が専ら比較的大型の煮沸形態で占められ、それらが細碎されていることによるのであろう。このことは当遺跡出土土解器において供膳形態が優位な古墳時代や奈良時代～平安時代前期と大きく異なる点である。そこで、当遺跡周辺では該期の供膳形態は灰釉陶器が席巻してしまい、土師器の供膳形態は生産・供給されなくなったとも考えられるのである。

東海地方における平安時代中期の煮沸形態の土師器として、いわゆる清郷型壺（鍋）が挙げられる。この煮沸形態については、愛知県一宮市清郷遺跡出土資料を標識として岩野見司氏が最初に「清郷型壺」を提唱した（岩野1974）。その後、野宮浩之氏が愛知県における平安時代後期から鎌倉時代前期の煮沸形態土師器・知多窯陶器全般の編年を試み、「一般的には径に比べ器高が比較的に低く、口径の広い器形を漠然と「鍋」と呼ぶことが多いが、具体的な使用形態において中世以降を見越した煮沸形態の姿としてそれを意味づけるのであれば、「鍋」「壺」の区別は重要である。」と説きながらも、いざ編年案では「清郷型」が鍋か壺かについては明言を避けている（野井1988）。この点を永井宏幸氏は明確にし、竈で使用される長胴・平底タイプを「壺」、閉炉裏で使用される球胴・丸底タイプを「鍋」と定義づけ、「清郷型」は「清郷型鍋」と呼称されるに至った（永井1996）。この中で永井氏は清郷型鍋の起源にも言及しており、8世紀の三河型壺と10世紀以前の平安京を中心に分布する羽釜との2系統が想定されている。清郷型鍋の系譜は当該資料の編年を考慮するに際してその後も重複され、今世紀初年、北村和宏氏は8～9世紀に専ら旧三河国域に分布する「三河型壺」と10～11世紀の清郷型鍋は一連の土師器煮沸形態と捉え、三河国境を境に階級的分布を示す第Ⅰ段階と周辺諸国へ分布が拡散する第Ⅱ段階に大別し、第Ⅱ段階が清郷型鍋に相当する編年案を呈示した（北村2001）。本項で言及する清郷型鍋については、この北村氏編年を使用する。

350～356は清郷型鍋の口縁部～体部上端部である。いずれも暗褐色系の暗い色調で、決して赤褐色や橙褐色を呈することはない。また、胎土には微細な黒雲母または金雲母が含まれ、部位不明で実測不能な細片については、このような胎土・色調の特徴から平安時代中・後期の土師器煮沸形態と判断した。350は口縁部を外反させてから粘土をさらに維持して口縁端部を肥厚させ、同端面が幅広となり、北村氏編年のG類に相当する。G類は第Ⅱ段階第1小期に編年され、共伴する灰釉陶器の型式がO53であるため、実年代は10世紀前半と考えられている。351は口縁部が同端部に向かって肥厚するか、もしくは体部との境界部の厚みを保つて口縁端部に至ることが予測される。G・H・I類のいずれかと考えられる。H類はG類と同じくO53併行、I類は第Ⅰ段階第2小期に編年され、H72の灰釉陶器を共伴するため10世紀後半に比定されている。従って、351は10世紀代の所産と言えよう。352～356は扁曲する口縁部が水平方向に伸びるか、または口縁端部に向かって厚みを減じ、断面三角形状を呈す。これらはJ類の特徴であり、J類は第Ⅰ段階第3小期に編年され、百代寺窯式湖の灰釉陶器を共伴することから11世紀代の実年代が考えられている。なお、清郷型壺は器底調整は内外面ともにナデ調整を基本とするが、355は体部内面に横位のハケ調整を施し、どちらかと言えば少數例に属す。357は玉縁口縁の鍋で、12世紀代に比定される。

中・近世の土師質土器（第34図）

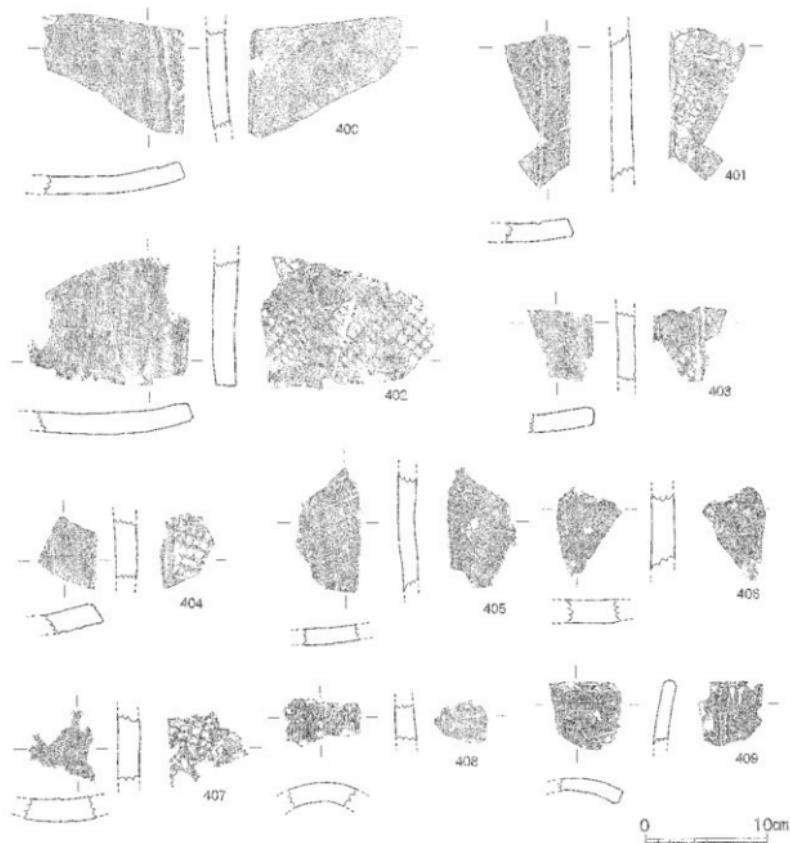
358～360はいわゆる伊勢型鍋の口縁部である。極めて薄い器壁の口縁部が水平方向に引き伸ばされ、内側に折り返されて額指輪程度の面を成し、口縁端部は若干上方へ立ち上がる。このような特徴は新田洋氏による編年（新田1985）における鍋5類の属性であり、鍋5類は12世紀末～13世紀に比定されている。また、この5類の伊勢型鍋はその產地と目される旧伊勢国の大内、特に東海道筋の諸国に限って発出されており、静岡県内では最も普遍的に見られる伊勢型鍋の型式である。

361～394はカワラケである。静岡県内のカワラケの縦年については松井一明氏の研究があり（松井1993b）、以下の記述もこれを参考に進める。361～365は13世紀代と推定される一群で、全てロクロ成形である。また、色調は全体に白味掛かっている。361は復原される口径が12cmを測る中形品で、他地方ではあるが西遠江および東遠江に類例がある。362は低平な器体で口縁端部を少々挿み上げ、外側に幅5mm前後の面を成している。363・364の器体も低平であり、該期の小形品（口径9cm前後）の特徴の一つである。366～390は強いて言えば駿府城跡出土の16世紀前半に比定されるカワラケに近しい一群と考えられ、いずれも小形または中形品、ロクロ成形である。また、体部は丸みを帯びつつ緩やかに立ち上がり、色調は明赤褐色・橙色系統を基調とする。ただし、駿府城跡出土資料では口縁部が外反する形態が通常であるが、当遺跡出土資料で口縁部の外反が認められるのは366のみである。381～386は体部・底部の境界で肩垂し、底部が高台状に高まる。387～390は底部が中心に向かって若干押し上げられて上げ底状を呈す。391はロクロ成形で口縁部が肥厚し、同端部を丸く収める小形品である。16世紀代の所産か。392は外面に不整方向のナデが認められ、非ロクロ成形の可能性もある。体部が丸みを帯びて立ち上がり、非ロクロ成形とすれば16世紀後半の中遠江に類例がある。393の体部はやや内脣するが立ち上がる角度は急であり、17世紀前半に比定し得るか。394は急な立ち上がりの口縁部が外反して端部を薄く收め、色調も比較的鮮やかな橙色であることから18世紀代に比定される。

395は尾張産の鋸付鍋で、鋸は折損しているが15世紀に比定される。396は棒状の小片で、表面が丁寧にナデ調整されており、何らかの土製品の一部と考えられる。II層出土であり、近世の所産か。397～399は内耳鍋である。いずれも外面の残存部全体に煤が付着し、399に至っては断面にまで煤がこびり着き、厚く付着した煤のために底部の調整が十分観察できない有様である。内耳鍋が大量に出土した磐田郡福田町元鳥遺跡における分類（加藤1999）に従えば、397・398の口縁部の形状は内耳鍋B類（内唇形内耳鍋）に相当し、所属年代の上限は大室第1段階後半（16世紀前葉）と考えられている。399の底部から体部への屈曲と体部の立ち上がり角度は内耳鍋B類もしくは同D類（半球形内耳鍋）に相当し、概ね16世紀代に比定される。

瓦（第35図）

当遺跡では布目压痕を有する古代の瓦片が計10点出土した。400～407が平瓦、408・409が丸瓦であり、斬瓦と認められる破片はない。胎土は3～5mm大の角礫を若干、0.5mm大以下の白色砂粒を少量含み、概ね精良である。407は酸化炎焼成でにぶい黄褐色を呈し、焼成不良と言えるが、他は須恵器に似た灰色～灰白色の良好な還元炎焼成である。平瓦・丸瓦ともに厚さ1.8cm以下で、古代の瓦としては比較的薄手の部類に入るようである。平瓦の凹面には継位の僅かな段差が認められるものがあり（400・401）、桶型の縁じ目の压痕と考えられる。また、平瓦で左右の端部が残存するもの（400～404）は、その端部が3面（400～402・404）、または4面（403）の切断面から成り、3面構成のうち側辺とも呼ぶべき最も幅広の切断面は平瓦の円弧によって復原した円の中心に向いている。よって、これらの便辺は桶巻作りの分割面と判断される。他の面は平瓦分割後の端部網目状の過程で生じたものであろう。このような分割・網目状の痕跡は丸瓦の玉縁部片409にも見られるが、409は右側辺のみならず玉縁先端にも同様の面取り調整を



第35図 瓦実測図

施している。他方、平瓦にも前後の端部が残存するものもある（402）が、前後の端面にこのような面取り調整はされず、やや粗雑に切り落としている。平瓦の凸面には一様に斜格子叩き目が残されており、瓦面でネガになる部分（格子目の小区域）は $6 \times 6\text{ mm}$ の規格でまとまっている。402では叩き目どうしの重複も見られ、これによって叩き原体が約 $5 \times 5\text{ cm}$ の大きさであることも分かる。斜格子叩き目は部分的に縱位（401～403・405）または横位（404・406）のナデで消されているが、401ではナデ調整による消滅ではなく、当初より言わば十字路状の空間を残して叩きを施した痕跡も認められる。一方、丸瓦の凸面には縱位の縞目叩き目が施されている（408）。玉縁部分凸面には横位のナデ調整があり、同凹面には縱位の段差が認められる（409）が、これは成形時の円柱状の型に被せた袋状の布に縦方向に縫い付けられた縞の圧痕と考えられる（注3）。

以上のような特徴を有する瓦が純然たる水田遺跡である当遺跡に供給されたとは考え難く、やはり西

方約300mに所在する袖木瓦窯跡との関連が想起される。同瓦窯跡が立地する丘陵末端はすでに削平されしており、操業当時の炭灰や不良品等の廃棄の状況を知ることはできないが、昭和30~40年代に表面採集された平瓦片2点と丸瓦片(玉縁部分)1点が報告されている(中野1989)。この内で凸面がハケ調整される平瓦は本郷坪遺跡出土資料には存在しないが、斜格子叩き目の形状や布目痕の細かさ、そして胎土・焼成・色調は今回当遺跡で出土した瓦に共通する。ゆえに、当遺跡出土の瓦は袖木瓦窯跡の商品に由来する蓋然性が高い。また、中野1989ではこれらの瓦の製作年代は平安時代以降と推定されているが、当遺跡出土の平瓦は明らかに捲巻作りであり(袖木瓦窯跡採集の平瓦にも捲巻技法が見られる)、同技法は平城京造営時には一枚作りに取って代わられた古い技法であり(森1986)、地方における瓦製作の技術革新が畿内より遅れるとしても平安時代中・後期では時期的に下り過ぎの貌がある。確証はないものの、現時点では平安時代前期までの年代を考えたい。ところで、これら袖木瓦窯跡の商品と考えられる瓦は静清平野の既知の寺院・官衙関連遺跡で全く出土しておらず、その供給先は依然として不明である。僅かに、曲金北遺跡で同様の瓦が確認されているが、ここでは詳述を避けたい(注4)。

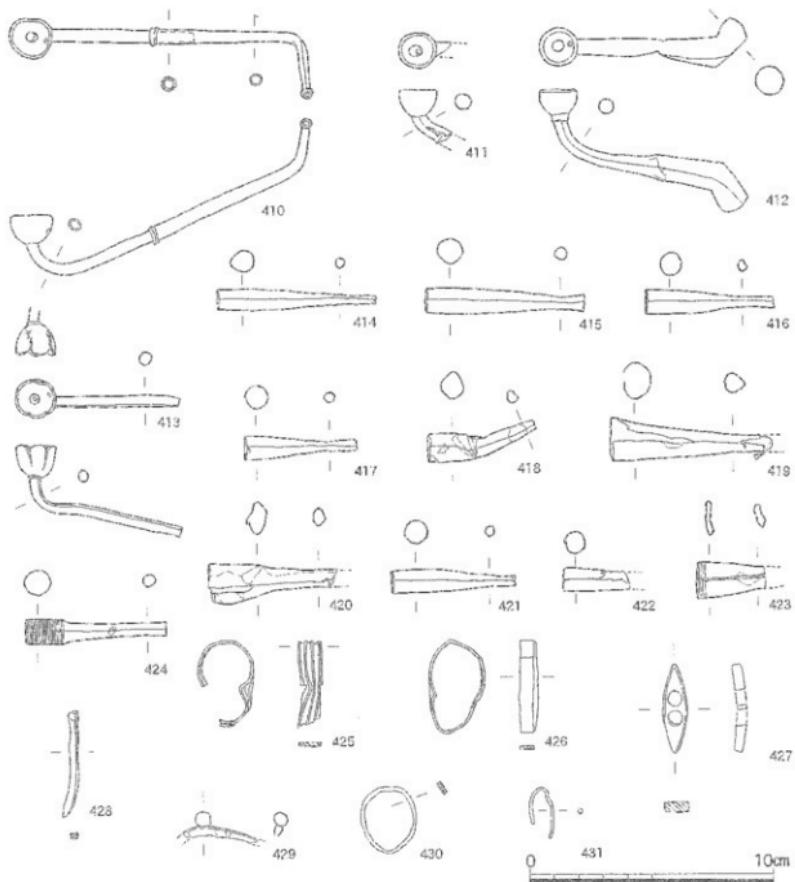
注

- 1 中野1997では、壺器系中世陶器の定義として分煙柱を伴う竈窓で焼かれた製品とされており、焼成施設を重視して概念規定する立場と言える。
- 2 换算すると、この須恵器坯身は底部に高台がなく、口縁部に坯蓋を受け止めるための立ち上がりもない型式で、代わりに対となる坯蓋にかえりと摘みが付く。
- 3 この紐は成形台上で作った円筒(半截分割前の丸瓦)から袋状の芯を取り外しやすいうようにするための工夫と考えられている(森1986)。
- 4 平成17年3月29日、静岡市教育委員会保管の静岡市内諸遺跡出土の瓦と本郷坪遺跡出土の瓦を比較検討したが、比較対象に未公表資料が多數含まれていたため、敢えて言及しないことにした。

第2節 金属製品・石製品

銅製品(第36図)

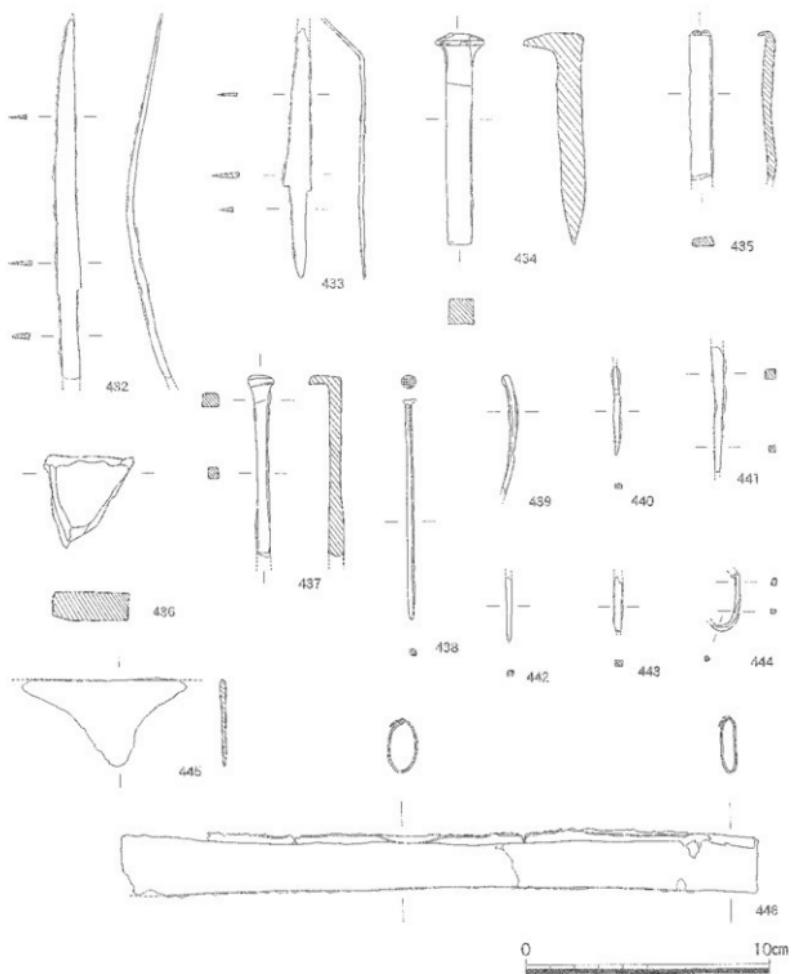
当遺跡出土の銅製品に厳密な所属年代を与えることは難しいが、いずれも近世、もしくは近世を大きく超らない時期の所産と考えられる。410~424は煙管である。410は火皿から吸口まで全て真鍮製で、雁首の延長部分を吸口の延長部分に押し込んで一体を成す。吸口は端から2.5cm当たりで折れ曲がっており、雁首も火皿の口縁部が管本体と平行ではないことから、後ろ向きに曲っていることが分かる。411~413は真鍮製の雁首である。413は花形の火皿を有し、火皿の外面には三角形を成す刻線が認められるが、単なる傷ではなく、何か意味があるものと推測される。また、413の管状部分は真鍮板の両端が重なるよう巻いている。これも他の煙管には見られない特徴である。414~420は真鍮製の吸口である。421~424は銅製の吸口である。424は管本体を受ける部位にコイル状の細かい沈澱を数十条施し、その全体形は他の吸口に較べて異形とも言え、本当に煙管の吸口かどうか疑わしい。425・426は銅製の資金である。何を貯め(詰め)ていたのかは定かでない。427は縫を透孔が2つあり比較的堅牢である。銅製の資金かもしれないが、何を留めていたのかは不明である。428は棒状銅製品としか呼び様がないが、断面は長方形で一端が尖っている。一種の刺突具であったのかもしれない。429は蝶臺口の銅製口金であり、玉状部分は中空である。430は用途不明の環状銅製品、431は銅線である。



第36図 金属製品夾測図①

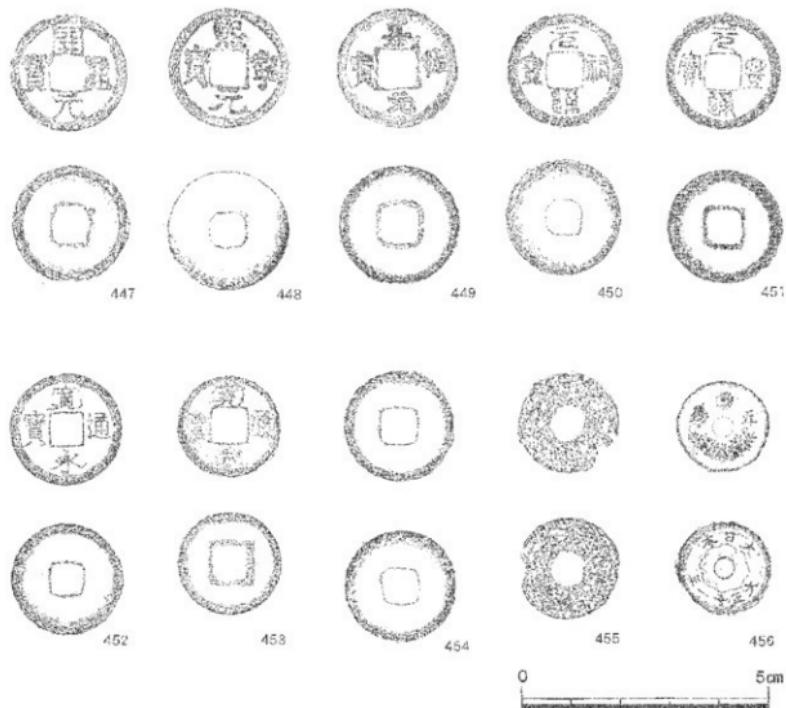
鉄製品（第37図）

432・433は刀子である。432は身の部分は完存に近いが、茎は一部失われている。土庄等の影響で挿曲している。433は茎は完存するが、身は折れ曲がり、先端付近は失われている。2点ともIV層より出土し、恐らく古代の所産と考えられる。434は断面正方形の堅牢な釘のようにも見えるが、先端は身部と同じ幅の平刃となっており、鑿の用途が考えられる。435は遺存する一端が短く曲げられており、釘頭のよう打撃を受ける部位にも見えるが、全体に薄く扁平で、その貧弱な外見から工具とは考え難い。436は厚い金属塊で表面に微細な発泡が認められ、磁石に反応することから鉄滓の可能性がある。437・438は釘である。437は釘頭がL字状で断面正方形を呈し、近世もしくはそれ以前の所産と考えられる。残存する長さから、少なくとも三寸釘以上の規格であると考えられる。438は現在使用されていない型式の三寸釘



第37図 金属製品実測図②

であるものの明らかに機械工業製品であり、近代以降に比定される。439～443は残存状態が悪いが断面は方形で、近世またはそれ以前の釘の可能性がある。444は先端が欠損するものの、基部に近い部分がく字状に屈曲し中途より弧状に曲がる現状が当初からの形態であるとすれば、釘針の可能性がある。445は鉄板片であり、現状の不整三角形平面の一辺のみ製品本来の外郭を留めている。446は扁平な管状鉄製品である。2区A3グリッドの護岸列石付構造遺構の底面直上より出土し(図版12-1)、近世以降の所産と考えられる。極めて軽く脆弱であるため、検出した当時は有機質の製品もしくは自然遺物と疑われたが、



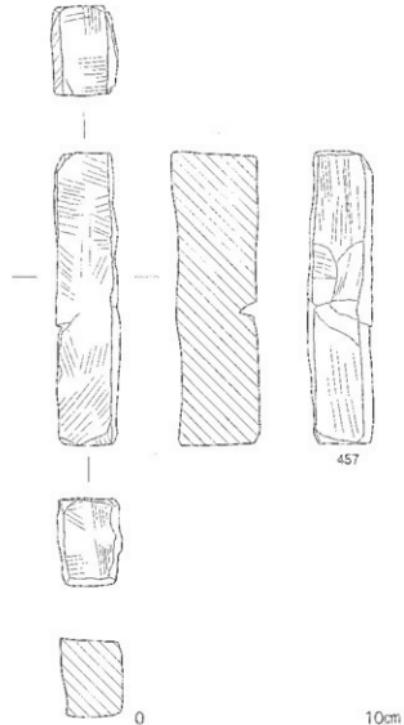
第38図 鉄貨拓影図

実際は厚さ0.5mm前後の薄い鉄板を一部重なるように巻いた人工物である。本来はより長かった可能性もあり、扁平な形状も土圧等の影響かもしれないが、いずれにしても用途不明の鉄製品である。

錢貨（第38図）

錢貨は10点出土した。約1,000m²当たり1点の密度であるから、出土量は少ないと見える。447は唐錢の開元通寶で、初鑄年は621年である。448～451は北宋錢である。448は銕文が真書の熙寧元寶で、初鑄年は1068年である。449は真書の嘉祐元寶で、初鑄年は1056年である。450は篆書の元祐通寶で、初鑄年は1086年である。確認調査TP6の南東拡張部（本調査ではB5グリッド中央部に相当）で検出された南北界跡群の直上より出土した。451は篆書の元豐通寶で、初鑄年は1078年である。以上の渡来錢は平清盛が主導した日宋貿易で国内にもたらされたものであり、当遺跡における埋没年代の上限は12世紀末を越ることはない。452・453は寛永通寶である。「寛」と「寶」字のそれぞれ最後の2画の起點が離れており、ともに元禄10年（1697年）以降に铸造されたいわゆる新寛永と判断される。453は銕文の摩滅が著しい。454・455は摩滅・劣化が烈しく、錢種不明である。456は大正11年铸造の五銭硬貨である。2区A3グリッドの護岸列石付構造遺構の覆土中より出土した。本郷坪遺跡の地に三光紡績静岡工場が設立された翌年铸造の錢貨であるため、護岸列石付構造遺構の埋没年代（II層の堆積時期）の一端を示す遺物ではなく、

紡績工場操業初期の混入と考えられる。



第39図 石製品実測図

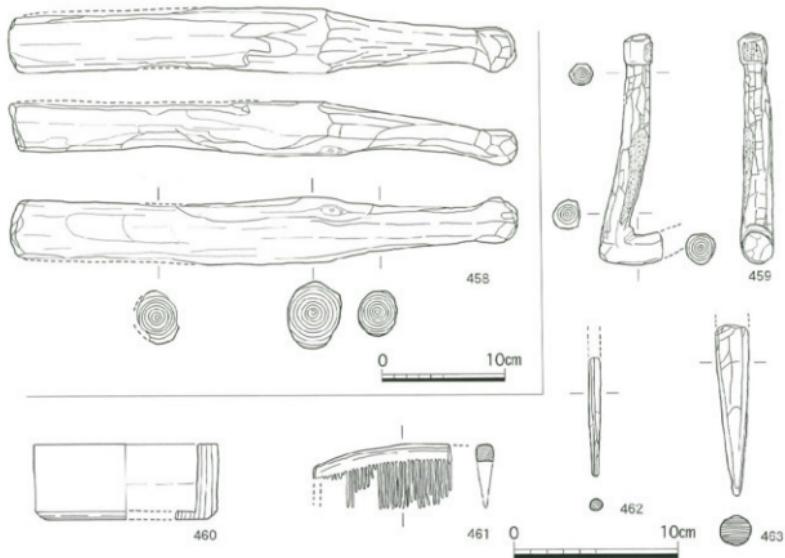
石製品（第39図）

石製品は457の砥石1点のみ出土した。砂岩製で、ほぼ直方体を呈し、長さ12cm、断面は長辺3.3cm、短辺2.5cmを測る。欠損部分は少なく、相対的に幅広の2側面を除いて小口面を含む4面に使用痕が認められ、同じ面でも研磨の方向は様々である。出土時には中央部付近で2片に割れており、よく使用されたが折れてしまった時点で廃棄されたようである。

第3節 木製品

当遺跡は水田遺跡にもかかわらず、農耕具は全く確認されていない。第40図は当遺跡で出土した木製品の全てである（注）。458は横櫛である。3区CD4グリッド南東部の東西壁畔直下より出土した。枝部には細かく丁寧な調整が施され、打撃に使用された面も丁寧に調整されているが欠損・剥落が烈しく、その反対側は腐食している。材の樹種はヒノキ科である。459はIV層出土で、自在鉤の可能性がある。アカマツの股木を利用し、一端に縦掛けを削り出し、自在鉤であるとすれば、もう一端は鉤状となるはずであるが、欠損している。縦掛けと基幹部分には樹皮が付着した部分（スクリーントーン部分）がある。東海地方では古墳時代後

期に住居の火所として窓が導入され、平安時代前期頃まで盛行したが、その後日常の煮炊具として壁に垂わり鍋が普及するとともに住居の火所も囲炉裏に変化した。囲炉裏の上で鍋を吊り下げるが自在鉤であり、近世の或る時期から鉄製の自在鉤が普及することから、459が木製の自在鉤であれば広く中世の範疇で捉えられる。460は楕円形の挽物で、縱に割られた状態で出土した。材の樹種はカバノキ属である。461は横櫛で、1区B4グリッドの腰岸列石付壁畔直上で出土した。材の樹種はカエデ属で、横長1cm当たり4本の歯を作り出す。近世の所産と考えられる。462は一端を細く仕上げ、縦位に細かく面取りしていることから箸と判断した。材の樹種はスギである。463はスギ材の杭状先端である。残存部の最大径が2cmと細く、水田に打設される杭とは考え難い。



第40図 木製品実測図

注

加工痕のある木片は數十点出土したが、器種を推測することさえ不可能な破片は現地調査中および資料整理の過程で全て廃棄した。また、出土当初は墨書きかと思われた木片・竹片の描線状黒色部分はX線撮影の結果、単なる汚れまたは炭化と判明したため、これらも全く廃棄した。水田関連施設と考えられる杭も近世以降の所産と考えられる（第16図）ため、これらも遺構として記録はしたが出土遺物として取り扱っていない。

第4節 自然遺物およびその自然科学的分析

佐藤洋一郎（総合地球環境学研究所）

花森効仁子（株式会社ジェネティック）

緒言

本遺跡は安倍川の扇状地静岡平野の東部に位置し、西側には谷津山を配した微高地であり、東南側には近年までレンコン畑が存在した西高東低の低湿地遺跡である。出土した遺物を科学分析することにより本遺跡の年代、および当時の植生環境の推定を試みた。年代測定にはⅢ層およびⅣ層から出土した植物体、種の同定にはⅡ層からⅥ層より出土した動植物の遺体、DNA鑑定には年代測定に用いた炭化したおにぎり状の遺物を用いた。

I. 出土試料の放射性炭素年代測定

1. 試料

測定試料は、本郷坪遺跡で検出された水田畔堆より出土した炭化物3点（試料Na050201、050202、050203）で写真のとおり木片2点と炭化したおにぎり状の塊1点である。なお、測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.の協力を得た。



2. 方法

加速器質量分析（Accelerator Mass Spectrometry; AMS）法による放射性炭素年代測定の手順は次のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行なった。

- 1) 蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸（HCl）により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（NaOH）により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸（HCl）で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で80°Cで乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダー

入れてプレス機で圧し、グラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行なった。測定試料と方法を第1表にまとめた。

第1表 試料と方法

試料No	試料名	種類	前処理・箇整	測定法
No.1	No.050201	炭化した木片	酸一アルカリ一酸洗浄	AMS
No.2	No.050202	炭化した木片	酸一アルカリ一酸洗浄	AMS
No.3	No.050203	炭化したおにぎり状の塊	酸一アルカリ一酸洗浄	AMS

* AMS (Accelerator Mass Spectrometry) : 加速器質量分析法

3. 結果

年代測定の結果を第2表に示す。

第2表 測定結果

試料名	測定No (Beta-)	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	曆年	代(西暦)
No.1	206208	590±50	-25.9	580±50	交点:cal AD 1400 1 σ:cal AD 1310~1370, :cal AD 1380~1420 2 σ:cal AD 1290~1430	
No.2	206209	430±50	-26.0	420±50	交点:cal AD 1450 1 σ:cal AD 1430~1490 2 σ:cal AD 1420~1530, :cal AD 1560~1630	
No.3	206210	590±50	-25.5	580±50	交点:cal AD 1400 1 σ:cal AD 1310~1370, :cal AD 1380~1420 2 σ:cal AD 1290~1430	

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えて算出した年代を示す。

4) 历年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中¹⁴C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

曆年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と曆年代較正曲線との交点の曆年代値を意味する。 1σ (68%確率) と 2σ (95%確率) は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

4. 所見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに曆年代較正を行なった結果、試料1では580±50年BP (2 σ の曆年代でAD 1290~1430年)、試料2では420±50年BP (同じくAD 1420~1530年、AD 1560~1630年)、試料3では580±50年BP (同じくAD 1290~1430年) の年代値が得られた。

II. 種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物中に残存することが多い。そこで堆積物から種実を検出し、その群集の構成や組成を明らかにすることで古環境の推定を行なうことが可能である。また出土した単体試料等の同定から、栽培植物や固有の植生環境を調べることも可能である。

2. 試料

試料は水洗選別済みの種実で、遺物番号N1~N37の計37点である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行なった。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

(1) 分類群

樹木4、草本1の計5分類群が同定された。学名、和名および粒数を表3に示し、モモとウメの形状について計測した結果を表4と表5に示した。主要な分類群については写真を図版に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

[樹木]

マツ属複雜管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* 種果 マツ科

黒褐色で卵形を呈す。種鱗先端の外部に露出する部分は扁平五角形であり、その中央にはへそがある。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. 核 クルミ科

茶褐色で円形～梢円形を呈し、一端が尖る。側面には縱に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。完形のものはなかった。

ウメ *Prunus mume* Sieb. et Zucc. 核 バラ科

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。完形は1つで計測の結果、長さ26.03mm、幅20.16mm、厚さ15.49mmであった。

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。計測の結果、平均値は長さ26.87mm、幅20.08mm、厚さ13.18mm、最大値は長さ31.89mm、幅24.53mm、厚さ17.42mm、最小値は長さ17.90mm、幅15.21mm、厚さ11.86mmであった。

[草本]

ウリ類 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

淡褐色～黄褐色である。楕円形を呈し、一端には「ハ」字状のへこみがある。

藤下(1992)による長さ8.1mm以上の大粒種子(モモルディカ型)にあたる。

(2) 種実群集の特徴

1) NI・A-5、N・III層

モモ1が同定された。

2) N2・A-5、III層

ウメ1が同定された。

3) N3・A-4、N・III層

モモ1が同定された。

4) N4・A-5、S・IV層

ウリ1が同定された。

5) N5・A-3、II層

ウメ1、ウメ仁1が同定された。

6) N6・B-5、S・IV層

モモ1が同定された。

7) N7・B-5、S・IV層

モモ1が同定された。

8) N8・A-5、S・IV層

マツ属複維管束亜属1が同定された。

9) N9・A-5、N・IV層

モモ1が同定された。

10) N10・A-5、IV層

モモ1が同定された。

11) N11・A-5、N・IV層

モモ1が同定された。

12) N12・A-4、N・III層

モモ1が同定された。

13) N13・A-4、N・III層

モモ1が同定された。

14) N14・A-4、N・IV層

モモ 1 が同定された。

15) N15・A-4、S・IV層

モモ 1 が同定された。

16) N16・A-4、S・III層

モモ 1 が同定された。

17) N17・A-4、S・IV層

オニグルミ 1 が同定された。

18) N18・B-6、N・IV層

ウメ 1 が同定された。

19) N19・ α -3、N・IV層

モモ 1 が同定された。

20) N20・B-2、N・IV層

モモ 1 が同定された。

21) N21・B-2、N・IV層

モモ 1 が同定された。

22) N22・D-7、S・IV層

モモ 1 が同定された。

23) N23・D-6、N・IV層

モモ 1 が同定された。

24) N24・D-6、N・IV層

モモ 1 が同定された。

25) N25・C-6、N・IV層

モモ 1 が同定された。

26) N26・C-5、N・IV層

オニグルミ 1 が同定された。

27) N27・C-6、S・IV層

モモ 1 が同定された。

28) N28・D-5、S・IV層

モモ 1 が同定された。

29) N29・D-4、S・III層

モモ 1 が同定された。

30) N30・D-5、N・III~V層

モモ 1 が同定された。

31) N31・D-4、S・IV層

モモ 1 が同定された。

32) N32・D-5、S・IV下砂利層

マツ属複維管束亜属 1 が同定された。

33) N33・D-5、N・III~V層

モモ 1 が同定された。

34) N34・D-5、N・IV層

モモ 1 が同定された。

35) N35・D-3、S・IV層

モモ 1 が同定された。

36) N36・D-3、N・IV層

モモ 1 が同定された。

37) N37・D-4、S・IV層

モモ 1 が同定された。

第4表 本郷坪遺跡モモ核計測値

遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
H1	24.87	16.88	11.86
H6	27.68	21.55	16.70
H7	31.89	21.79	16.60
H9	28.21	23.56	17.42
H12	30.03	18.81	—
H14	28.13	17.37	12.75
H15	27.13	20.09	17.32
H16	24.35	19.42	14.43
H19	22.88	18.73	15.23
H20	25.40	20.73	—
H22	27.16	19.09	16.88
H23	29.05	21.66	—
H24	26.06	20.87	16.49
H27	27.13	21.32	16.42
H28	29.16	20.61	14.01
H29	29.45	19.63	13.97
H30	24.85	21.01	16.01
H31	31.40	24.53	16.97
H33	25.00	20.44	14.82
H34	28.09	21.52	15.89
H35	25.50	15.21	12.21
H36	17.90	16.12	12.63
H37	26.76	20.90	14.57

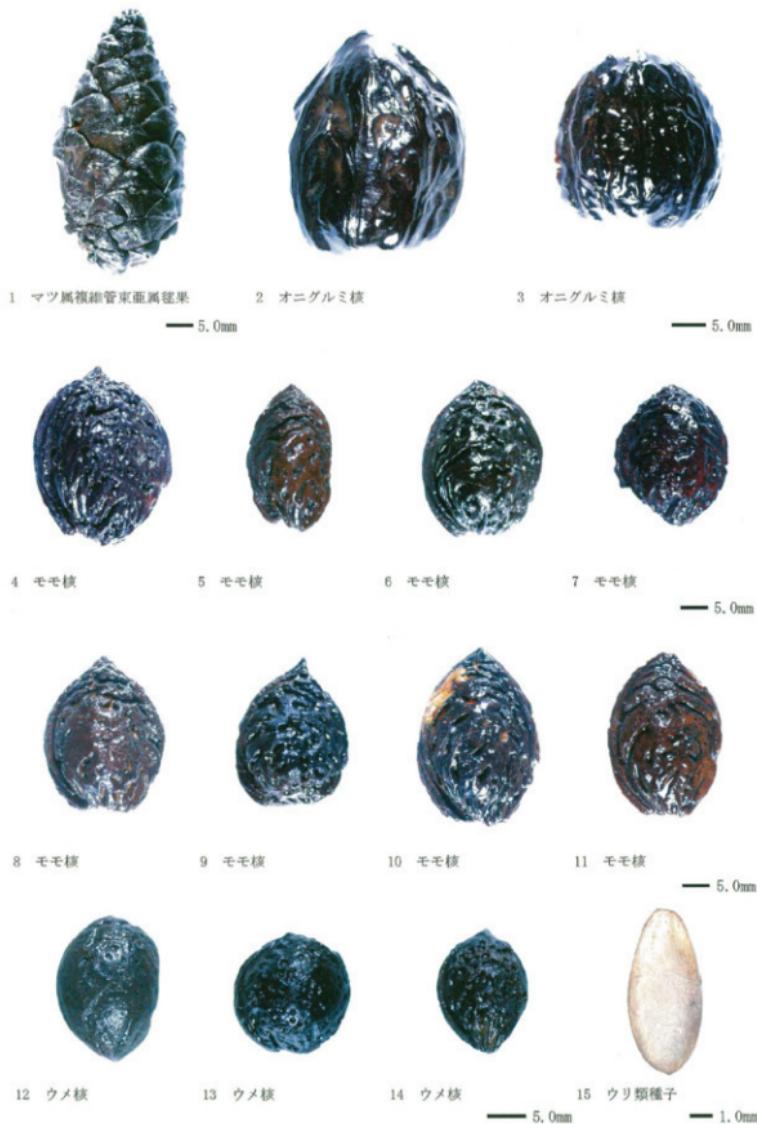
第5表 本郷坪遺跡ウメ核計測値

遺物番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
H18	26.03	20.16	15.49

表3 本郷坪遺跡における種実同定結果

— 50 —

本郷坪遺跡の種実



5. 考察

本郷坪遺跡において検出された種実の同定を行なった結果、樹木ではマツ属複雑管束亞属、オニグルミ、ウメ、モモ、草本ではウリ類が検出された。モモが最も多く、モモは稻作と共に伝来し、弥生時代以降の多くの遺跡から出土する。ウメも同様に稻作と共に伝來した栽培植物である。他に食用となる栽培植物はウリ類があり、弥生時代以降多くの遺跡から出土する。食用となる有用植物ではオニグルミが検出されている。種子は食用となり、遺跡では核となった果実の最内層の内果皮が残存しやすく、出土例が多い。マツ属複雑管束亞属は二次林要素または人為環境にも生育できる種である。

III. 動物・貝遺存体同定

松井 章（奈良文化財研究所）

1. はじめに

一般に日本の国土は、火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存状態には恵まれていない。そのため、遺跡で動物遺存体が出土するのは、貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰が代表的で、近年では湿地環境の遺跡や遺構から多くの動物遺存体が報告されつつある。しかし、乾燥した沖積平野遺跡ではほとんどの動物遺存体が、長い年月の間に湿潤と乾燥を交互に繰り返す酸性土壌に分解されて土に還ってしまっている。ところが、の中でも動物の歯、特にエナメル質は、動物骨格の中でも腐食に強く、大きく堅固なウシやウマの臼歯のエナメル質が、乾燥環境から出土する例は珍しくない。また微細な魚骨の歯のエナメル質は、発掘中に肉眼で採集することはほとんど不可能で、遺構の埋土を1ミリ以上のフライの面上で洗うことが必要である。本遺跡でもそうした哺乳類の歯のエナメル質や灰化して無機質化した微細な魚骨を検出することができ、それぞれの種類を同定し、その生態的情報を援用して、当時の環境を復元したり、過去の人々の生業や食生活を知ることができることを実証できた。

2. 試料

試料は、本郷坪遺跡より出土したもので、遺物番号H1・B-3・S・II層の1点、H2・A-2・N・III～IV層の2点、H3・C-7・N・IV層の1点、H4・C-4・S・III層の2点、H5の1点、H6・D-5・N・IV層の1点、H7・D-6・N・IV層の1点、計8点である。

3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行なった。

4. 結果

(1) 分類群

哺乳類2、貝類2分類群が同定された。学名、和名および部位を第6表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となった形態的特徴を記す。

[哺乳類]

イヌ科

タヌキ *Nyctereutes procyonoides* 上顎犬歯・左

ウマ科

ウマ *Equus cabalus* 上顎臼歯・左

ウマ *Equus cabalus* 上顎臼歯・右

本郷坪遺跡の骨・貝

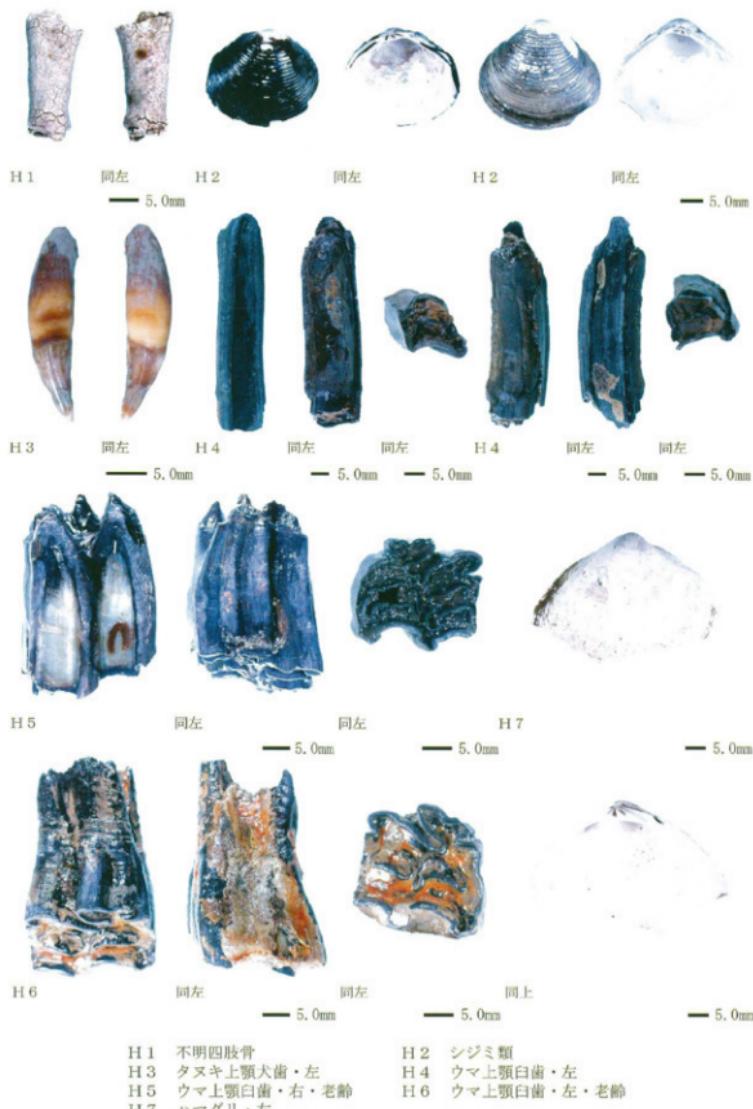


表6 本郷坪遺跡における動物・貝造存体同定結果

No.	グリット	層位	小分類	学名	種類	部位	左右	部分	備考
H1	B-3・S	II層	不明	<i>Unknown</i>	哺乳類	四肢		四肢骨	タヌキ、アナグマ、テン、カワウソ以外。
H2	A-2・N	III～IV層	シジミ類	<i>Corbicula sp.</i>	貝類				ヤマトシジミ・マシジミかは不明。
H3	C-7・N	IV層	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>	哺乳類	上顎	左	臼歯	
H4	C-4・S	Ⅲ層	ウマ	<i>Equus cabalus</i>	哺乳類	上顎	左	臼歯	
H5			ウマ	<i>Equus cabalus</i>	哺乳類	上顎	右	臼歯	老齢
H6	D-5・N	IV層	ウマ	<i>Equus cabalus</i>	哺乳類	上顎	左	臼歯	老齢
H7	D-6・N	IV層	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	貝類		左		小型

〔貝類〕

シジミ類 *Corbicula* sp.

破片となっており、汽水産のヤマトシジミか、淡水産のマシジミかは不明。

ハマグリ *Meretrix lusoria* 左

平均よりも小型である。

5. まとめ

本郷坪遺跡より出土した動物遺存体を検討した結果、タヌキ、ウマ、シジミ類、ハマグリを同定した。

H3から出土した上顎犬歯は、タヌキである。現在でも人間の集落近くに生息し、残飯を漁ることは珍しくない。縄文時代でも一遺跡からの出土量は少ないが、普通に出土する種である。

H4・5・6から出土した上顎臼歯は、ウマである。H5・6の上顎臼歯は、エナメル高、磨耗の進行などから老齢とみられる。

H2から出土したシジミ類は、ヤマトシジミかマシジミかは不明である。

H7から出土したハマグリは、平均より小型である。

H1から出土した四肢骨は、哺乳類のものとみられるが、科・属が不明である。また、骨の大きさなどから小動物と思われるが、現生動物骨角標本と比較して、タヌキ、アナグマ、テン、カワウソ以外のものと思われる。

なお、同定には奈良文化財研究所所蔵の現生動物骨格標本を利用させていただき、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程、丸山真史氏の助言を受けた。

IV. 炭化したおにぎり状の塊の科学分析

1. はじめに

おにぎり状の炭化した米の塊が出土し、放射性炭素年代の結果からおよそ600年前の遺物であったことが判明した。本研究では、この塊を観察し、その一部を用いて、当時水田で栽培していたイネがどのようなものであったか、同地方で出土した炭化米と比較した。また、DNA分析によって遺伝形質の解析を試みた。

2. 分析材料と方法

IV層のCAグリッドより出土した炭化したおにぎり状の塊（78mm×71mm）の一部を用いた。エタノール洗浄後、被熱の可能性の少ない内側部分より採取した。粒は互いに付着していたため、すべて完形で分離することが困難であったが、ほぼ1粒ずつ採取し、14サンプルを用いた。各々のサンプルの表面を実体顕微鏡で観察後、デジタルデータに保存し、写真に示す。

各々のサンプルを超音波洗浄器で洗浄後、以下の方法によって全DNAの抽出を行なった。ここで全DNAとは含まれるDNAを核、葉緑体などと区別せずに抽出したものという。まず、サンプルの表面を70%エタノールで洗浄後、粉碎のためのマルチビーズとともに1つずつチューブに入れ、マルチビーズショッカー（安井器械製）によって粉碎し、SDS法とNaOH法によって予備抽出を行なった。今回のサンプルではSDS法の抽出法でより多くのDNA抽出を確認できたため、SDS法を用いて全DNAを抽出した。なお抽出法の詳細はNakamura (1990)を参照していただきたい。抽出されたDNAは以下の3つの領域について、PCR法によりDNA断片を増幅させた。

1) ランダムプライマーの1つであるCMN-B20、CMN-B22によって増幅される領域。染色体上の位置

は不明ながら、以前よりジャボニカ品種を温帯型と熱帯型に区別するのに用いられてきた。さらに、柴内ら(2005)によって開発された温帯型と熱帯型を判別するプライマー・DJ6を用いてPCR増幅を試みた。

- 2) 葉緑体DNAのPS-ID領域。これはNakamura et al. (1997)によって開発された主に品種あるいは品種群を同定できる葉緑体DNA領域の一部分で、rpl16遺伝子の下流域に存在する塩基配列である。領域1)はPCR法により増幅したバンドの位置により、当該イネ種子が熱帯ジャボニカに属するか温帯ジャボニカに属するかを判定する。プライマーの配列を第7表に示す。

第7表 PCR増幅に使用したプライマー

プライマー名	配列	判定
CMN-B20	GTC GCC TTA CCA	Tm
CMN-B22	TCT GCT GAC CGG	Tr/Tm
PSID-A	AAA GAT CTA GAT TTC GTA AAC AAC ATA GAG GAA GAA	
PSID-A2	AAT ATA CGT ACC CAG ATT TTT CCA CCA CGA CG	
PSID-B	ATC TCG TAC ATT TAA AAG GGT CTG AGG TTG AAT CAT	

Tr: 热帯ジャボニカ

Tm: 温帯ジャボニカ

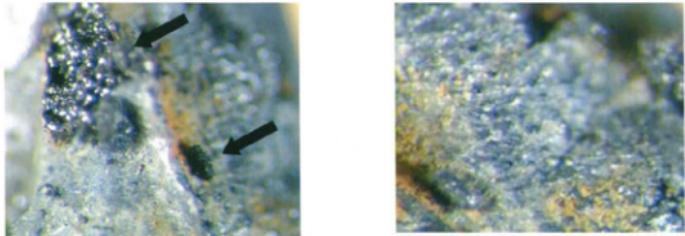
領域2)は品種の同定を行なうもので、2回のPCR増幅後、ダイレクトシーケンス法により当該部分の塩基配列を特定する方法である。2)のプライマーはPSID-AとB、PSID-A2とB、PSID-A4LとBの組み合わせでPCRを行ない、増幅したバンドを確認後、シーケンスによりPS-ID領域の塩基配列を特定する。いずれもPCR法の温度条件、反応液の組成などは定法によった。遺物のDNAは通常のPCR法では増幅されない。そこでここでは、1回目の増幅産物をテンプレートとして2回目のPCRを行なう、いわゆる2段階PCRを行なった。領域2)については1回目のプライマーでPSID-AとBを用い、2回目でPSID-A2とBを用いた。確認のため、2回目のプライマーでPSID-A4LとBの組合せでのPCR増幅を行なった。いずれもPCR反応によって増幅されたDNAは寒天を支持体とする電気泳動を行なってDNAを視覚化させた。

3. 分析結果および考察



付着物の拡大写真

写真のとおりおにぎり状の塊の表面には付着物があり、顕微鏡下の観察から拡大写真のとおり層を成しておらず、樹皮状の薄皮が確認された。また、塊の表面には下の左図の矢印のように穿孔や膨脹痕の認められるものが多く、被熱の可能性が示唆された。このため、表面を除去したところ、内側にまだ茶色を帯びた粒が観察された。今回は粒が互いに付着していたため、長さや幅などのデータは得られなかった。顕微鏡観察の結果、ほとんどは炭化したイネ種子であった。一部をデジタルデータで保存し、遺物の写真を示す。しかし、サンプル12のように特徴が見受けられない種子も混入していた。また、サンプル1とサンプル6のように明確な糊殻を観察できるサンプルもあった。サンプル1の拡大写真を右図に示す。

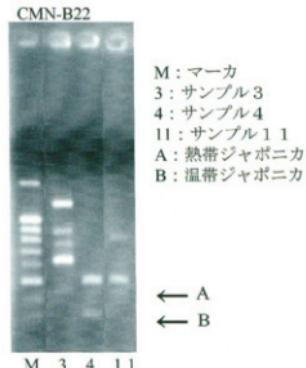


DNAの分析では領域1) のプライマーによるDNA断片を増幅した結果、DNAの断片が増幅された。CMN-B20はサンプル4のみが増幅し、温帶ジャボニカと判定された。CMN-B22には右図のとおり温帶・熱帯を区別可能な2つのバンドがあり、Tmは温帶ジャボニカ、Trは熱帯ジャボニカに固有のバンドを示す。これよりサンプル3および11が熱帯ジャボニカのバンドA、サンプル4が温帶ジャボニカのバンドBの位置に増幅された。

また、プライマーDJ6を用いたPCR増幅の結果は、数回行なったうち1回のみ、サンプル6、8、10の3サンプルが温帶ジャボニカの位置にかすかに増幅された。このプライマーは塩基配列を特定して、作成されたプライマーのため精度が高く、増幅が期待されたが、安定的なバンドが得られなかつたため、3サンプルは雑種と判定した。

領域2) では1回目PCRでプライマーPSID-AとBのセットで増幅後、プライマーPSID-A2とBを用いて増幅を行なった。PSID-A2とBの組合せでバンドが2本増幅されたため、バンドの切り出しを行なったのち、シーケンスした。確認のため、2回目のプライマーでPSID-A4LとBのセットでも増幅を行なったが、いずれも塩基配列の特定にはいたらなかった。

したがって、14サンプル中増幅したものは6サンプル、熱帯ジャボニカが2サンプル、温帶ジャボニカが1サンプル、残り3サンプルが雑種と判定された。各領域で、DNA増幅が悪かったのは被熱によりDNAがすでに断片化されていた可能性が高いと考えられる。

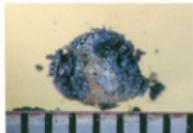


おにぎり状の塊より採取した遺物

サンプル1



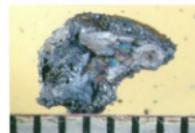
サンプル2



サンプル3



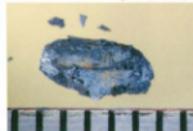
サンプル4



サンプル5



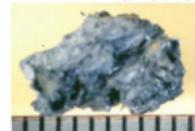
サンプル6



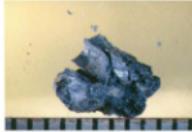
サンプル7



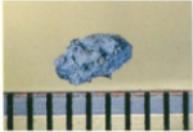
サンプル8



サンプル9



サンプル10



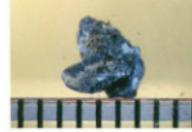
サンプル11



サンプル12



サンプル13



サンプル14



5.まとめ

静岡県内および隣接の神奈川県平塚市の北金目遺跡の弥生時代中期から平安時代初頭の遺跡と比較した結果を第8表に示す。分析サンプルが少ないため、傾向を述べることはできないが、弥生時代より木遺跡が長沼郷と呼ばれはじめた中世まで、静岡県内には温帯ジャボニカと熱帯ジャボニカの混在した稻作が行なわれていたと推定される。今後は静岡県の稻作環境がどのようなものであったかを推定するため、さらなる中世や周辺の遺跡からの炭化米出土と科学分析が望まれるところである。

第8表 局辺の遺跡から出土した炭化米の熱帯 *japonica* - 温帯 *japonica* の判定

2005年9月現在

遺 跡	遺 構	時 代	種 子 数				合計
			熱 帯	構成比%	温 帶	雜種等	
東原田(静岡県小笠町)	溝内	弥生時代中期	2	14.3	3	9	14
北金目(神奈川県平塚市)	住居	弥生時代後期	4	25.0	2	10	16
北金目(神奈川県平塚市)	住居	弥生後期～古墳時代初頭	2	22.2	2	5	9
登呂(静岡県静岡市)	水田面	弥生時代後期	1	20.0	0	4	5
菖蒲ヶ谷(静岡県掛川市)	住居	弥生時代後期	1	25.0	1	2	4
領家(静岡県掛川市)	住居	弥生時代後期	1	10.0	0	9	10
北金目(神奈川県平塚市)	住居覆土	古墳時代中期	1	14.3	1	5	7
箱根田(静岡県三島市)	住居	奈良時代末～平安時代初頭	0	0.0	2	1	3
本郷坪(静岡県静岡市)	水田	中世	2	33.3	1	3	6
合 計			14	19.7	12	45	71

花森(2003、加筆)

総括

本遺跡・遺構は中世のものであり、この時代の静岡平野の環境を知るのに格好のデータを提供している。

本遺構出土の遺物のなかで特記すべきと思われるは多量のモモ核であろう。その大きさや形状はまちまちであるので、おそらく複数の遺伝子型（品種と呼んでよいかもしれない）にまたがる複数の樹に由来するものと思われる。現在の果樹の品種は多くがクローンで、これは挿し木や接木の技術の上になりたつ品種である。この当時はこうした技術はまだなかったはずで、そのことを反映しているのであろうか。

出土した大型種子の中で、オニグルミだけがいわゆる野生植物のものである。他は、モモ、ウメ、ウリ、イネなど栽培植物なので、この時代ここに生きた人の食が栽培植物中心に構成されていたものと推定される。

動物遺体にも特段変わったものはなかったが、人の関与が伺われる動物（人里動物）が多かったのは自然であろう。

おにぎり状の米は、いわゆる握り飯ではあるまい。過去にも幾度か「おにぎり」と目された遺物が出土しているが、それらは穀殻や穂軸が混じった塊であったので、食用のいわゆる「おにぎり」ではなか

ったように思われる。このイネは熱帯ジャボニカを伴うものであった。弥生時代から古代までは、日本列島のイネのなかには相当量の熱帯ジャボニカが含まれていた。熱帯ジャボニカは近世の遺構からも見つかっているので、今回の結果がそれほど奇異なものとは考えられないが、中世の静岡平野にそれがあつたことを示したのは今回の事例がはじめてであろう。

参考文献

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説、養賢堂、494p.
- 笠原安夫 (1988) 作物および山畠雜草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣 出版、p131-139.
- 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種、月刊考古学ジャーナルNo409、ニューサイエンス社、p15-19.
- 南木睦彦 (1991) 栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通 I、雄山閣出版株式会社、p165-174.
- 南木睦彦 (1992) 低湿地遺跡の種実、月刊考古学ジャーナルNo355、ニューサイエンス社、p18-22.
- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p276-283.
- 吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出、月刊考古学ジャーナルNo355、ニューサイエンス社、p2-14.
- 渡辺誠 (1975) 縄文時代の植物食、雄山閣、187p.
- 佐藤洋一郎 (2002) DNA考古学のすすめ 丸善ライブラー pp164
- 佐藤洋一郎 (2000) 縄文農耕の世界 PHP新書 pp218
- 佐藤洋一郎 (1999) DNA考古学 東洋書店 pp201
- 佐藤洋一郎 (1998) DNA考古学事始 DNA多型 6 : 1-4
- 佐藤洋一郎 (1998) DNAから栽培と農耕の歴史を探る 遺伝52 (6) : p29-33
- 佐藤敏也、粉川昭平 (1987) 弥生のイネ 食用植物 p97-111
- 柴内佐知子 (2005) 福岡市雀居遺跡から出土したイネ遺存体の年代測定およびFDNA分析 日本文化財学会 : p116-117
- 中村郁郎 (1995) DNAフィンガープリント法 「植物遺伝育種学実験法」 朝倉書店 : p113-117
- 花森功仁子 (2003) 都市の遺跡群から出土したイネ種子の遺伝形質の時期的変遷 日本文化財科学会 : p212-213
- Nakamura, I. (1990) New DNA Fingerprinting Procedure. Amplified Fragment Length Polymorphism of Hazy Association (ALPHA). Annu. Rep. Natl. Inst. Genet. 41:105-106
- Nakamura, I. and Y.I.Sato (1991) Amplification of DNA fragments Isolated from a Single Seed of Ancient Rice (AD800) by Polymerase Chain Reaction. Chinese J.Rice Sci.5:175-179
- Nakamura, I., N.kameya, Y.Kato, S.Yamanaka, H.Jomori and Y.I.Sato (1997) A proposal for identifying the short ID sequence which addresses the plastid subtype of higher plants. Breed.Sci.47: 385-388

第2表 出土器類表

番号	年代	出土地	器種	目	諸説	正方寸	口幅	身幅	厚さ	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	年
1	15-1	D-AN	V型	直底鉢	好	口縁鋸	1/10	8.7	10.1	1.4	圓柱ナゲ		新白						深灰色	
2	B-1	D-AS	V型	直底鉢	序	口縁鋸 口縁鋸	1/9	8.0	9.0		圓柱ナゲ		灰						深灰色	
3	A-35	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				1.3	圓柱ナゲ		灰白							
4	A-2N	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				1.2	圓柱ナゲ		灰白							
5	A-2N	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				1.2	圓柱ナゲ		灰白						深灰色	
6	B-6S	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸	1/10	10.3	1.3	圓柱ナゲ ヘラ刷毛		灰								
7	D-3	A-7S	トレンシ内	直底鉢	序	口縁鋸	1/12	16.6		1.5	圓柱ナゲ		灰白						深灰色	
8	B-4S	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸	1/4	18.0	1.7	圓柱ナゲ 頭部へラ刷毛		灰 灰白								
9	C-3S	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸	1/8	10.1	1.2	圓柱ナゲ 頭部ナゲ 頭部へラ刷毛		灰白 灰 灰								
10	B-6H	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸	1/6	7.4	1.0	圓柱ナゲ		灰								
11	E-1N	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				1.3	圓柱ナゲ		灰						深灰色	
12	D-1	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸	1/8	10.0	0.9	圓柱ナゲ 頭部へラ刷毛		灰白								
13	A-3N	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				1.2	圓柱ナゲ 頭部へラ刷毛		灰							
14	D-1	—	トレンシ内	直底鉢	序	口縁鋸 頭部へラ刷毛	1/8	5.8	2.4	圓柱ナゲ 頭部へラ刷毛		灰白								
15	D-1	—	トレンシ内	直底鉢	序	口縁鋸 頭部へラ刷毛	1/6	6.2	3.0	圓柱ナゲ		灰白								
16	D-4N	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸 頭部へラ刷毛	1/2	6.0	1.8	圓柱ナゲ 頭部へラ刷毛		灰白		自然釉					深灰色	
17	D-9S	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸	1/3	11.7	1.7	圓柱ナゲ		灰白								
18	D-2N	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸	1/5	12.2	1.8	圓柱ナゲ		灰白								
19	A-5S	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸	1/5	8.6	7.1	1.4	圓柱ナゲ		灰							
20	C-6S	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸	1/6	15.1		2.6	圓柱ナゲ		灰							
21	D-5N	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸 口縁鋸	1/2	12.6		1.7	圓柱ナゲ		灰						深灰色	
22	C-4S	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				2.1	圓柱ナゲ		灰白 灰							
23	C-5N	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				1.9	圓柱ナゲ		灰							
24	A-3N	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				1.9	圓柱ナゲ		灰						深灰色	
25	D-3	C-2T	—	直底鉢	序	口縁鋸	3/2	16.6	1.2	圓柱ナゲ		灰白								
26	C-4H	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸 頭部へラ刷毛	1/12	12.0	2.4	圓柱ナゲ 頭部へラ刷毛		灰白								
27	D-3	C-4N	D-AN	直底鉢	序	口縁鋸		3.4	0.6	1.7	圓柱ナゲ		灰白							
28	D-6S	D-AN	直底鉢	序	口縁鋸	1/5	9.3	5.3	1.8	圓柱ナゲ		灰白								
29	D-4S	D-AN	直底鉢	序	口縁鋸	1/6	6.5	0.8	圓柱ナゲ 頭部へラ刷毛		自然釉									
30	D-5N	D-AN	直底鉢	序	口縁鋸	1/2			2.2	0.9	圓柱ナゲ		灰							
31	D-2	C-5H	—	直底鉢	序	口縁鋸	1/5			2.3	2.5	圓柱ナゲ		灰						
32	E-4S	D-AN	直底鉢	序	口縁鋸	1/4	13.3		2.3	圓柱ナゲ		灰白								
33	A-1H	D-AN	直底鉢	序	口縁鋸 頭部へラ刷毛	1/3			3.4	1.7	圓柱ナゲ		灰白							
34	B-6S	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				2.9	圓柱ナゲ		灰							
35	C-4S	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				1.1	圓柱ナゲ		灰							
36	A-3S	D-AN	トレンシ内	直底鉢	序	口縁鋸				3.0	ナゲ クリクル		新白						深灰色	
37	C-5S	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸					ヘラヘラナゲ クリクル		灰							
38	D-3	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				2.2	クリクル		自然釉							
39	C-6C	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸				4.6	クリクル		灰白						深灰色	
40	A-3R	D-AN	V型	直底鉢	序	口縁鋸	1/16	8.2	0.9	4.6	クリクル		灰白							
41	A-4H	D-AN	V型	直底鉢	区段	口縁鋸				1.8	内丸削り切ナゲ 頭部へラ刷毛		灰 灰白						深灰色	

番号	出土年月日	出土場所	出土位置	種類	性別	鉢形	口径(㎝)	底径(㎝)	高さ(㎝)	内径(㎝)	外径(㎝)	厚さ(㎝)	内側色	外側色	内側表面	外側表面	備考
103	4-2	20-2M	苔原	吉澤川	鹿歩小瓶	直筒	37.0		4.0	1.7	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地	
106	4-2	10-40	丘原	吉澤川	直筒	直筒	4.8	4.0	1.2	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地		
119	4-3	9-35	か～V層	吉澤川	天井袋	口吹き	1.9	11.2		4.2	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地	
121	4-2	D-2N	苔原	吉澤川	天井袋	直筒	2.1	8.6	1.6	2.6	ヘタナラ、内板ナラ 内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地	
122	D-2N	か～V層	吉澤川	天井袋	口吹き	直筒			3.1	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地		
125	4-3	10-35	か～V層	吉澤川	天井袋	口吹き	1.9	12.8		2.9	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地	
126	5-2	10-2T	V層	吉澤川	天井袋	口吹き	1.9		6.9	2.0	内板ナラ ヘタナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地	
128	4-2	9-45	V層	吉澤川	酒呑	口吹き	11.1	25.7		3.7	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地	
135	4-3	A-2N A-2M	河岸帯 草木山	吉澤川	直筒	直筒	1.0	11.3	4.6	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地		
177	4-5	B-4	II層	吉澤川	天井袋	直筒	直筒	4.3	4.2	1.1	内板ナラ ヘタナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地	
178	B-4	II層	吉澤川	天井袋	直筒	直筒下平	11.1	16.5	3.1	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地		
179	4-5	B-15	吉澤川	天井袋	直筒	直筒下平				内板ナラ 内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地		
180	4-5	B-15	吉澤川	天井袋	直筒	直筒			1.6	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地		
181	4-5	B-15	吉澤川	天井袋	直筒	直筒下平	1/4	11.0	5.7	2.1	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地	
182	4-3	D-3N	II層	吉澤川	直筒	直筒	11.6	25.5		3.5	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地	
183	4-3	A-3	II層	吉澤川	直筒	直筒	1.0	11.9	3.5	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地		
184	4-5	D-3N	II層	吉澤川	直筒	直筒	11.1	26.6	3.9	内板ナラ、すり目青白	灰白	灰白	無地	無地	無地		
185	4-5	D-15	II層	吉澤川	直筒	直筒	1.0	16.2	1.5	内板ナラ	灰白	灰白	内板ナラ 内板ナラ	内板ナラ 内板ナラ	内板ナラ		
186	4-6	C-6N	II層	吉澤川	直筒	直筒下平	1.5		3.6	内板ナラ	灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ		
187	4-7	C-4N	V層	吉澤川	丸筒	口吹き	新筒	1.0	5.9	10.4	6.0	2.4	内板ナラ ヘタナラ	灰白	オーブン 灰白	内板ナラ	
188	B-3N	C-3 C-3M	吉澤川	吉澤川	小筒	直筒	1.8	16.5	8.0	1.2	内板ナラ 内板ナラ	灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ	
189	4-9	A-3S	トレンシ	吉澤川	丸筒	口吹き	直筒		2.9	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地		
190	4-9	C-5Z	II層	吉澤川	丸筒	直筒				内板ナラ	灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ		
191	4-9	A-4M A-4S	II層	吉澤川	直筒	直筒上平	1.9	17.5	4.5	内板ナラ	灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ		
192	4-5	B-13	V層	吉澤川	丸筒	口吹き～直筒	1.4	20.0	3.8	2.1	内板ナラ	灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ	
193	A-3S	II層	吉澤川	丸筒	直筒	直筒	5.0		1.2	内板ナラ ヘタナラ	灰白	灰白	内板ナラ 内板ナラ	内板ナラ 内板ナラ	内板ナラ		
194	4-6	C-15	V層	吉澤川	丸筒	口吹き	加丸		1.5	内板ナラ	灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ		
195	4-9	—	吉澤川	丸筒	直筒	直筒下平	直筒	5.4	4.3	内板ナラ	灰白	灰白	無地	無地	無地		
196	4-8	C-5H	吉澤川	吉澤川	直筒	直筒	1/15	20.5	4.6	内板ナラ 内板ナラ、ナラ	灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ		
197	3-2	D-2S	吉澤川	吉澤川	直筒	直筒	直筒		3.8	内板ナラ 内板ナラ	灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ		
198	3-2	D-5N	V層	吉澤川	直筒	直筒	直筒	1/5	11.6	2.7	片側縫合式	暗褐色	オーブン	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ	
199	3-4	D-2S	V層	吉澤川	直筒	直筒	直筒		1.7			灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ	
200	5-5	B-4S	か～V層	吉澤川	直筒	直筒	直筒	0.6	5.9	1.1		灰白	オーブン	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ	
201	2-4	B-2S	II層	吉澤川	直筒	直筒	直筒		1.6			灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ	
202	3-2	B-15	IV層	吉澤川	直筒	直筒	直筒	1/1	13.1	12.0	2.7	古文	灰白	オーブン	内板ナラ	内板ナラ	
203	2-4	D-4S	II層	吉澤川	直筒	直筒	直筒	1/2	8.2	8.6	1.6		灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	
204	3-4	C-5N	V層	吉澤川	直筒	直筒	直筒		1.4			灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	内板ナラ	
205	3-4	C-5S	II層	吉澤川	直筒	直筒	直筒	1/6	2.0	2.2	1.9		灰白	灰白	内板ナラ	内板ナラ	
206	3-3	D-3U	II層	吉澤川	直筒	直筒	直筒	直筒下平	1/2	6.5	1.5	2.9	内板ナラ ヘタナラ	灰白	吉澤川 内板ナラ	吉澤川 内板ナラ	吉澤川 内板ナラ
207	5-3	C-6U	吉澤川	丸筒	直筒	直筒	直筒	1/7	11.4	7.6	2.2	内板ナラ 内板ナラ	灰白	吉澤川 内板ナラ	吉澤川 内板ナラ	吉澤川 内板ナラ	
208	9-3	A-5S	吉澤川	丸筒	直筒	直筒	直筒		2.1	内板ナラ	灰白	灰白	吉澤川 内板ナラ	吉澤川 内板ナラ	吉澤川 内板ナラ	吉澤川 内板ナラ	
209	8-54 C-45	吉澤川	吉澤川	丸筒	直筒	直筒	直筒	直筒下平	26.0		2.5	内板ナラ	灰白	吉澤川 内板ナラ	吉澤川 内板ナラ	吉澤川 内板ナラ	

番号	機種名	機種コード	供給元	備考	供給部位	設置年	1156 (mm)	充電 (cm)	送り (cm)	幅 (mm)	高 (mm)	厚 (mm)	支 持 部 位	支 持 部 位	支 持 部 位	支 持 部 位	
210	10-3	C-30	日産	九州	表面	1/4		3.2	1.3	内側ナード 外側ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
211	14-3	D-05	日産	九州	表面	1/4		6.7	1.1	内側ナード 外側ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
212	14-5*	W-15	日産	九州	表面	1/5		7.6	5.2	0.7	ナード	裏面		裏面	裏面	裏面	
213	A-45*	5-65	日産	九州	表面	鋼片			1.8	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
214	14-3	A-2N	日産	九州	表面	1/10	6.7	4.7	1.2	内側ナード 外側ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
215	14-5	A-85	日産	九州	表面	1/12	13.0		1.2	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
216	14-3	B-95	日産	九州	表面	1/7		7.5	1.3	内側ナード 外側ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
217	14-3	B-04	日産	九州	表面	1/4		7.2	4.6	1.5	内側ナード ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	
218	14-3	A-95	日産	九州	表面	1/15	13.3		1.1	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
219	5-6	A-07	日産	九州	表面	1/8	73.9	6.9	内側ナード 外側ヘラ張り			裏面	裏面	裏面	裏面	裏面	
220	5-4	A-35	日産	九州	表面	鋼片			1.2	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
221	5-4	B-104	日産	九州	表面	1/8			2.7	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
222	A-4	日産	日産自動車	標準	表面	1/11	18.2	2.8		内側ナード ヘラ張り			裏面	少し取付難 裏面	裏面	裏面	
223	5-5	A-5N	日産	日産自動車	九州	表面	4.4	1.5		ナード ナード	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
224	5-4	A-3S	日産	日産自動車	九州	表面	鋼片		3.1	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
225	A-3	日産	日産自動車	九州	表面	1/6		3.5	1.2	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
226	—	日産	日産自動車	九州	表面			4.9	1.1	内側ナード ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
227	C-01	E-7	日産	日産自動車	九州	表面	1/3	6.3		内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
228	5-6	C-8N	日産	日産自動車	九州	表面	2/4		2.8	0.8	内側ナード ヘラ張り			裏面	裏面	裏面	裏面
229	D-45	日産	日産自動車	九州	表面	鋼片			2.1	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
230	5-1	C-0Y	日産	日産自動車	九州	表面	1/4		4.4	1.7	内側ナード ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面
231	C-01	日産	日産自動車	九州	表面	1/6	9.8		1.7	内側ナード ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
232	5-6	A-2N	日産	日産自動車	九州	表面	1/10	12.6	7.2	3.1	内側ナード ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面
233	5-4	B-5	日産	日産自動車	九州	表面	鋼片		2.3	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
234	B-5G	日産	日産自動車	九州	表面	鋼片			1.5	内側ナード	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
235	A-5N	C-0Y	日産	日産自動車	九州	表面	鋼片		1.4	内側ナード	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
236	C-4U	日産	日産自動車	九州	表面	1/6		7.0	1.1	内側ナード ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
237	5-6	C-5C	日産	日産自動車	九州	表面	1/5	12.3	9.1	2.1	内側ナード ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面
238	5-5	B-55	日産	日産自動車	福	表面	1/8		7.6	1.2	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面
239	5-6	D-3N	日産	日産自動車	福	表面	1/4	4.2	6.5	4.0	2.0	内側ナード ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面
240	5-4	B-5H	日産	日産自動車	福	表面	鋼片		2.8	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
241	5-4	B-2N	日産	日産自動車	福	表面	鋼片		2.9	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	
242	5-5	B-5	日産	日産自動車	福	表面	钢片		1.7	内側ナード	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
243	B-5	B-5	日産	日産自動車	福	表面	钢片		1.5	内側ナード	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
244	5-4	B-1	日産	日産自動車	小笠原諸島	表面	鋼片	20.2	2.8	内側ナード	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	
245	B-5	B-5	日産	日産自動車	九州	表面	鋼片- 標準下小	1/5	4.0	1.3	内側ナード ヘラ張り			裏面	裏面	裏面	裏面
246	5-6	D-15	日産	日産自動車	東北	表面	1/4		7.6	1.2	内側ナード	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面
247	5-6	D-3	日産	日産自動車	東北	表面	鋼片- 標準下小	1/5	2.8	1.6	ナード ナード	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面
248	5-6	B-05	日産	日産自動車	東北	表面	鋼片	1/6	4.7	1.1	内側ナード ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面
249	5-4	B-5	日産	日産自動車	宮城	表面	鋼片		1.7	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	裏面
250	5-4	D-3	日産	日産自動車	宮城	表面	鋼片		2.7	内側ナード			裏面	裏面	裏面	裏面	裏面
251	5-4	E-07	日産	日産自動車	福島	表面	鋼片- 標準下小	1/5	3.8	内側ナード ヘラ張り	裏面		裏面	裏面	裏面	裏面	裏面

登録 番号	出土地 名	出土年 代	出土場所	種 類	材 質	備 考	直 径 (cm)	高 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (mm)	形 状	特 徴	文 字	記 号	備 考	
326	A-N	昭和	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				1.4	圓板ナメ	比較的 薄				
327	14-9	丁-04	昭-1798	堅硬陶器	白陶器	圓片				2.5	圓板ナメナザ	厚				
328	A-2H	三-27期	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				1.9	圓板ナメ	比較的 薄				
329	A-2H	27期	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/10	19.6	12.0	2.3	圓板ナメ	厚				
330	14-9	A-2N	堅硬陶器 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/2	2.5	6.2	1.1	堅硬のため半固	比較的 厚				
341	A-N	27期	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				1.4	堅硬のため半固	比較的 厚				
342	14-9	B-25	堅硬陶器 瓦器	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/8	9.2	4.5	1.8	堅硬のため半固	比較的 厚				
343	14-9	B-25	堅硬陶器 瓦器	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/4	6.4	8.9		ナメ	ナメナメ	比較的 厚			
344	14-9	C-55	瓦器	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/4	6.3	3.3		ナメナメ	比較的 厚				
345	14-9	C-55	瓦器	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/3	9.2	6.4	2.4	堅硬な	比較的 厚				
346	B-45	瓦器	堅硬陶器	白陶器	圓片		6.8	1.1			堅硬のため半固	厚				
347	C-3N	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				2.5	ナメ	厚				
348	A-35	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/5	2.6	2.1	1.1	堅硬のため半固	比較的 厚				
349	D-25	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/7	6.1	5.3	0.9	ナメ ナメナメ	比較的 厚				
350	15-1	A-3H	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片					堅硬のため半固	比較的 厚			
351	E-6	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片					ナメ	比較的 厚				
352	15-1	D-04	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器					ナメ	比較的 厚				
353	C-2N	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片					ナメ	比較的 厚				
354	15-1	E-04	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片					ナメ	比較的 厚			
355	15-1	D-04	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片					ナメ	比較的 厚			
356	D-25	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片					ナメ	比較的 厚				
357	15-1	—	B-7	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				2.5	コヨナメ?	比較的 厚	王都に轟		
358	15-3	B-4	1号	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				0.7	ナメナメ	比較 厚			
359	15-3	B-25	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				0.9	ナメ	比較的 厚			
360	15-5	A-45	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				0.5	ナメナメ	比較 厚			
361	15-3	A-4H	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/10	12.0		2.6	圓板ナメ	比較的 厚			
362	15-2	A-3N	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				1.4	圓板ナメ	比較的 厚			
363	15-2	B-5	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				2.2	圓板のため半固	比較的 厚			
364	15-2	B-5	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				1.7	圓板のため半固	比較的 厚			
365	15-2	c-07	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				2.6	1.2	ナメ	比較的 厚		
366	15-2	B-02	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/11	16.0		1.0	圓板ナメ	厚			
367	15-2	A-4N	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/7	9.3		1.9	圓板ナメ	比較的 厚		二次燒成	
368	15-7	A-51	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/7	13.3	7.5	1.6	圓板ナメ	比較的 厚		二次燒成?	
369	15-2	C-3N	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片	1/4	8.6	5.5	1.4	圓板のため半固	比較的 厚			
370	15-2	A-4H	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				0.7	ナメナメ	比較的 厚			
371	B-4N	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				2.9	1.1	圓板ナメ	比較的 厚	一次燒成		
372	15-2	D-3N	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				5.6	3.3	圓板のため半固	厚		
373	D-3N	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				9.4	4.5	1.6	圓板ナメ	比較的 厚		
374	C-4N	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				4.5	0.9	ナメナメ?	比較 厚			
375	B-35	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				5.2	1.0	ナメナメ?	比較的 厚		二次燒成	
376	B-5	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				5.5	1.5	—	—			
377	15-2	B-02	瓦器	土塁跡 (城内)	堅硬陶器	白陶器	圓片				10.1	9.1	2.1	堅硬ナメ	比較的 厚	

器物名	器物形 状及 编号	出土层 次及地 点	质 地	颜 色	纹 样	制作痕迹	胎厚 mm	口径 mm	外径 mm	高 度 mm	口部 厚度 mm	底 部 厚度 mm	腹 部 厚度 mm	器 形
3-4-t	A-3N E~F层	陶质 夹砂红陶 F	陶质 夹砂	深红 色	素面									同上
3-4-t	C-3S E~F层	陶质 夹砂灰陶 F	陶质 夹砂	深红 色	素面									
3-4-m	D-3N M层	陶质 夹砂灰陶	陶质 夹砂	深红 色	素面									同上
3-4-n	C-3S V层	陶质 夹砂	陶质 夹砂	深红 色	素面									
3-4-u	A-3N G-3S E~F层	陶质 夹砂灰陶 G	陶质 夹砂	深红 色	素面									同上
3-4-p	B-4 B层	陶质 夹砂灰陶	陶质 夹砂	深红 色	素面									同上
3-4-q	—— B层	陶质 夹砂灰陶	陶质 夹砂	深红 色	素面									同上
3-4-r	H-6 H层	陶质 夹砂灰陶	陶质 夹砂	深红 色	素面									同上
4-1-a	E-5 E层	陶质 夹砂灰陶	陶质 夹砂	深红 色	素面									同上
4-1-i	A-3N C层	陶质 夹砂灰陶	陶质 夹砂	深红 色	素面									同上
4-1-u	C-3T E层	陶质 夹砂灰陶	陶质 夹砂	深红 色	素面									同上
4-1-r	A-5T E层	陶质 夹砂灰陶	陶质 夹砂	深红 色	素面									同上
4-2-w	A-3N E~F层	陶质 夹砂	陶质 夹砂	深红 色	素面									火变分

第3表 出土金属製品類別表

標印番号	牙高圓版 番号	出土 グリッド	出土層位 遺構	材質	器種	名 称	長さ (cm)	幅・径 (cm)	備 考
410	16-7		II層	真鍮	環管		12.5	外 1.7 内 0.45~0.6	
411	16-7	D-6S	IV層	真鍮	環管		2.2	外 1.5 内 0.6	
412	16-7	B-5S	四神 トレンチ内	真鍮	環管		8.8	外 1.5 内 0.55~1.1	
413	16-7	C-6S	Ⅲ層	真鍮	花形火薙 環管		6.7	外 1.6 内 0.4~0.5	
414	16-7	D-5N	IV層 西北點時計上	真鍮	吸口		6.5	0.9	
415	16-7	C-3N	Ⅲ層	真鍮	吸口		6.5	1.0	
416	16-7	D-5S	Ⅲ層	真鍮	吸口		5.2	0.9	
417	16-7	B-5S	Ⅲ層	真鍮	吸口		4.6	0.9	
418	16-7	D-4S	Ⅲ層	真鍮	吸口		4.8	1.0	
419	16-7	A-5N	Ⅲ層	真鍮	吸口		6.6	1.5	
420	16-7	C-4S	Ⅲ層	真鍮	吸口		5.3	1.25	
421	16-7	C-4N	Ⅲ層	銅	吸口		5.0	0.9	
422	16-7	A-5S	Ⅲ層	銅	吸口		3.7	0.9	
423	16-7	D-6N	Ⅲ層	銅	吸口		2.8	1.4	
424	16-7			銅	吸口？		5.7	1.0	
425	16-8	B-4N	Ⅲ~V層	銅	黃金		3.5	0.8	
426	16-8			銅	黃金		3.8	0.5	
427	16-8	C-4S	Ⅲ層	銅	黃金		3.6	1.0	
428	16-8	1区	Ⅲ層	銅	錫軟銅製品		4.3	2.5	
429	16-8		Ⅲ層	銅	口金		3.0	0.55	
430	16-8	A-5N	IV層	銅	蝶状銅製品		2.7	2.2	
431	16-8	D-4S	Ⅲ層	銅	銅鏡		2.1	0.1	
432	16-5	A-5S	IV層	鉄	刀子		19.75	0.98	
433	16-5	B-4N	IV層	鉄	刀子		10.25	1.15	
434	16-5	B-5	Ⅲ層	鉄	鎧		8.65	2.0	
435	16-6	C-6N	IV層	鉄	環形鐵狀 金製品		6.05	0.8	
436	16-5	C-2N	IV層	鉄	鐵錠？		3.6	1.15	
437	16-6	D-6N	Ⅲ層	鉄	釘		7.4	0.35~1.05	

擇因 参考 番号	零真回版 各号	出土 グリッド	出土層位 及標	材質	器種	名稱	長さ (cm)	幅・径 (cm)	備 考
438	16-6	C-5	II層	鐵	釘		9.0	0.3~0.55	
439	16-6	B-6S	III層	鐵	釘?		5.6	0.3	
440	16-6	A-4N	Ⅳ層	鐵	釘?		3.6	0.25	
441	16-6	A-2N	IV層	鐵	釘?蓋?		5.1	0.2~0.5	
442	16-6	D-6	Ⅳ層	鐵	釘?		2.7	0.1~0.25	
443	16-6	D-5S	Ⅳ層	鐵	釘?		2.25	0.25~0.3	
444	16-6	D-4S	Ⅳ層	鐵	釘針?		2.4	0.15~0.25	
445	16-6	A-4N		鐵	鐵板片		6.7	3.5	
446	16-30	A-3S	Ⅱ層 瀬岸瓦付水路	鐵	扁平 等級錢幣品		26	2.1~2.3	
447	17-1	D-5N	V層	銅	錢貨	開元通寶	2.4	孔徑0.75	
448	17-1	D-6S	IV層 南北壁面直上	銅	錢貨	無寧元寶	2.4	孔徑0.75	
449	17-1	B-6S	IV層	銅	錢貨	臺灣元寶	2.45	孔徑0.7	
450	17-1	B-5N	IV層 南北壁面直上	銅	錢貨	元祐通寶	2.3	孔徑0.75	
451	17-1	C-3S	Ⅲ層	銅	錢貨	元祐通寶	2.3	孔徑0.7	
452	17-1	B-4S	Ⅲ層 水路	銅	錢貨	寃永通寶	2.2	孔徑0.7	
453	17-1	A-5S	Ⅲ層	銅	錢貨	寃永通寶	2.0	孔徑0.75	
454	17-1	D-3S	Ⅲ層	銅	錢貨	銅錢	2.2	孔徑0.8	銅文序號
455	17-1	B-6S	Ⅲ層	銅	錢貨	銅錢	2.1	孔徑0.75	劣化徵兆
456	17-1	A-3	Ⅱ層 瀬岸瓦付水路	銅	錢貨	五銖錢 大中十二年	1.85	孔徑0.4	

第4表 出土石製品觀察表

測量番号	穿孔図版番号	出土グリッド	出土層位 遺構	材質	器種	長さ (cm)	幅・径 (cm)	厚さ (cm)	備考
457	15-8	D-6N	Ⅱ層	砂岩	砥石	12.0	2.5	3.3	4面使用

第5表 出土木製品觀察表

測量番号	穿孔図版番号	出土グリッド	出土層位 遺構	樹種	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
458	16-3	D-4S	Ⅳ層 壁脚直下	ヒノキ斜	横柾	41.2	5.4	4.3	剥落激甚
459	16-2	B-5N	Ⅳ層 トレンチ内	アカマツ	自在鉤	14.0	3.8	2.1	
460	15-9	B-5	Ⅱ層	カバノキ直	挽物	11.2	4.6	1.3	
461	16-1	B-4N	Ⅲ層 鹿岸列石付 壁脚上	カエデ属	痕跡	8.4	3.9	1.0	
462	16-2	C-5S	V層	スギ	管状木製品	7.2	0.7	0.6	
463	16-2	A-4		スギ	杭先端	10.4	2.0	1.6	

第5章 遺跡の評価

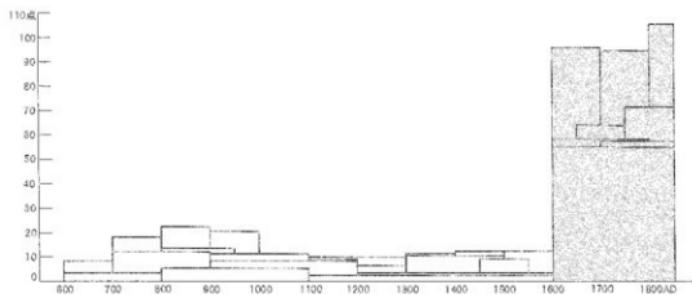
第1節 遺物の分布と各畦畔の施設時期

本郷坪遺跡は外見上1遺納面の遺跡として調査を実施し、IV層土で構成される畦畔を追跡しつつV層上面の水田跡を検出した。しかしながら、第3章で見たように隣り合う畦畔でさえ東西または南北軸の方位を異にする場合があり、さらに第4章で示したように、同じIV層より7世紀から19世紀までの間に1,200年以上にわたる時期の遺物が出土しているという状況から類推して、見かけは單一面に見える水田跡、特に畦畔の施設時期が1～2世紀を単位とする広義の同時期に全て収まるとは到底考えられない。そこで本節ではまず各包含層の堆積・利用時期を明らかにし、統いて主に遺物の分布から各畦畔の施設時期を推定したい。

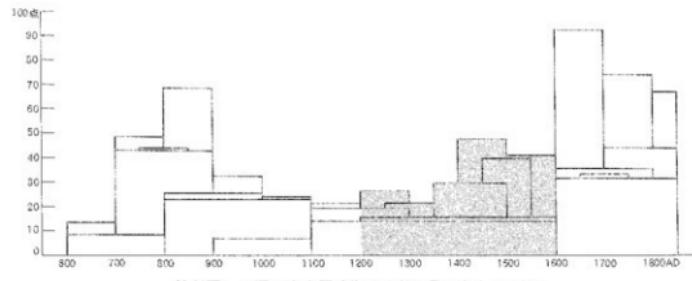
第41～44図はII～V層の各層で出土した土器（瓦を含む）の点数を時期別に示した棒グラフである。7世紀から19世紀までを1世紀ごとに区切り、各世紀に帰属する土器の点数を計上して棒グラフの高さに書き換えている。つまり、例えば15世紀初頭に比定される土器も15世紀後葉に比定される土器も同じ15世紀の所産として数えられる。17世紀末～18世紀前半に比定される土器の点数は西暦1700年の目盛を跨いだ1世紀分の幅の棒グラフで表される。また、土器によっては厳密な所属時期の特定が難しく、数世紀にわたる時期幅で捉えざるを得ないものもある。この場合、例えば或る層に9世紀から11世紀までの3世紀間の範囲に収められる土器が30点存在するとして、9・10・11の各世紀に10点ずつ均等に割り振り、3世紀分の幅を有する棒グラフとなる。第3章第1節で述べたように各包含層の堆積は薄く、人為が加えられれば遺物は容易に上下の層位へ混入する。それでも、各層が堆積した時期を、中心的に包含される一群によって決定することは可能と考えられる。II層（第41図）では17～19世紀の点数が突出しており、その堆積年代は概ね江戸時代と知ることができる。IV層（第43図）では7～12世紀にグラフの山があり、およそ600年間耕作土として利用されたと考えられる。就中、8～9世紀の点数が群を抜いており、この時期の人為が最も活発であったと推測される。第3章第1節では長沼遺跡の5層に土壤としての共通性が認められたが、堆積・利用時期もほぼ重複すると見えよう。V層は層位の成り立ちとしては自然堆積層であるため、土器の出土量は僅かであるが、棒グラフはIV層に類似する傾向を示す（第44図）。7世紀代に堆積し、9世紀までIV層耕作に伴う人為が耕作土の直下層として直接及んだと推定される。III層は上下のII・IV層から遺物が盛んに混入し、グラフの山は8～9世紀および17～19世紀にあるが、13～16世紀の出土量は上下2層と較べて卓然している（第42図）。よって、III層が地植し利用された年代は広く中世と捉えることができる。

以上より、第3章第3節ではIV層から成る畦畔を律令策～中世の条里畦畔と仮定したが、推定されるIV層の堆積・利用時期から上限は7世紀（古墳時代後期）、同下限は12世紀（平安時代後期～古代末期または中世初期）に比定することができる。第4章第4節において炭化物資料3点の14C年代測定および層年代校正を実施した結果、II層出土の試料2については1420～1530ADまたは1560～1630ADの年代値が得られ、遺物の時期的分布から析出されたII層の堆積・利用年代にほぼ合致する。ところが、IV層出土の試料1および試料3（炭化米塊）については1290～1430ADの年代値が得られ、むしろII層の年代幅に収まってしまう。これは、第3章第1節で少し触れたように、炭化物の包含はIV層よりもII層に特徴的に見られ、試料1・3もII層から混入したことが原因かと考えられる。

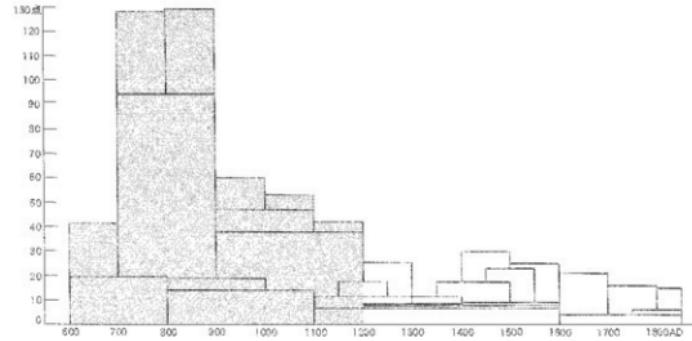
次に、IV層より出土した遺物の平面的分布を見ることにしたい。第45～48図は各区のIV層出土遺物の分布を時期別に示したものであり、ドットの凡例は次のようになる。



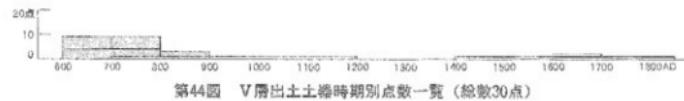
第41図 II層出土土器時期別点数一覧 (総数427点)



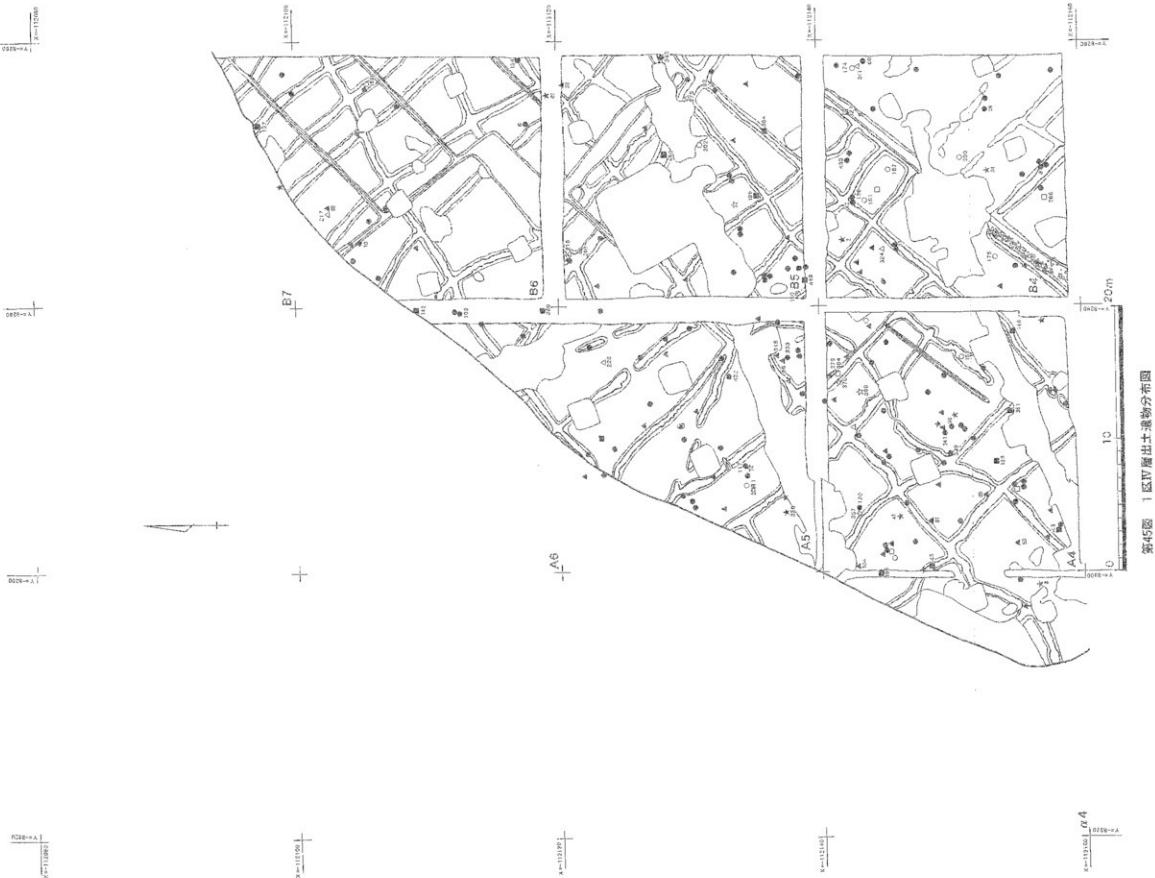
第42図 III層出土土器時期別点数一覧 (総数577点)



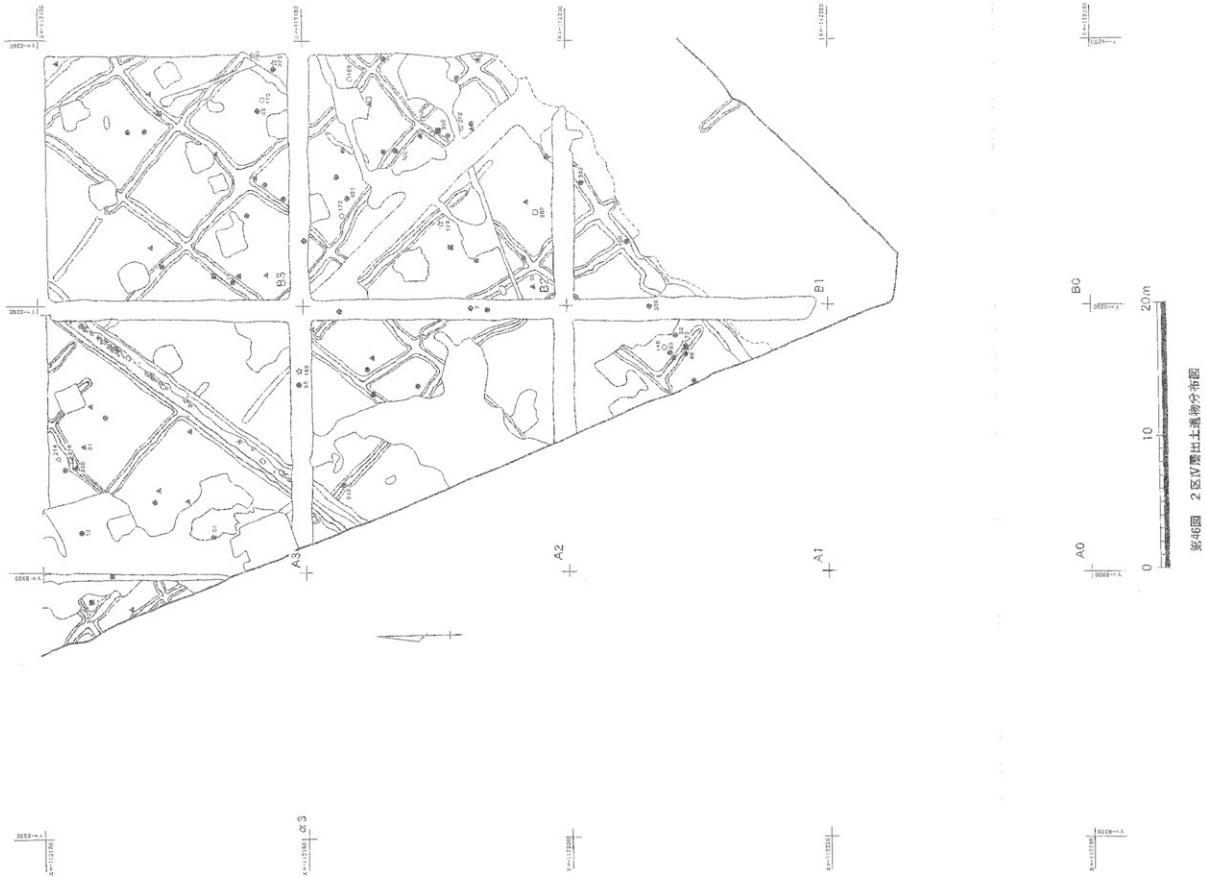
第43図 IV層出土土器時期別点数一覧 (総数601点)



第44図 V層出土土器時期別点数一覧 (総数30点)



- 77 -



第46図 2区IV層出土遺物分布図

图47 3区IV层出土遗物分布图

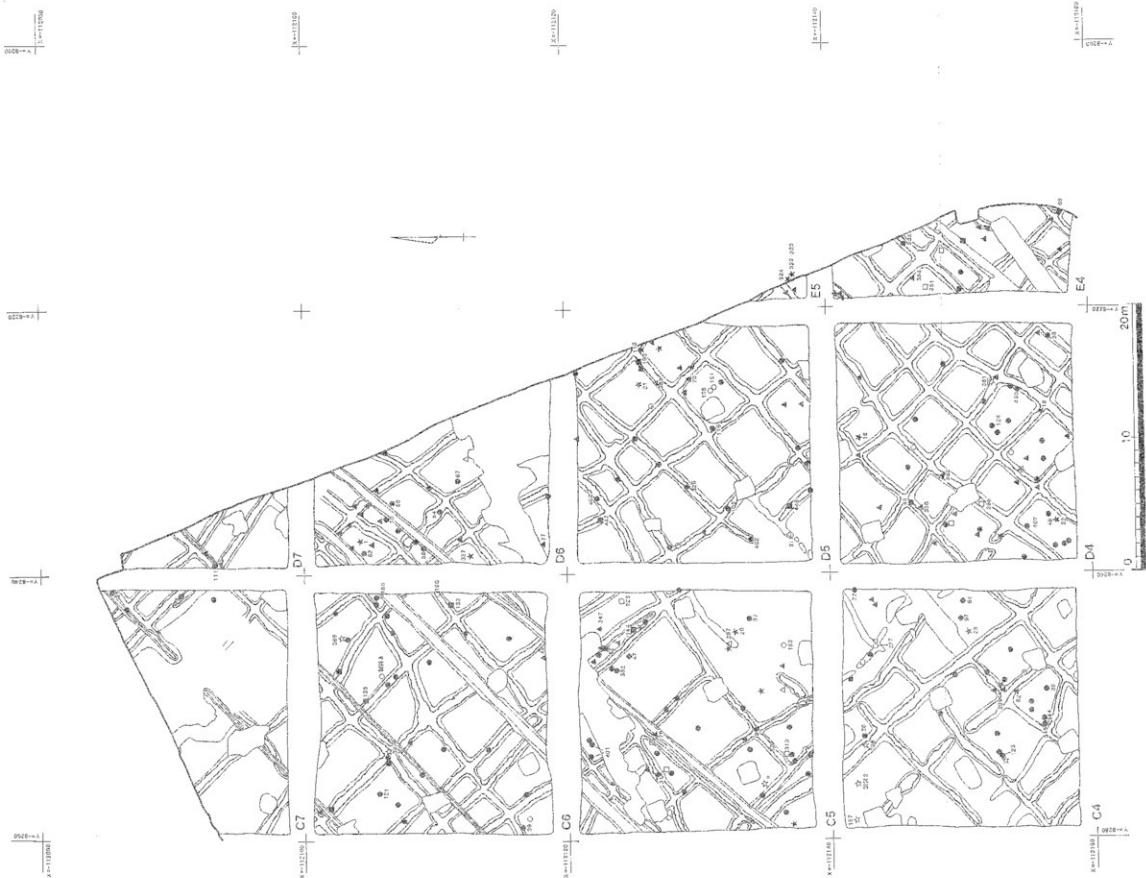
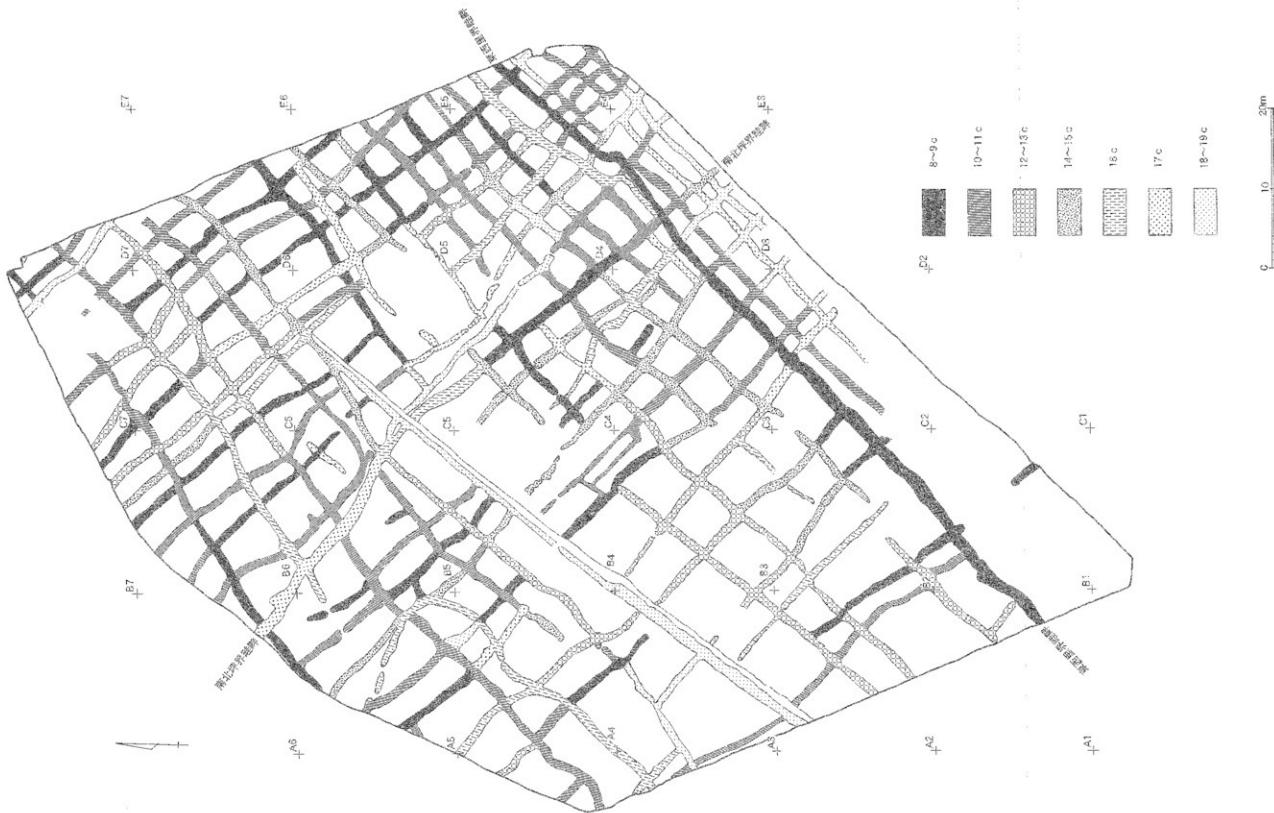




图48图 4区IV层出土遗物分布图

第49圖 IV層桂畔地帶類喉食題



- | | |
|-----------|-----------|
| ★ 7世紀 | ○ 14~15世紀 |
| ● 8~9世紀 | ☆ 16世紀 |
| ▲ 10~11世紀 | △ 17世紀 |
| ■ 12~13世紀 | □ 18~19世紀 |

IV層出土遺物のうち、第4章で掲載したものについてはドットの傍らに押印番号または写真図版番号を記した。前述のように、V層は出土遺物の時期的分布がIV層と同様の傾向を示すことから、V層およびその上下のIV下砂利層・V下砂利層出土遺物もまとめて扱った。また、第4章第4節で14C年代測定に供した炭化物のうち試料2はIV層出土であるが、参考のため、これのみ例外的に分布を示した（第47図）。調査区外周の排水溝やグリッドトレント掘削中にIV層より出土した遺物も出土位置を測量し、図化している。畦畔に重なって割り付けられたドットは、畦畔検出時に出土した「畦畔直上」または畦畔解体中に畦畔盛土より出土した「畦畔直下」のいずれかであり、各畦畔構築時期の上限を考える際に重要な指標である。調査区全域の水田跡を面的に見る限り、遺物の時期別分布に偏りや傾向がないように見えるが、一本一本の畦畔に着目すれば、包含される最新遺物の所属時期の多様性が看取される。

こうして、出土遺物の所属時期に方向等を勘索して各畦畔の施設時期を推定し、概念化したものが第49図である。グリッドトレント、土壠帶および擾乱で生じた畦畔の空白は推定復原し、調査区全域のIV層畦畔を塗り分けた。畦畔造成については、1本または1条の畦畔が部分的に補修されつつも当初の方向や規格を維持して代々伝えられる場合、一旦削平して同じ場所に造り直す場合、全く新しい場所に新設する場合の3類型が想定される。前1者は最初に施設されて以来変更されなかった畦畔であり、当遺跡で畦畔が最初に施設された時期とは条里制施行の時期に他ならず、第49図では8~9世紀に類別している。後2者については包含される最新遺物の所属時期を畦畔新設の時期と考えた。ところで、7世紀代の遺物が少なからず出土しているにもかかわらず、同時期に施設されたIV層畦畔の存在を認めなかつたのは、該期に水田が営まれていなかつたと考えたからではない。静清平野全域で実施されたと考えられている条里地割の東西基準線が古代東海道駅路であることはほぼ周知の事実であるが、この駅路の側溝から出土した須恵器坪身の8世紀第2四半期という所屬時期が駅路使用の上限とされている（及川1996）ことから、条里制の施行自体も8世紀を越える可能性はない。そして条里地割が実施されると、当時地表に多様な方向で現れていた畦畔や水路は尽く変更されてしまい、7世紀以來保持されてきた水田施設は消滅したと考えられる。IV層出土土器における8~9世紀資料の卓越も、該期における官府主導の徹底した地割改変作業を反映していると言えよう。

主要な畦畔の施設時期を見ると、東西里界畦畔はD3グリッド北部でくびれると考えざるを得ないものの、概ね条里地割本来の方向を保ち、全条8~9世紀に比定される。このことは、東西里界畦畔を含む調査区南部に堆積したIV層が新設階である事実に照らせば、IV層の新旧2段階の堆積は8~9世紀という比喩的短期間のうちに完了したことを示している。一方、南北坪界畦畔の施設時期は複雑である。律令期（8~9世紀）に施設された部分が維持されているのはC4・D4グリッドの4本のみで、この南側は条里本来の方向が保たれているものの、出土遺物から平安時代中期（10~11世紀）と室町時代（14~15世紀）に造り直されていることが分かる。さらにC4グリッド北西部・C5グリッド南西部・B5グリッド東部では戦国時代（16世紀）に改変されて蛇行し、ここより北の部分は江戸時代前期（17世紀）に大きく西偏して造られている。1・2区を横断する廻岸列石付畦畔は出土遺物や構成土壤から判断して江戸時代後期（19世紀）に比定される。

律令期に施設された畦畔で平安時代を通じて保持されたものは少ないため、交差する坪界・里界の畦畔が検出されたにもかかわらず、条里制施行当時の一坪内の水田小区画を復原することは困難である。

ただ、確かに該期の畦畔が平行して隣り合う状況が残存しており（B2グリッド東部～C2グリッド西部の南北畦畔2本、D6グリッド南部の南北畦畔4本）、辛うじて小区画の東西の一辺（畦畔の中軸どうしを結ぶ線分）が5.2～5.7mという数値が得られる。これは1町=60歩=107mとして、ほぼ3歩に相当し、一坪の東西辺を1/20ごとに区画することになる。これに対して、南北の小区画地割がどのようにであったかは全く不明である。それは、10世紀以降に施設された畦畔が、律令期の畦畔を踏襲して造り直したのか、或いは全く新しい場所に新設したのかを判断し難いことに起因する。そして、10～11世紀および12～13世紀に施設された畦畔は蛇行や弯曲が随所に見られ、隣り合う畦畔間の距離にもばらつきがあり、規格的な小区画を保持する意志は半ば放棄されたかのようである。

さて、IV層の堆積・利用時期の下限は12世紀、より新しくても出土した山茶碗の年代観から13世紀中葉までと考えられるが、それ以前に施設されたと推定される「IV層畦畔」についてどのように理解すべきであろうか。やはり、要似畦畔という概念で説明可能と考える。例えば、1区B5・B6トレント南西部西壁で検出されたIV層東西畦畔は第49図において施設時期を16世紀に比定したが、両下端付近に同じIV層土の巻き上げが顕著に認められる（図版9-2）。IV層上面が水田耕作面である時、耕作や畦畔造作による巻き上げ土が耕作面の上方へ独立した状態を保も得るはずがない。すなわち、このIV層上面の畦畔状の高まりはⅢ層水田の畦畔直下に形成されたいわゆる要似畦畔Bと考えるのが合理的である。要似畦畔Bとは、水田耕作の影響をさほど受けない畦畔直下において下層上面が畦畔状に残存したものとされている（斎野1967）が、畦畔の造成・整形作業により、逆に畦畔の両下端付近直下は他の水田面直下よりも顕著に影響を受け、耕作層中に巻き上げ痕や土層ブロックとしてその痕跡を留めるのである。このように明確な証拠を残すものはないが、14世紀以降に施設された「IV層畦畔」はⅡ層堆積時期にかけての連續的耕作で失われたⅢ層畦畔の要似畦畔Bと解釈できる。ただし、1・2区の護岸列石付畦畔はその南北周辺10m以内のⅢ・IV層を削平してIV層の「真畦畔」を造り出したものであることは第3章第4節で述べた通りであり、中・近世の畦畔では例外的な在り方と言えよう。

第2節 静清平野の広域条里制における本郷坪遺跡

本書では丘金北遺跡において検出された古代東海道駅路の遺構と本郷坪遺跡の坪・里界畦畔との関連性にたびたび言及してきたが、特に方角と距離が古代条里に果たして合致するのか否かを本節において検証し、併せて静清平野広域条里における当遺跡条里遺構の特徴について考察する。

丘金北遺跡の古代東海道駅路の測量SD202・SD203には南北に直交するように延びる2箇所の拡張部があり、各拡張部の中軸と北側側面SD203溝心線との交点間の距離が107mを測ることから、両拡張部は南北坪界線と考えられている。このうち、西側の交点（丘金北遺跡測量区のB2グリッドに位置する）の国土座標値は日本測地系でX=-113018.087、Y=-7548.447である。この点より静清平野古代条里の南北軸N-39°-Wの方向に北側へ1里=6町=642mの点とは、国土座標で北へ499m、西へ406mの点ということになる。すなわち、求められる点の日本測地系国土座標値はX=-113018.087+499=-112519.087、Y=-7548.447+406=-7954.447と算定される。一方、本郷坪遺跡において南北坪界畦畔と東西里界畦畔との交点の日本測地系国土座標値はX=-112519.920、Y=-7950.650となる。よって、実際の坪・里界交点は計算上の想定交点より南へ83.3cm、東へ379.7cm、直線距離で388.7cmの誤差で存在する。これらは前節において推定した条里水田小区画の一辺よりも小さい値で、やはり誤差と扱ってよい数値と考えられる。以上より、当遺跡で検出された南北坪界畦畔および東西里界畦畔が基本的に静清平野の古代条里地割の坪界線・里界線に合致することは明らかである。

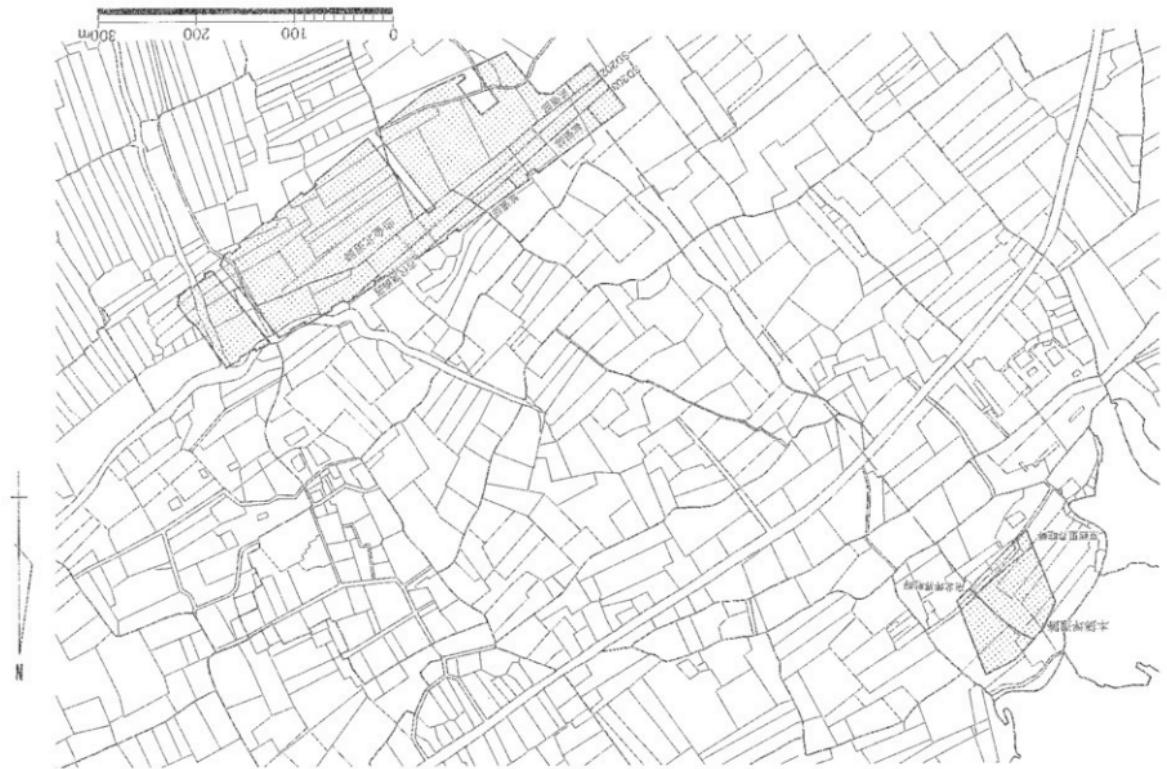
上記2遺跡の主張条里関連遺跡の対応関係と周辺地域の旧表層地割を併載したものが第50図である。旧表層地割については、矢田 勝氏が静岡平野北部の条里型地割の復原を試みており（矢田1990）、その復原作業の過程で作成された明治期の地割図を使用した。本郷坪遺跡の部分に注目すると、今回検出された東西里界畦畔の東半部はほぼ旧表層地割の東西線に重なり、律令制以来存続した水田境界線と言える。同畦畔の西半部は旧表層地割に合致せず、むしろ第49図で示した14世紀以降の擬似畦畔の東西軸の方向が旧表層地割のそれに近似する。南北坪界畦畔は17世紀に改造されて大きく西偏した形状まで旧表層地割に合致する。つまり、坪界・里界の交点は条里制施行以来近代に至るまで維持されていたと言えよう。周辺の旧表層地割を概観すると、当遺跡より東方の旧表層地割は古代条里の方向を保つものが多いが、西方の谷津丘陵南東麓の旧表層地割の多くは南北軸が真北より 50° 以上西偏している。一方、当遺跡では南北坪界畦畔を境としてその西側で西偏の著しい南北畦畔が多く、東側では小区画の規格性はどうもかくとして古代条里の方向に忠実な畦畔が多い。総じて、当遺跡の南北坪界畦畔を境に古代条里地割の方向を基本的に踏襲した東側地区と地割軸の改変の顕著な西側地区に分かれようであり、南北坪界畦畔自体も北西部は大きく西偏してしまっている。これは谷津丘陵のすぐ麓という地形上の制約の結果であるかもしれない。地割の改変は当遺跡から曲金北遺跡に至る南北約500m、東西約600mの領域においてより著しい。本郷坪遺跡調査区の南約50mまで、すなわち小字「本郷坪」の範囲内では南北の条里坪界線が旧表層地割においても保たれているが、これより南では曲金北遺跡の調査区まで南北条里坪界線はほとんど旧表層地割に反映されていない。また、この領域での地質には「軸」が存在しないかのように様々な方向に界線が走り、区画された土地のプランは多くが不整多角形となっている。理由を特定することはできないが、第2章第2節で触れたように、江戸時代の当地域における小私領の縮絃の結果、地割が頻繁に改変されたためかもしれない。なお、本郷坪遺跡の西側に連続する低地に駿河国府より東へ4里の南北里界線が想定されるが、これも旧表層地割にはほとんど痕跡を留めていない。

本郷坪遺跡で検出された坪・里界条里畦畔を他の小区画畦畔と区別して「大畦畔」と呼称してこなかったのは、單純にその断面規模のためである。奈良時代～平安時代前期に施設された里界・坪界線となる条里大畦畔は、静岡平野北部では池ヶ谷遺跡の大畦畔SK111が下端幅最大約7.8m、高さ最大46cmを測る（栗野ほか1992）のをはじめとして、下端幅2～5m、高さ10～30cmの規模が通例である。同平野南部でも、平安時代中期ではあるが鷹ノ道遺跡の「大畦」は下端幅4mを測り（注1）、本郷坪遺跡の東西里界畦畔・南北坪界畦畔とは歴然たる格差がある。また、里界線に沿う律令期の遺跡は第51図（注2）に示したように、寺院跡や宮衙関連遺跡等、施設の重要な遺跡（公的施設）が多い。このような状況の中で本郷坪遺跡の主要2畦畔は甚だ貧弱な印象を否めない。しかし、瀬名遺跡1区の平安時代前期に比定される東西坪界畦畔SK11901は補強施設を伴わない盛土のみの畦畔で、その規模は上端幅0.3～0.5m、下端幅0.7～1m、高さ3～8cmを測り（宮村ほか1992）、本郷坪遺跡の東西里界畦畔・南北坪界畦畔に近似する規模と形状である。従って、少數例ながら「貧弱」な条里坪界畦畔も存在することは確かである。

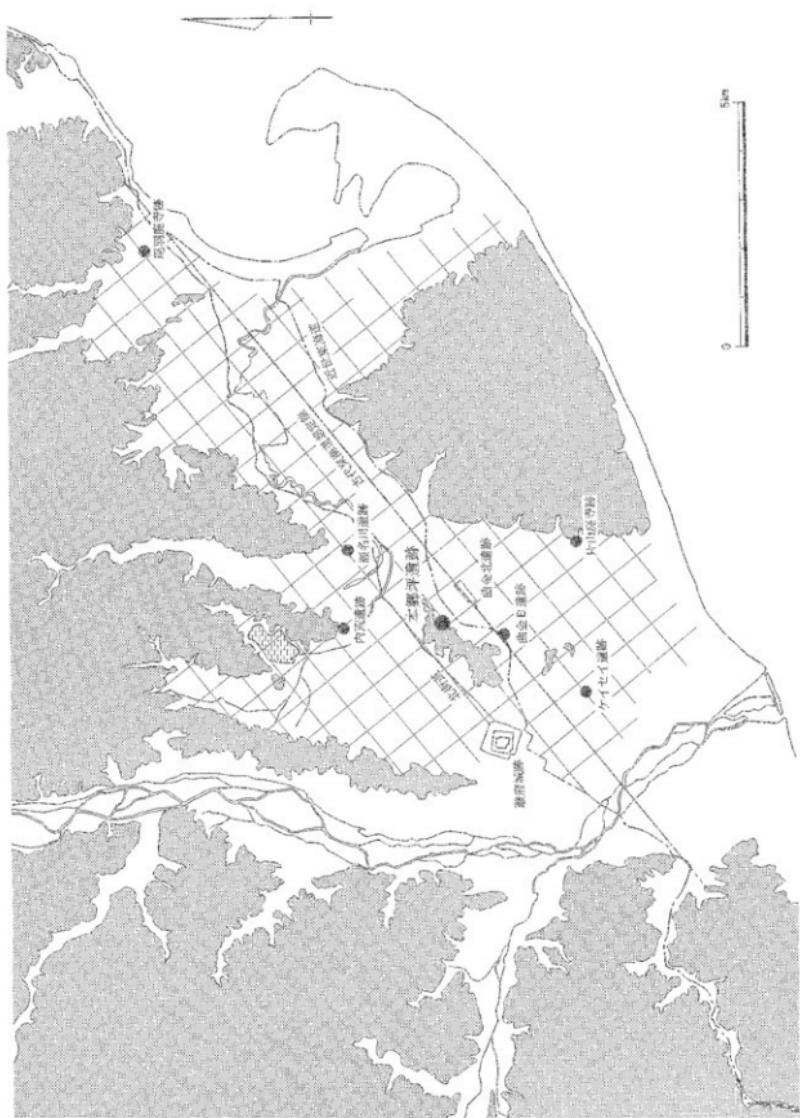
注

- 長谷川1992では「大畦」を含む水田区画の南北軸はN -28° Wと報告されており、南北軸 39° 西偏という官製条里がこの時期すでに遵守されなくなっていると考えられ、本郷坪遺跡の10～11世紀に施設された畦畔にもほぼ同様のことが当てはまる。
- 当図は矢田1997の図3を参考に作成した。

圖50 圖 田委會農地隊・输出土壤關係圖



第51図 神濟平野の広域条線(境界線)と古代東海道野路網定線



第6章　まとめ

今回の本郷坪遺跡の発掘調査で明らかになった、または推測される事象は年代順に辿ると以下のように叙述することができる。

古墳時代後期、安倍川の氾濫が終息し、洪水堆積物最上層の粘土層であるV層の堆積が完了した。同時に、有機質を多く含むIV層の堆積も進行し、長沼徹高塚後背の低湿地として安定した所へ漸次人々が造出し、水稻農耕を営み始めた。新たに開田するに際して地鎮の目的か、火を伴う祭祀が可耕地の外周で催されたようである。その痕跡が二次焼成の頗著な土師器壺身322～324であり、7世紀中葉に比定される。開田自体の年代的上限は7世紀初頭と考えられ、6世紀代まで遡る可能性は低い。

8世紀前葉には律令政府主導の条里創地割が諏訪平野で施行され、東海道駅路より北へ1里の距離で平行する東西里界線が通る当遺跡でもほぼ同時期に水田の地割が実施された。それまでおよそ1世紀にわたって営まれてきた水田区画その他の施設は尽く改変を余儀なくされ、僅かに北西～南東方向の溝1条がV層上面で遺存したに過ぎない。当遺跡において、現代まで遺構として残存するIV層畦畔で最古の一群は律令期の条里畦畔ということになる。IV層の地積も9世紀代までは完了し、以後、極めて安定した土壤の水田地帯が形成された。

平安時代中期（10～11世紀）、律令の条里地割が初めて大きく改変された。背景には律令国家からいわゆる王朝国家への変容に伴う水田經營主体（所有形態）の変化等の社会的要因と、谷津丘陵南東麓の地形・水利上の制約といった自然的要因の両方が想定できる。その後、12世紀頃までIV層畦畔はたびたび改変されたが、この時期までは南北坪界線および東西里界線は当初の方向が維持されたようである。

13世紀以降、当遺跡に新たな土壤であるII層が堆積し、中世期の畦畔が形成されるに至った。このII層畦畔は後世に削平されてしまったが、擬似畦畔Bとして下層のIV層にその痕跡を留めている。これらの畦畔には蛇行するものが多く、南北坪界畦畔まで蛇行した形状に改造された。畦畔を改造・新設する場所にもまとまりが見られず、東西里界畦畔は南北坪界畦畔との交差点より東で分岐するなど、極めて変則的である。しかし、いかに水田小区画が規格性を失おうとも、坪界・里界の畦畔を保持する意志は中世を通じて窺われる。これは、調査区西半部（2区）において東西里界畦畔が可耕地と不可耕地との境界に位置することや、南北坪界畦畔が地形上の制約を比較的大きく受ける地区とそうでない地区とを画すような位置にあるなどの自然的要因がむしろ大きかったと考えられる。

江戸時代には律令期以来の大規模な水田施設の改変が行なわれた。中世より存続したII層畦畔はほとんど全て削平され、特に3区では縱横に水路・集水池が造られた。従来の小畦畔による「田越し」一辻等の利水と訣別し、本格的な灌漑施設が造作された。就中、19世紀に施設された護岸列石付畦畔・溝状遺構は一直線の計画的なものであり、周辺のIII・IV層を一気に削平するという大掛かりな土木工事を敢行している。それでもなお、坪界・里界の畦畔が維持されたのは中世と同様の理由であったと推測される。こうして、近世から近代にかけて当遺跡の水田の生産力はかつてないほどに高まったであろうが、大正10（1921）年、三光紡績静岡工場の設立に伴い、歴史時代の曙光が差してこのかた當々と繰り返されてきた当遺跡の水田耕作は終止符が打たれるに至った。

本郷坪遺跡ではII～V層の包含層厚合計40～50cmという低湿地遺跡としては比較的薄い堆積で7世紀から19世紀までの1200年以上にわたる遺物が出土した。静清バイパス開通遺跡のように麻機低地を中心とする静岡平野北部は氾濫原（集水域）であるため、大規模かつ強固な畦畔が必要とされたのであろうが、同南東部は奈良時代以降ほとんど無堆積に近い状態で近代に至るまで耕作が続けられたと指摘されている（矢田1997）。当遺跡は静岡平野中央部といってよい位置にあり、例え薄くても複数の包含層が

堆積し「無堆積」でない点は静岡平野北部と同南部との中間的な在り方とも考えられるが、各水田層間に洪水堆積等の中間層を差し挟まず、層位を越えて時代の異なる遺物が混在する点では「南部的」な様相であると評価できる。

自然遺物では、当初「振り瓶」ではないかと思われた炭化米塊が分析の結果、初穀を含む發酵・炭化したイネの種子の塊であることが判明し、14～15世紀頃という実年代も得られた。さらに、この塊は中世の静岡平野で熱帯ジャボニカが栽培されていた証拠の最初の事例となった。また、Ⅲ・Ⅳ層より馬齒3点、桃核29点が出土したが、当遺跡周辺地域の作物の多様性や家畜の所有形態以上に、水田跡にこれらが存在すること自体に特殊な事情を窺うことはできないであろうか。すなわち、豊穣等を祈願する祭祀がこれらの自然遺物を用いて行なわれた可能性である。前述の一括出土の土師器坏身をはじめ、中・近世までのあらゆる時期に二次焼成痕のある土器片が見られることも、この種の祭祀開催の傍証となると考えられる。他の人工遺物では、純然たる水田跡にもかかわらず多種多量の土器・陶器片が得られたが、一方、木製品は僅かであり、特に農耕具が皆無という事実は水田遺跡として奇異に見えるが、水田跡で発見される農具の大半は畦畔の補強のために芯材として二次利用されたものであり、当遺跡は専ら盛土のみの畦畔であるため、このような出土状況は期待できない。また、古墳時代後期の開田から近代に至るまで一度も耕作地として放棄されたことがないので、農具も放棄されず、全て耕作者の居住域に回収されたと想定される。過去に調査された静清平野の低湿地諸遺跡と較べての、本郷坪遺跡に見られる遺構・遺物の特異な在り方は、長期間に及ぶ耕作の連續性に帰せられる所が大きいと考えられる。

あとがき

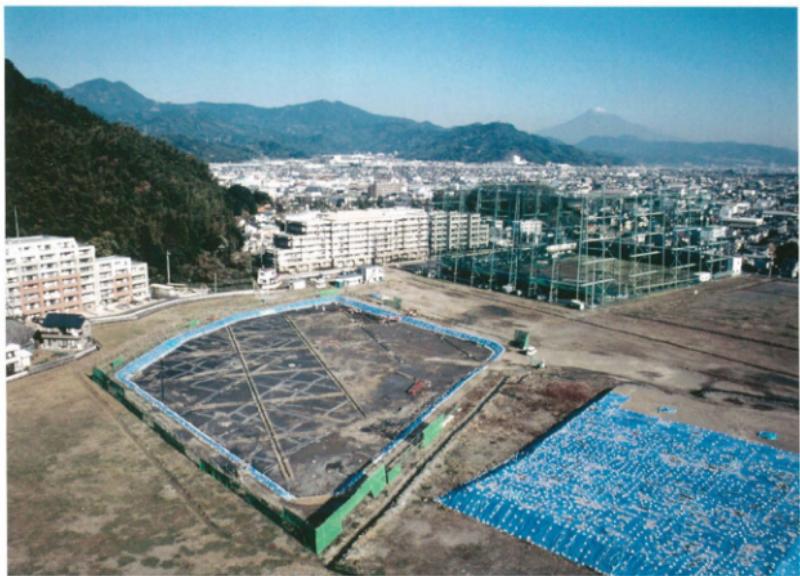
本書に掲載した中・近世の施釉陶器・磁器について藤澤良祐氏（愛知学院大学教授）の鑑定を受け、有益な御指導を賜りました。また、鈴木悦之氏（静岡市教育委員会）には静岡市内諸遺跡出土瓦の検討をはじめ、現地調査においても貴重な御教示を頂きました。ここにご両人の御芳名を記し、感謝申し上げます。

参考文献

- 阿部正信1843／中川芳雄・安本 博・若尾俊平（編）1976『駿国雜志』吉見書店
- 岩野見司1974「清郷遺跡」『新編一宮市史』資料編四 一宮市
- 及川 司ほか1996『曲金北遺跡（遺稿編）』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第68集 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 小笠原好彦・西 弘海1976「土器」田中 琢・佐原 真（編）『平常宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊 奈良国立文化財研究所
- 加藤理文1999『元島遺跡I（遺物・考察編I～中世I）』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第116集 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 川江秀季1979「静岡県下の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム2 須恵器—古代陶質土器—の編年』静岡県考古学会
- 川江秀季1992「須恵器の編年」『静岡県史』資料編3 考古三 静岡県
- 北村和宏2001「古代「三河型甕」考」『研究紀要』第2号 勅愛知県埋蔵文化財センター
- 栗野克己ほか1992「池ヶ谷遺跡 遺構編I」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第38集 勅静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 湖西町教育委員会1966『大沢川尻古窯調査報告書』
- 斎藤孝正1989「灰釉陶器の研究II」『名古屋大学文学部研究論集』104 名古屋大学文学部
- 斎野裕彦（編）1987『富沢一富沢遺跡第15次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集 仙台市教育委員会
- 鈴木悦之2002『長沼遺跡第2次発掘調査報告書』静岡市教育委員会
- 鈴木敏則2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」賤 元洋（編）『須恵器生産の出現から消滅—兼投窯・湖西窯編年の再構築』第1回東海土器研究会資料第5分冊 補遺・論考編 東海土器研究会
- 竹内理三（編）1982『角川日本地名大辞典』第22巻 静岡県 角川書店
- 山田昭三1981「須恵器大成」角川書店
- 永井宏幸1996「清郷型鍋再考」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報』平成7年度 勅愛知県埋蔵文化財センター
- 中野晴久1995「常滑・瀬美」中世土器研究会（編）『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中野晴久1997「瓷器系中世陶器の生産」『御嶽戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯 勅嶽戸市埋蔵文化財センター
- 中野 宏1989「静岡市」及川 司・鈴木良幸（編）『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』静岡県文化財調査報告書第42集 静岡県教育委員会
- 植崎彰一1961「須恵器」浅野 清・小林行雄（編）『世界考古学大系』第4巻 日本 歴史時代 平凡社
- 西 弘海1978「土器の時期区分と型式変化」宮沢智士・小笠原好彦（編）『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書II』奈良国立文化財研究所学報第31冊 奈良国立文化財研究所
- 新田 洋1985「平安時代～中世における煮炊用具—「伊勢型」鍋—に関する若干の観察」『三重考古学研究』1 三重考古学談話会
- 野末浩之1988「愛知県内における11～13世紀の煮沸形態」『愛知県陶磁資料館研究紀要』7 愛知県陶磁資料館

- 長谷川秀厚1992「膳ノ道遺跡（第2次）」『静岡市の埋蔵文化財発掘調査の概要』平成2年度 静岡市教育委員会
- 藤澤良祐1991「瀬戸古窯址群Ⅰ—古瀬戸後期様式の窯年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐（編）1993『瀬戸市史』陶磁史篇四 瀬戸市
- 藤澤良祐（編）1998『瀬戸市史』陶磁史篇六 瀬戸市
- 藤澤良祐2002「瀬戸・美濃大窯窯年」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯 制瀬戸市埋蔵文化財センター
- 前川一要1984「猿投窯における灰釉陶器生産最終末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館紀要』Ⅱ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 松井一明1989「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」及川司・鈴木良孝（編）『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告書）』静岡県文化財調査報告書第42集 静岡県教育委員会
- 松井一明1993a「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』No.25 静岡県考古学会
- 松井一明1993b「久野城跡出土の陶磁器・土師質土器が提示する諸問題」加藤理文（編）『久野城IV』袋井市教育委員会
- 官村典雄ほか1992「瀬名遺跡I（遺構編I）」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第40集 制静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 森郁夫1986『瓦』考古学ライブラリー43 ニュー・サイエンス社
- 森田勉1982「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 安本博（編）1974「静岡中心街誌」静岡中心街誌編纂委員会
- 安本博（編）1984『千代田誌』千代田誌をつくる編集委員会
- 矢田勝1990「静岡平野北部における条里型地割の復原と立地環境の変遷」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第3号 制静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 矢田勝1997「条里の広域施行時期と変遷過程についての試論—静岡平野における律令期統一条里造構の調査が投げかける諸問題—」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第5号 制静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 山下峰司1995「灰釉陶器・山茶碗」中世土器研究会（編）『概説 中世の土器・陶磁器』真鍋社
- 山村宏ほか1968「遠江の須恵器生産」『古代学研究』第50号 古代学研究会

写 真 図 版



1 本郷坪遺跡遠景（南南西より）



2 1・2区全景（北東より）



1 3・4区全景（南東より）



2 3・4区水田跡検出状況（北より）



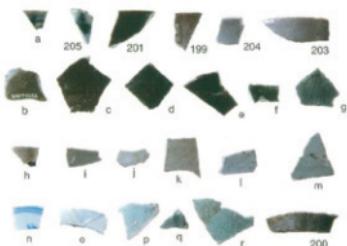
1 3区E5グリッド
東側排水溝V層下砂利層
土師器壊身出土状況



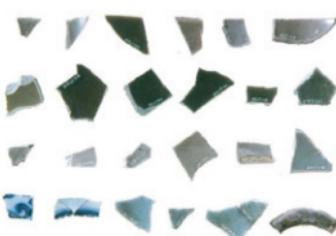
2 船載磁器 青磁碗



3 船載磁器 白磁碗206

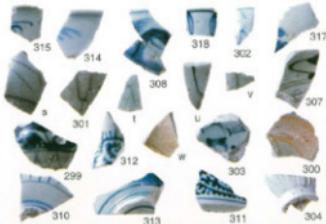


4 その他の船載磁器（外面）



5 その他の船載磁器（内面）

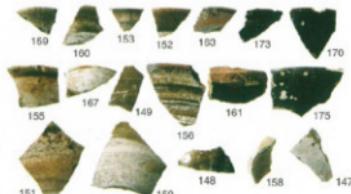
図版4



1 国産磁器



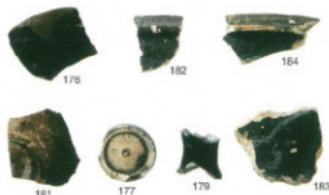
2 古瀬戸 天目茶碗・綠釉小皿



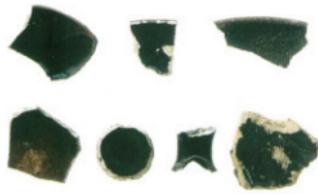
3 その他古瀬戸製品（外面）



4 その他古瀬戸製品（内面）



5 大室期瀬戸・美濃製品（外面）



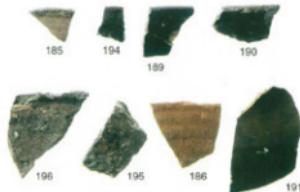
6 大室期瀬戸・美濃製品（内面）



7 志戸呂丸皿187



8 志戸呂丸皿192



9 中世志戸呂・初山・常滑製品（外面）



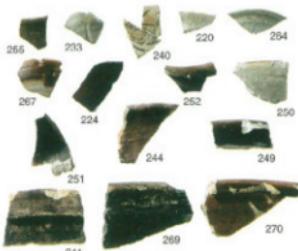
10 中世志戸呂・初山・常滑製品（内面）



1 近世瀬戸・美濃天目茶碗・鋲猪口・灯明受皿



2 近世志戸呂製品 完形復原・底部



4 近世瀬戸・美濃製品口縁部（外面）



6 近世瀬戸・美濃製品底部（外面）



8 その他近世志戸呂製品（外面）



3 志野丸皿 207



5 近世瀬戸・美濃製品口縁部（内面）



7 近世瀬戸・美濃製品底部（内面）



9 その他近世志戸呂製品（内面）



1 1区
水田跡検出状況
(南西より)



2 1区
南北坪界畦畔
検出状況
(北西より)



3 1区B4グリッド
護岸列石付溝状遺構
完掘状況
(東南東より)



2区 東西里界桂畔焼出状況（西南西より）

図版 8

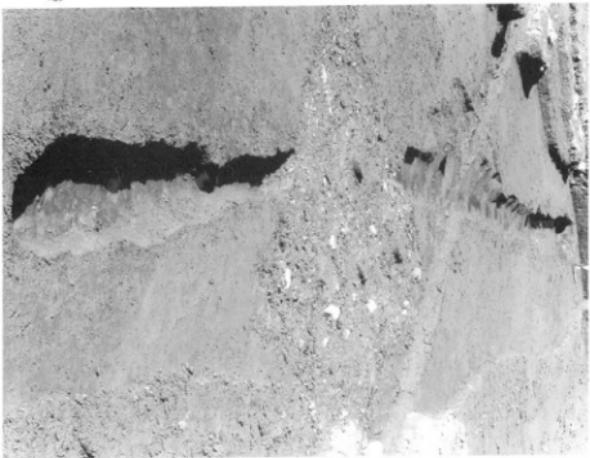
1 1区B5グリッド
南北界縫断面トレンチ
北壁セクション
(南東より)



2 2区B1・2グリッド
東西里界縫断面トレンチ
東壁セクション
(南東より)



3 2区B2・3グリッドV層
溝状選擇完屈状況
(南東より)

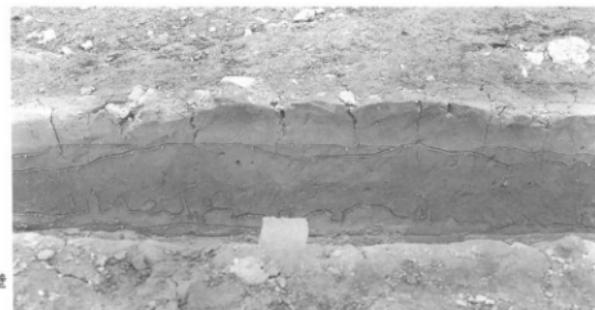




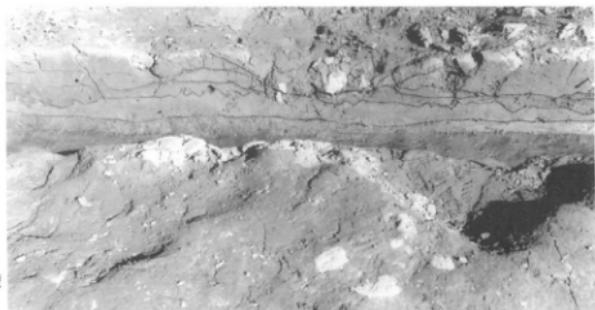
1 1区A5・B5トレンチ北壁
南北畦畔検出状況



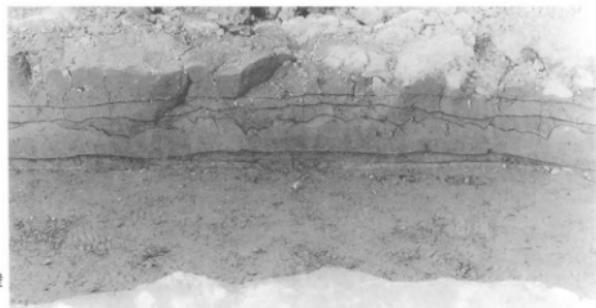
2 1区B5・B6トレンチ西壁
東西畦畔検出状況



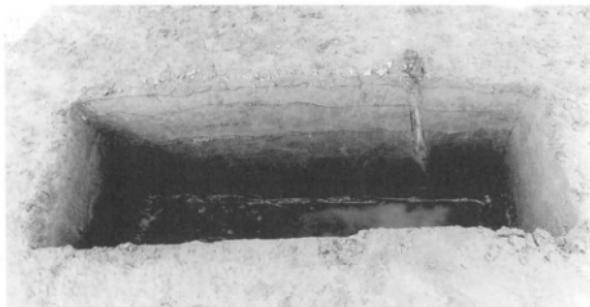
3 1区B6・B7トレンチ西壁
南北坪界畦畔検出状況



4 3区C5・C6トレンチ東壁
南北坪界畦畔検出状況



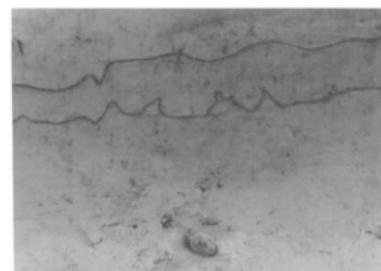
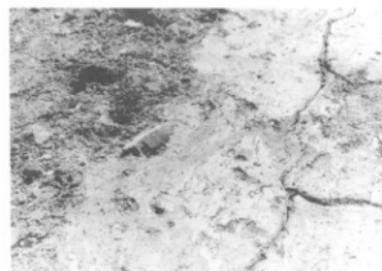
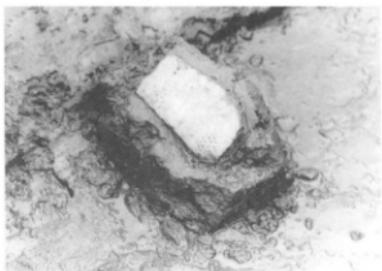
1 3区C5・D5トレンチ北壁
南北塙界畦畔検出状況



2 3区D4グリッド
南北塙界断割トレンチ
北壁セクション
(南東より)



3 1区B4グリッド
護岸列石付畦畔・溝状遺構
断割トレンチ
東壁セクション
(南西より)

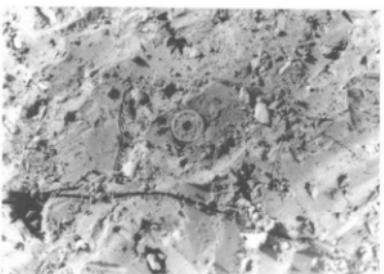




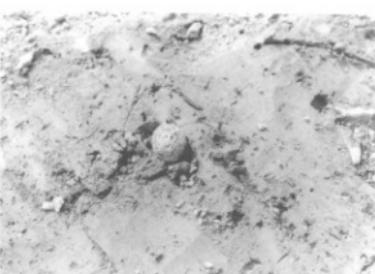
1 2区A3グリッド護岸列石付溝状遺構
鉄製品446出土状況



2 3区C5グリッドⅢ層 煙管雁首413出土状況



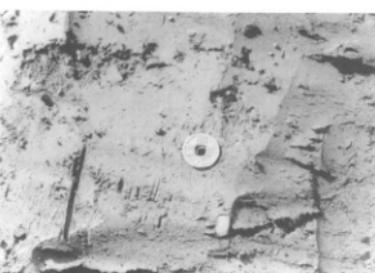
3 3区D5グリッド南北畦畔直上
黒寧元寶448出土状況



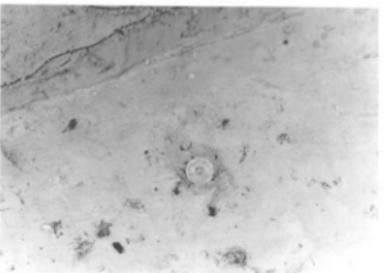
4 3区D4グリッド南北畦畔直上 桃核出土状況



5 3区D5グリッドIV層 馬齒出土状況



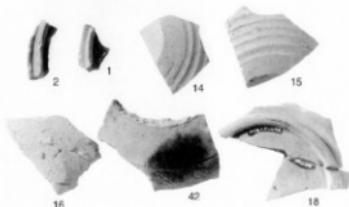
6 3区D5グリッドV層 開元通寶447出土状況



7 4区C3グリッドⅢ層 元豊通寶451出土状況



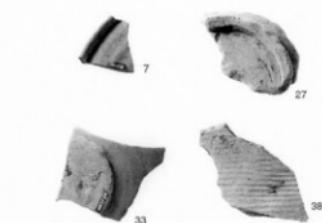
8 3区D4グリッド東西畦畔直下
横槌458出土状況



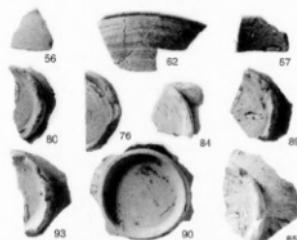
1 古墳時代 須恵器



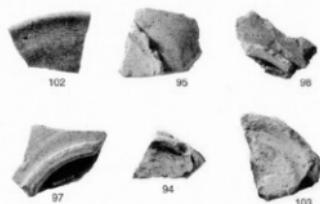
2 律令期 須恵器底部



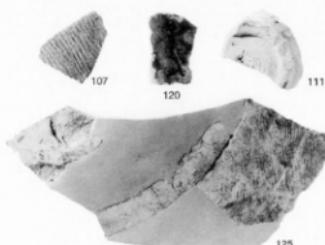
3 その他律令期 須恵器



4 灰釉陶器 碗



5 灰釉陶器 盆・小碗



6 灰釉陶器 壺・甕



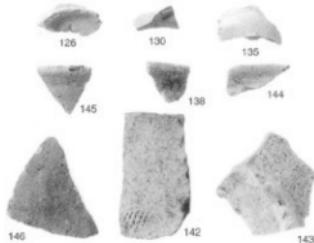
7 灰釉陶器 盆 96



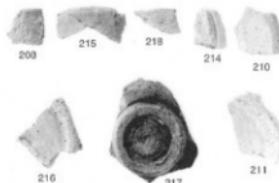
8 灰釉陶器 碗転用品 74



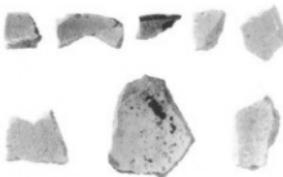
1 山茶碗 小皿・壺・碗



2 その他山茶碗



3 志野製品 (外面)



4 志野製品 (内面)



5 古墳時代 土師器坏身



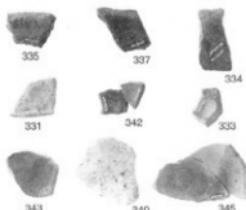
6 その他古墳時代 土師器



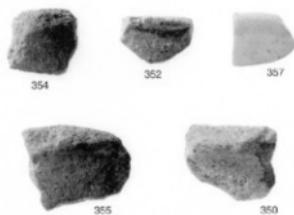
7 奈良時代 土師器
坏身 330



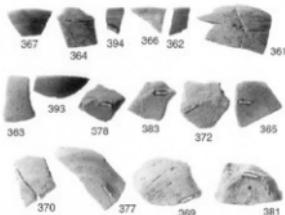
8 平安時代前期 土師器
駿東型坏 344



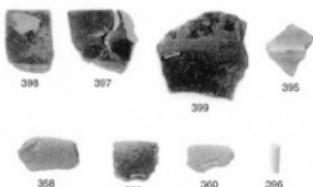
9 その他律令期 土師器



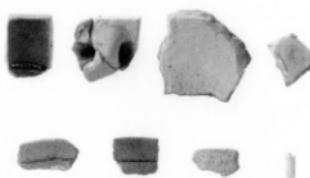
1 平安時代中・後期 土師器



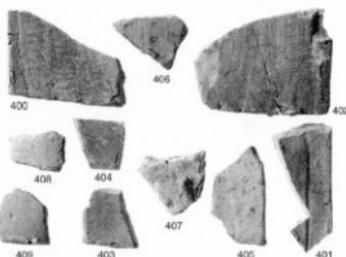
2 土師質土器 カワラケ



3 土師質土器 鍋・その他（外面）



4 土師質土器 鍋・その他（内面）



5 瓦（上面）



7 土師質土器 カワラケ 368



8 磁石 457



6 瓦（下面）



9 挽物 460



1 横櫛 461



2 杖状先端・自在鉤・著 463
459
462



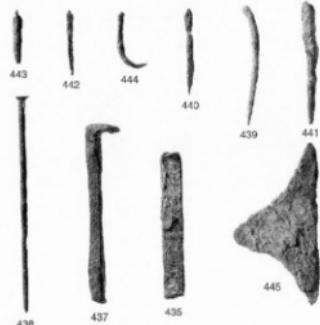
3 横櫛 458



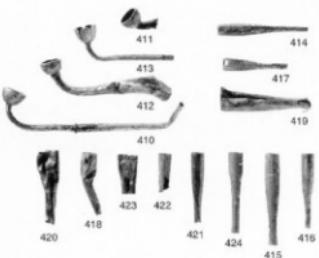
4 扁平管状鉄製品 446



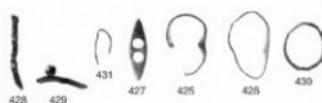
5 鉄製刀子・鑓・鉄滓 433
434
432
435



6 その他鉄製品 436
442
443
444
445
446
447
448
449
450



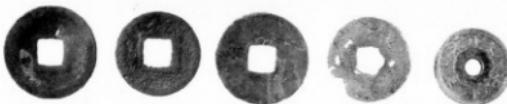
7 煙管



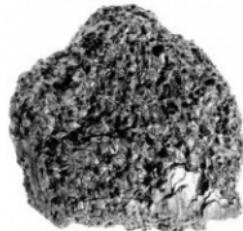
8 その他銅製品



1 銭貨（正面）



2 銭貨（背面）



3 质化米块

報告書抄録

ふりがな	ほんごうつほいせき							
書名	本郷坪遺跡							
副書名	平成16年度総合科学技術高校（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第164集							
編著者名	大林 元							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-3002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL 054-262-4261㈹							
発行年月日	西暦2005年12月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
本郷坪遺跡	静岡県静岡市葵区 長沼地内	22201		世界測地系	20040701 ~ 20050331	10,000m ²	学校建設	
				34° 133° 59' 24' 21' 35'				
				日本測地系				
				34° 133° 59' 24' 10' 46'				
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
本郷坪遺跡	生産域	古墳時代後期	漬状遺構	土師器、須恵器、灰釉陶器、 山茶碗、瓦、刀子2横槌1、 植物種子、獸齒				
		奈良～ 平安時代	水田跡（桑里畦畔）	土師器、須恵器、灰釉陶器、 山茶碗、瓦、刀子2横槌1、 植物種子、獸齒				
		中世	水田跡（擬似畦畔）	山茶碗、旋輪陶器、舶載磁器、 土師質土器、錢貨5、 鐵滓1、磁石1、炭化米、 植物種子、獸齒、着1、杭1				
			近世	水田跡（擬似畦畔、 護岸列石付畦畔・ 溝状遺構、水路）	陶磁器、土師質土器、錢貨 2、鑿1、釘6、蛭管15、 黃金2、留金1、釣針1、 扁平管状鉄製品1、螺旋口 の口金1、横槌1、挽物1			

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第164集

本郷坪遺跡

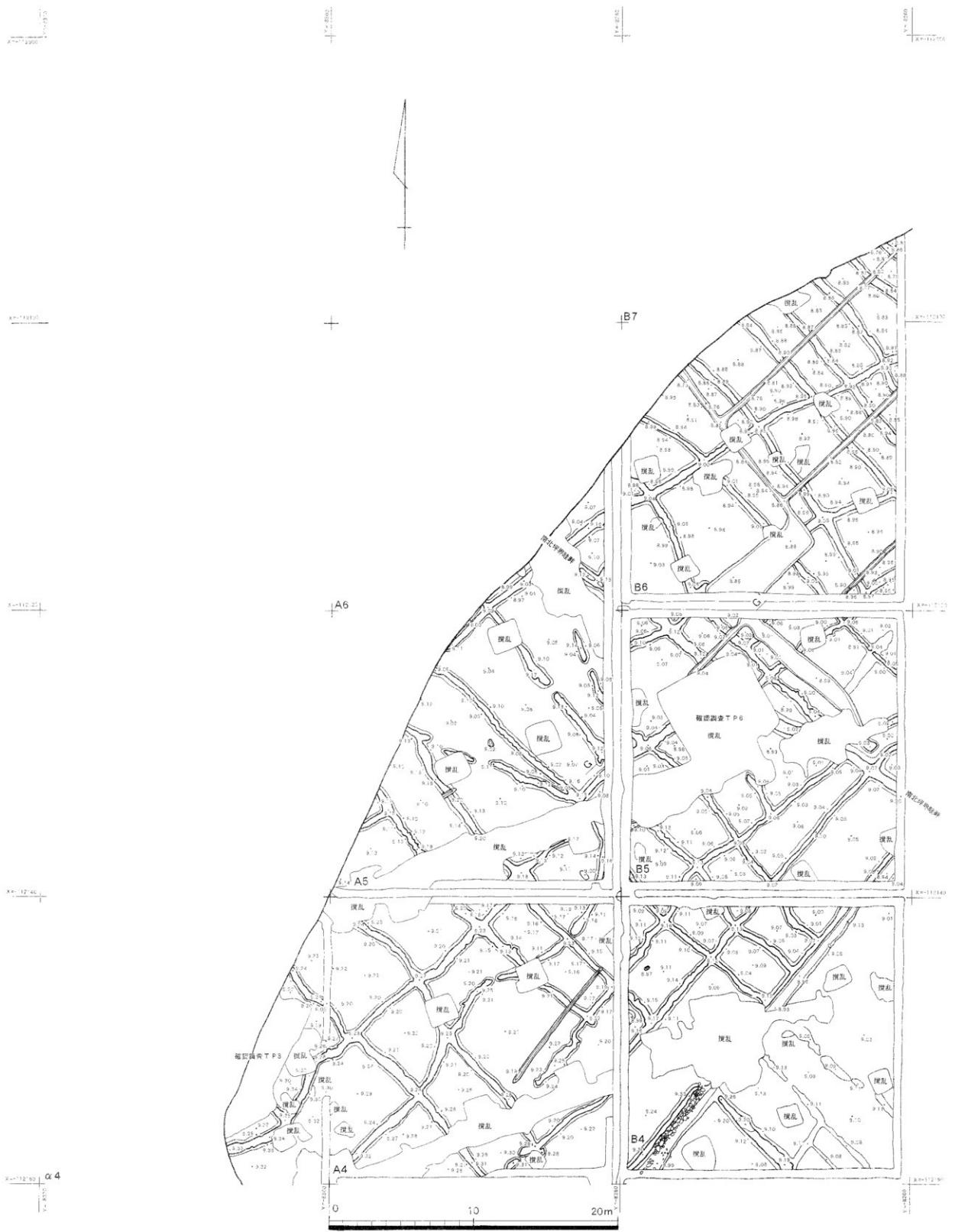
平成16年度総合科学技術高校(仮称)建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

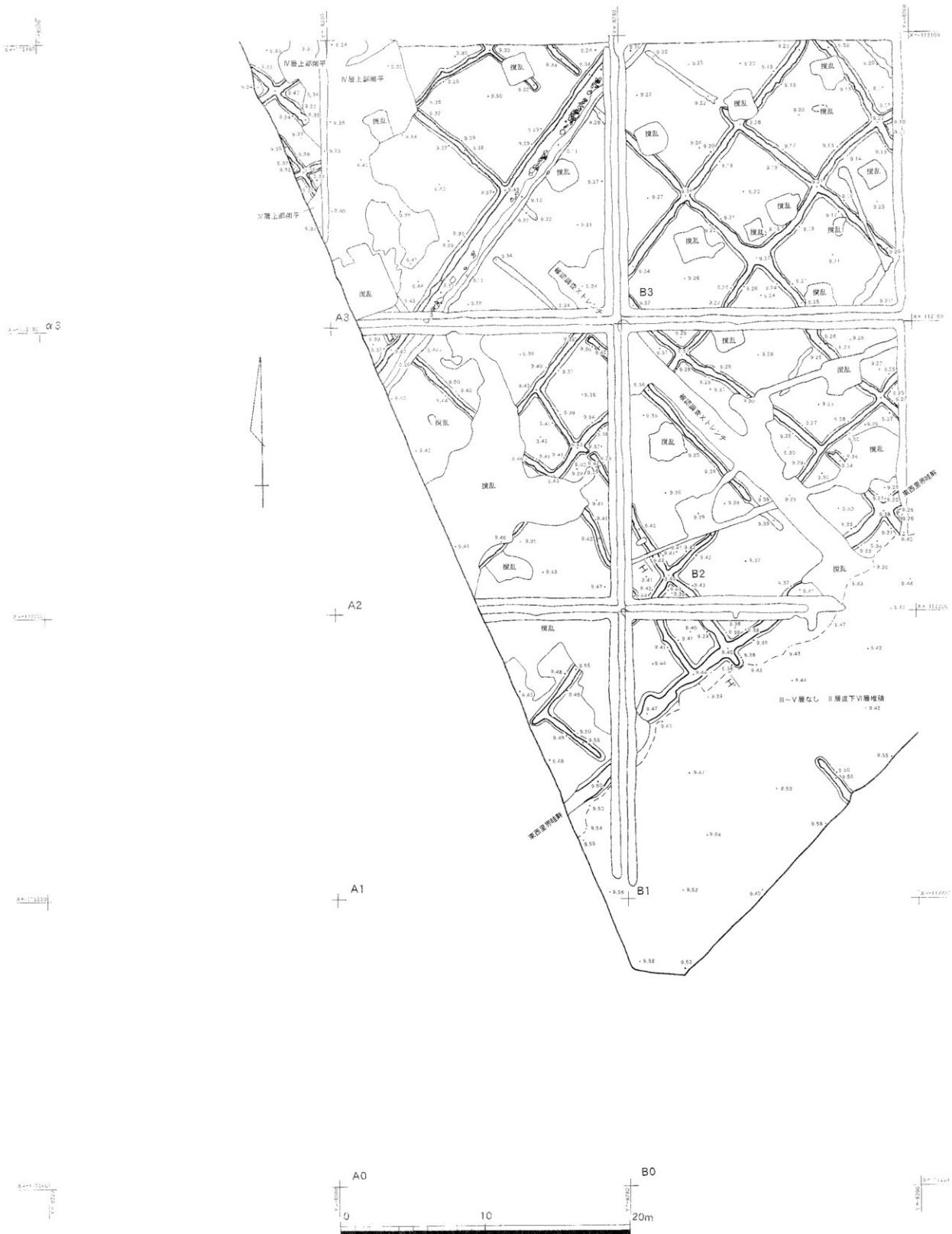
2005年12月20日発行

発行所 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県磐田市駿河町谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹

印刷所 みどり美術印刷株式会社
〒419-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839㈹



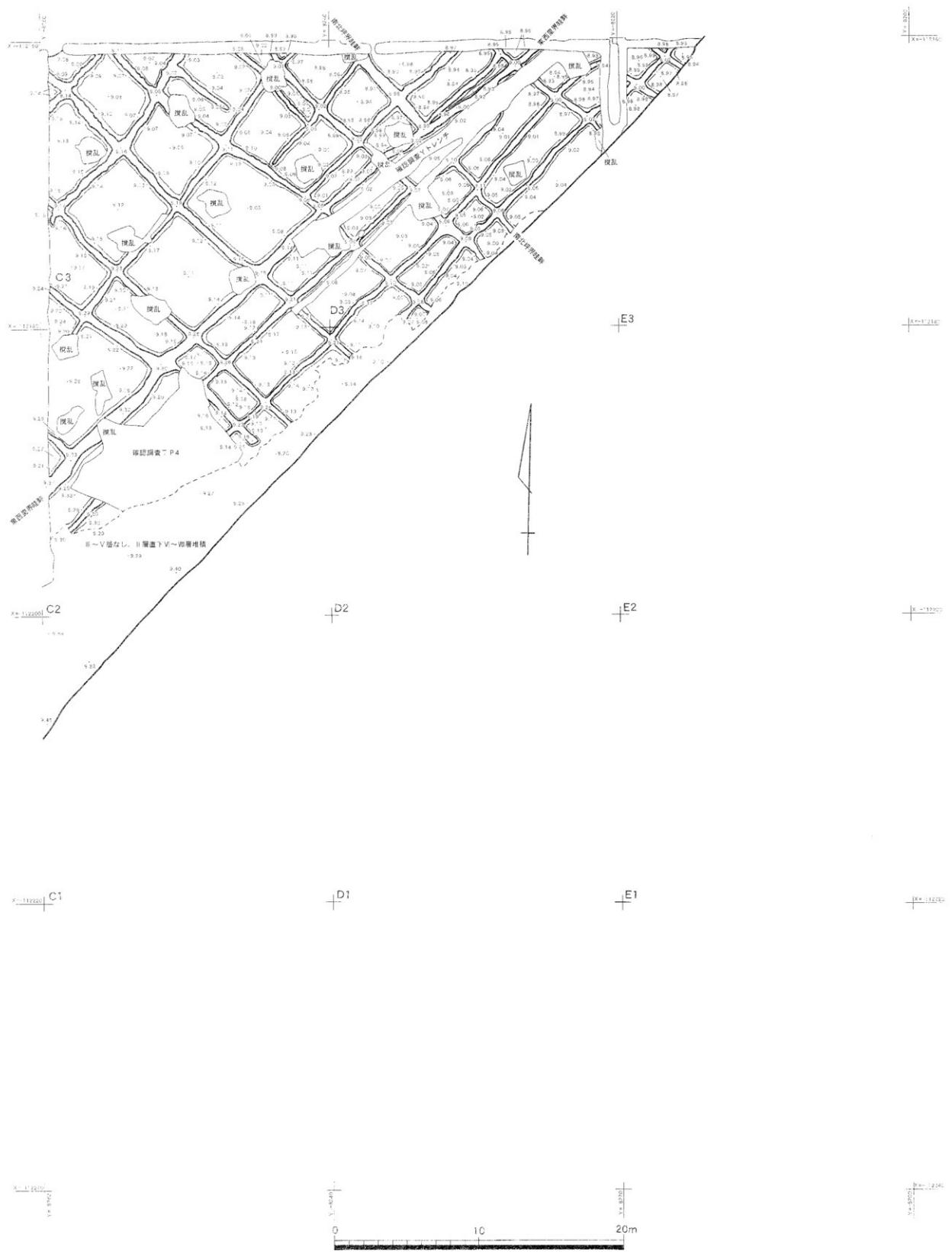
第8図 1区造構平面図



第9図 2区遺構平面図



第10図 3区遺構平面図



第11図 4区遺構平面図

